
けしもの屋日誌

樽みのり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けしもの屋日誌

【Nコード】

N0743I

【作者名】

樗 みのり

【あらすじ】

結城彩少年の丁稚奉公先 百彩堂 は、またの名を けしもの屋 という変わった文房具屋。そこに集う人外の仲間と、ちよつと不思議な出来事を綴った、のんびり妖怪譚。 不定期更新です。

0 「僕の夢は？と聞かれたら」

0 「僕の夢は？と聞かれたら」

「将来の夢は？」

大人が子供に聞いたがる話題のひとつだ。

幼年のうちならば、「魔法使い」「正義の味方×××」「秘密戦隊 マンの」などと、空想上の産物や、荒唐無稽な物語の登場人物を挙げて、尋ねた大人達は微笑ましく聞いてくれるのだろう。

ある程度成長した段階で、「野球選手」「プロサッカー選手」「お医者さん」「宇宙飛行士」「凄腕の刑事」などと、多少現実味を帯びた回答をするようになってくると、「そうか。じゃあ夢に向かって頑張らなきゃね」と、励ましの言葉を添えて、頭を撫でてくれるだろう。

しかし僕には、「将来の夢」の回答選択肢が、最初から与えられてはいなかった。

「彩君は、お父様の会社を継ぐんだものね」

「お父さんの後を継ぐために、彩君は毎日お勉強頑張っているものね。偉いわ」

僕の将来については、このツィ・パターンの一方的台詞で、問答

なしに終結していた。

故に、僕は「将来の夢」なるものを、思い描いた事がない。
と、いうより、考えた事もなかった。

まあ、それも仕方ないことだと思う。

何と言っても、僕は結城財閥総帥結城彩人の一人息子なのだ。

銀行、病院、高級ホテルから下町の八百屋に至るまで、系列企業は三桁に及ぶ、大財閥の御曹司なのだから、周囲の人々が僕をそのような目で見るのは、至極当然と言うものだろう。

おかげで、煩わしい無意味な会話をせずに済み助かってはいたものの、世の中のお子様が、子供らしい無邪気な夢を描いていた時代に、僕は、経営論や販売戦略などの話題で盛り上がる大人達の中にぼつんと紛れ込み、夢一杯とはとても言えない話ばかり（話している叔父上方には、夢一杯だったのだろうけれど）を、聞かされ育った。

そんな環境下で、子供らしい夢を描けという方が、僕に言わせれば難しいというものだ。

だけど人生、何が起こるか分からない。

昨秋中等科に上がった僕は、とあるきっかけから、「将来の夢」を見つけてしまった。

しかも、他人には言えない、秘密の夢、なりたい職業。

何の職業かって？

それは、けしもの師 という専門職だ。

この けしもの師 という仕事、世間的にはマイナーな職業という以前に、職務内容を説明したならば、確実に心療内科の受診を勧められるであろう、摩訶不思議の世界に属する仕事なのだ。

平たく言えば、「魔法使い」や「呪術師」の親類縁者のような職

業。詳しくはまだ僕も理解が行き届いていないので、解説は、今はこれくらいで差し控えたい。

けれど、摩訶不思議だろうが人外魔境だろうが、僕はこの仕事のプロフェッショナルになりたいと思った。

否。なると決めたのだ。

初めて抱いた「将来の夢」実現のため、僕は師匠と仰ぐ人の店で既に弟子入り奉公をさせてもらっている。

善は急げというし、けしもの師はかなりの専門職。その知識を理解し技術を体得するには、相当の時間を要すると思われる。

そこで、お師匠に無理を言って受け入れてもらったのだ。

そんなにも固い決心なら、何故他人に内緒で秘密なのか？と、問われるかもしれない。

この歳になって、そんな空想の産物のような、怪しげな職業に就きたいんです、と宣言するのが恥ずかしいから、という訳ではない。

弟子入りの際の誓約書に

《当店で知り得た事、一切他言無用》

と、書かれているからだ。

1 「奉公先紹介」

1 「奉公先紹介」

六月十五日金曜日 曇り一時雨

八タキを手に、外の様子を確認に出た。

「もう少しであがるかな？」

海角の奉公先に着いた途端、大粒の雨が降り出した。あと五分到着が遅くなっていたら、ずぶ濡れになっていたところだ。

日頃の行いが良いと、天の神様も配慮をしてくれるらしい。

僕が暮らす天堂島は亜熱帯に近く、よく雨が降る。雨期である現在の雨量は半端でなく、この雨も、一時は一メートル先も霞むほどの土砂降りだったけれど、ようやく小さな雨粒がまばらに落ちる程度になってきた。

入り口前の石畳に、大きな水溜りが出来ている。もしお客が来たら、足下が濡れて不快な思いをされるかもしれない。止んだら水を掃き散らさないといけない。

もつとも、お客が来る確率は、白いカラスが生まれるのと同じ位、低いと思うのだけど。

古い木製ドアを開けると、真鍮製のドアベルがカラランと年季を感じさせる音を立てる。

ため息交じりに、静かな店内を見渡す。

「本当に、いつも、静かな店だよね」

白い壁に黒い石の床。天井の太い梁や、意匠をこらした窓枠や扉の透かし彫りは、年代を感じさせるシックなセピア調。

とても古風で趣きある、奥へと長い店内には、扉や窓と同じ材質の会計台と陳列棚が二列あるだけ。緩やかに回る天井扇が、この店では唯一、休むことなく働き続けている。

創業四百有余年。知る人ぞ知る、文房四宝の老舗 百彩堂 も、電脳化の進んだ当世、時代の荒波に揉みに揉まれて流されて、海の藻屑となる寸前の経営状態だ。

そんなわけで、丁稚奉公の僕には給金という物はない。貰う気は元よりないし、貰う必要もないけれど、お師匠はそれを非常に申し訳なく思っている様子。お師匠は、押しかけ弟子の僕にも優しい紳士だ。

「商才は、無さそうだけど……」

何代目の店主かは知らないが、お師匠こと玄青老板げんせいしんちやうは、店での取り扱い品を「消しもの」のみに絞っている。

消しもの。つまりは、消しゴムだ修正液だといった、消すための道具。

そんなわけで、現在では 百彩堂 という本来の屋号より、けしもの屋 という微妙なあだ名の方が知られている。

百彩堂 は文具屋なのだから、それはそれで誤った選択ではないと思うし、世界中から多種多様な 消しもの を集めれば、それはそれで面白い、とは思う。

しかし、店内には何故か、文房具というには無理のある品々まで同時陳列されている。

例を挙げれば

ペンキたらい（これはまだ文具の範疇はんちゆう）、洗剤に漂白剤、ハタキ、雑巾、盥たらいに洗濯板、マッチにライター（燃やして消せ、という事だろうか……）シュレッダーしゅれつたーに団扇うちわ（粉碎して風で飛ばせと……）その他諸

々。

この品揃えでは、どちらかというところ（冴えない）雑貨屋だと思っただけで、お師匠は「これは全て消しものだよ」と、にこやかに言うので、弟子の僕が差し出がましいことを言うべきではない、と思う。

「とはいってもさ、いったいこの商品。何年前から動いてないんだ？」

ため息を吐きながら、商品にハタキをかける。掃除をする時間は、いつも嫌というほどあるので、念入りに磨きまでかけられる。お陰で、今の店内に汚れはないと断言できる。が、僕がこの店に始めて来た時の光景は、今でも忘れられない。

「五センチ、は降り積もってたよな、埃」

埃だけではない。天井の隅から隅まで張り巡らされた蜘蛛の巣。それにぶら下がる虫の死骸、棚の隅でひっくり返ったゴキブリの死骸とフンの山。鼠の食い散らかした紙くずと、思い出しただけでも怖気が立つほど惨憺たる店内だった。いや、あの状況を見て、ここを営業中の店と知る人は、犬を見て猿と言う人を探す以上に難しい。というより、いないと断言していい。

いったいどれくらいの期間掃除をしなかったのか、聞くのも怖ろしかったので、無言で掃除に没頭した。店、と呼べる状態になるのに、一週間は軽くかかった。

掃除が終わった後、あまりの疲労に倒れたのは僕の不甲斐なさだが、あの埃の中にいて、師匠を始めとするここの従業員二人は、よくも病まなかったものだ。

「まー、ここの人達が病むわけ、ないんだけどね」

ぼんやり窓にハタキをかけていると、くいくい、と袖を引かれる。振り返ると、紅鳥こうりゅうが僕の袖を握り微笑んでいた。

「何？ 紅鳥、どうかしたの？」

思わず顔がゆるむ。

紅鳥は 百彩堂 の看板娘。 僕にとっては先輩にあたる、貴重な従業員の一人。

見た目年齢は僕と同じくらい。

上等な絹糸のような、柔らかかで真っ直ぐな黒髪に縁取られた小さな白い顔。 杏仁型の大きな黒い瞳と、桜色の小さな唇。 古い絵画などの仕女びじょが着ているような、布をたっぶり使った紅い裙子すかことゆつたりとした袖の上衣を着た姿は、まるで天上の仙女のようだ。要するに、どこをとっても「可愛い」としか言いようがない。

「なに？ 奥へ行こうって言うてるの？」

僕の袖を引きながら、紅鳥はにこりと微笑み、こくりと頷く。紅鳥が動いたたび、周りの空気が鈴を鳴らすように、清らかな音を立てる。

「お師匠が呼んでるの？」

紅鳥はまたこくりと頷いた。

紅鳥は言葉を持たない。 その代わりに、紅鳥を包む空気が、鈴のような清音をたてる。

その音は、聞く人々をとて幸せな気持ちにさせるのだけれど、もし紅鳥が話せたら、もっと綺麗な音を聞かせてくれたらと思う。紅鳥は早く行こうと僕の手を両手で包み、優しく引っ張る。 空

気がしやらんと揺れる。

嬉しいけど、ちょっと照れくさい。

「待つて。 要らないと思うけど、表に札を出しておくよ」

引つ張る紅鳥の手を軽く押さえると、僕は慌てて表に「準備中」の札をかけ、内鍵をかける。 お客が来なければ無意味なことだけど、営業している以上、お客様へのお知らせと万一のための最低限の防御は必要だ。

僕を待つていてくれた紅鳥に再び手を引かれ、店の奥、従業員の休憩室、兼、老板である玄青師匠てんちやうの居住空間へ向かう。

紅灯籠の灯りが揺らめく薄暗い廊下を幾度か折れると、目的の一室に辿り着く。 店の扉と同じ装飾の施された、重厚な両開きの扉の右を引き開ける。

「すみません師匠、お待たせ」

目の端を、白く光る鋭利な物体が横切り、開けなかつた左の扉に突き刺さる。 横目で確認すると、それは見事な象嵌細工ぞうがんの柄を持った小刀だった。

「遅えぞ、新入り丁稚」

投げられた小刀の刃のような、鋭利で冷たい声が飛ばされる。

顔を見なくても分かる、「超」が三つは付く不機嫌さ。 確か彼は、
昨晚 仕事 だったのだ。

「仕方ないだろ。 店をカラッポにするんだから、それなりの準備をしないと」

正面の卓子つくえの上に行儀悪く胡坐をかいている、外見上僕より数歳年上の青年に、無駄を知りつつ抗弁を試みる。

「この店に客なんか来るわけねえだろうが。ったく、おめえが来ねえから、話が進められなかったんだ。お陰で俺様の睡眠時間が減る一方だろうが、このボケ」

この激しく口の悪い青年は白獺しろはく。紅鳥と同じ先輩従業員。

名前の通り髪も肌も着る服も真っ白。ついでに瞳の色まで白に近い銀色だ。

「そ、それは悪かったけど、白獺。いちいち小刀投げるのは止めてよ。白獺は大丈夫かもしれないけど、僕は当たったら怪我するんだからね」

一般的には当然と思える主張を口にしてみる。結果は、怖ろしく険しい銀眼で睨まれるだけだと知っていても。

「丁稚。それはつまり、俺の腕にいちやもん付けてる、って訳だな？」

言いながら、白獺は無表情で新しい小刀を手の内に光らせる。なんでそうなるのか、未だに白獺の思考回路は掴めない。

「まあまあ白獺君。何も彩君は君の腕をどうこう言っている訳ではないんだよ。他人にそういった凶器を投げるのは、礼儀に反する行為だと言っているのだよ。実際、その通りなのだから」

身の危険に冷や汗を流していた僕の背後から、深く穏やかな声が助け舟を出した。

振り仰ぐと、長い黒髪に顔半分を隠した玄青師匠が、女なら蕩けてしまいそうな微笑を湛え、僕を見下ろしていた。

艶のある濃紫の袍子に茶金の腰帯を締め、大振りの扇子を差している師匠は、「こんな男もいるのか」と言いたくなるくらい綺麗な顔をしている。だからと言って、女と見間違えるような、なよなよした感じは全くしない。

「彩君、店番中に悪かったね。ま、取り敢えず中に入って。紅鳥、花茶を淹れてくれるかね？」

紅鳥はにこりと微笑んで、部屋の奥へ消える。その姿を見送ると、師匠は大きな手を僕の肩にかけ、室内へと促した。

並んで歩くと、僕の頭は師匠の肩にようやく届く程度。これでもクラスでは、後ろから二番目に高いのだけだ。

中に入り、これまた凝った意匠の椅子に腰掛けると、紅鳥がお茶を運んで来てくれた。白い磁気の花碗に注がれた金色の花茶は、爽やかな微香を立ち上らせる。

師匠は花茶を一口含むと、茶碗を卓子の上に置き、腰に差していた扇子を広げ従業員達を見渡す。

扇子で口元を軽く覆い微笑むと、玄青師匠はゆっくりと口を開いた。

「さてと、では 仕事 の話に入ろうか」

2 「初・現場見学 其の壱」

2 「初・現場見学 其の壱」

六月十六日土曜日 予報・晴れ

天堂島の夏はとにかく暑い。

雨期と乾期のどちらかしかなく、きつぱりした気候帯のせいもあるが、島中石畳がびっしり敷かれていて、陽射しの照り返しやなんやで、雨後の地表近くはプチサウナ状態だ。

それでも夜になると気温はグンと下がり過ごし易くなる。多少湿度が高いものの、六月半ばの湿度などまだまだ軽く、からつとしているものだ。これがあと半月もしたら、夜でもじつとりと汗が流れる熱帯の夜が続く。

考えただけでも憂鬱な季節の到来は間近だ。

「おい猫っ。 丁稚^{ていぢ}っつ。 ボーっと突っ立ってないでさつさとこころ来て確認しやがれ」

おっと、いけない。 今は工作中だった。

雑念払って集中しなくては。

なんとといったって、僕はまだ見習い、丁稚の身。 しかも今夜は、白猿^{しろほく}大先輩のアシスタント。 けしもの 仕事の初現場見学。

気を抜いていたりしたら、このヤクザな先輩に、どんな暴言を吐かれるか知れたもんじゃない。

「おら、さつさとしねえかチビ猫。 俺はチャチャッと終わらせて帰って飯喰って眠りてえんだ。 いいか。 四十五分で終了だ。」

予定より一分でも終わるのが遅れたら、てめえの耳から脳髓啜り出して晩飯代わりに喰うからな」

肌も髪もじだいけき古装劇のような衣服も、全て真つ白の白獾。僕を睨みつける切れ長の瞳も白に近い銀色。なのに性格は真反対にドス黒い。と、僕は思っている。

ちなみに、僕が知り得ている白獾のデータはというと

- ・人外生命体（納得！）。正体は調査中。
- ・男性人型。外見年齢十八歳〜二十歳。
- ・容姿（憎らしいことに）端麗。性格陰険嫌味且つ短気。
- ・百彩堂の店番としては、寝ているか、来たお客に眼飛ばがんして脅すしかない、完全な役立たず。
- ・けしもの師としての得意分野は 夢喰い。こちらはお師匠の話しぶりから優秀らしい、と推測。

「はいはい先輩様つ。 だけど、僕は”猫”じゃないぞ」

「そうやってすぐ毛逆立ててるあたり猫だろうが。 しかも綿毛みてえなチビ猫だ。 半人前以下のちま仕事しかできねえくせに、いっちょ前に反論なんぞしてんじゃねえぞ。 おら、お前に与えてやっただちまい仕事、さっさとやりやがれ」

白獾先輩のやさぐれた鋭い睨みに、これ以上反論するのは危険と察知。

それに、そう。 腹が立とうがいけ好かなかろうが、先輩の指示には従わなくちゃいけない。

今宵はまん丸盆の月。 時刻はまもなく丑三つ時。 白い月明か

りに照らされる、本日の仕事先は、なかなか瀟洒な洋館だ。

そして今、僕達が居るのは依頼者の寝室。

豪華な天蓋付きのベッドの上には、依頼主の紳士が、高いびきをかいて寝ている。

耳を塞ぎ、依頼者の顔を覗き込む。

「あんまり、悪夢にうなされ悩んでるみたいには見えないんだ

……けど、確かに、苦しんでるみたいだね」

血色の良い、つるつとした丸顔が、時々苦悶するかのようになむ。いびきをかきながらでも、人間苦悶できるものなんだ。これは新発見。

苦悶の回数は次第に多くなり、観察を始めて五分もしないうち、紳士は玉のような脂汗を浮かべ、呻くような声をタラコのような口から漏らし始めた。

眉間に深い皺が寄り、こめかみの血管が浮き出している。首を絞められ窒息でもしているみたいに、顔を赤らめ苦悶する紳士の形相は、現場初心者の僕には、ちょっと不気味でかなり怖い。と言いつつ、怖いもの見たさでついつい見てしまう。

「猫。俺の言った事、覚えているよなあ？」

白獺のドスの聞いた低い声が、前方から飛ばされる。

顔を上げるとベッドの反対側で、据わった銀眼が僕を刺し貫くように睨んでいる。学校の体育教師の睨みなんて、白獺のに比べたら、赤ちゃんをあやす笑顔みたいなものだ。

慌てて僕は苦悶する紳士に視線を戻す。

そつと胸ポケットから写真と書類を出し、小さな懐中電灯で、写真の顔と寝ている顔、書類に書かれているあざや黒子などの特徴を比較確認する。人違いがあつては店の信頼に関わるから、照合作

業は慎重に行うが肝心。

「間違いないよ。依頼者のコウ・エン氏 五十四歳、独身。不動産会社社長。六月十三日午後九時五分、単身にて 百彩堂へ来店。依頼内容・悪夢の完全消去。詳細・一ヶ月前から夢に繰り返し女の姿をした化物が現れ、氏をしつこく追い掛け回し、捕まえ喰おうとする 以上」

白猿は眉間にシワを寄せ、露骨に嫌悪の表情をした。

おもむろに、懐から穂の大きな筆を取り出すと、白猿は乱暴に依頼主の毛布を剥ぎ、両手足と胸に文字を書く。筆には墨汁がついていないので、何と書いたのかは不明。

これは白猿の本作業前の下準備で、作業中に依頼者の身体が動いて作業の妨げにならないよう、金縛りの呪いをかけるのだと、ここへ来る前に紅鳥（ことり）が教えてくれた。

「ロクでもねえ依頼受けてんじゃねえぜ、あのボンクラ倒錯爺（てんちやう）イ。その消す女が死人だったら、紅鳥も必要なんじゃねえのか？ ったく。おい、猫彩。このオヤジが目覚ましそうになったら、ぶん殴ってまた寝かせろよ」

白猿の言う「ボンクラ倒錯爺（てんちやう）イ」とは、僕達のボスである老板（ばんざん）・玄青師匠（げんせい）のこと。白猿にかかれれば、一国の首相でも神様でもボンクラ扱いだ。

そして今更だけど、「彩（さい）」は僕の名前だ。

フルネームは結城彩。 一般人類・男。

十三歳二カ月・中等科一年。

髪も眼も黒の黄色人種。 容姿は上の中。

両親は海外のどこかで営業活動中。

天涯にある自宅で、大井という、僕の守り役の爺やであり、名門

財閥結城家の優秀な執事である大井と二人人暮し。 兄弟姉妹なし。

「オーライ。 自信はないけど、待機しとくよ」

お師匠から貸し頂いた巨大扇子を握りしめ、僕は依頼者の足下に立つ。 巨大ベッドは、依頼者の他あと三人は寝ることができそうなほど、無駄にスペースが空いている。

「ケツ。 どこまでも不味そうだな。 消化不良起こしそうだけ。

給料二割増だな」

悪態を吐きながら、白獺はベッドに飛び乗り枕元にしゃがみ込むと、依頼者の頭を左右から挟むように手を添え、深く息を吐いた。 銀の眼が、ゆるやかに閉じられる。

六月十六日 土曜日 午前二時十五分。

けしもの 仕事の始まりだ。

3 「初・現場見学 其の式」

3 「初・現場見学 其の式」

同・六月十五日土曜日 満月夜

けしもの の仕事とは何か、と問われると、回答に困ってしま
う。

実は僕もまだ、ちゃんとした仕事内容を把握してはいない。

何と言っても、奉公を始めてまだ一ヶ月。

おまけに学生と兼業なもので、なかなか思うように奉公出来てい
ないのが実情。 早く夏期休暇に入って欲しいと、指折り数えてい
る日々だ。

そんな不自由な新米の僕に、お師匠は 百彩堂 の店番の仕事に
加え、過去の けしもの 仕事の業務日誌整理を割り当てられて
いる。 古い日誌が劣化して読めなくなる前に、複写して予備保管
するための作業だ。

過去の日誌を遡って読んでいけば、この仕事について、僕が早く
理解が出来るだろうというお師匠の優しい配慮だ。

そこから見えてくる業務内容を簡潔に言えば、 依頼者の依頼し
たものを消す こと。

店のあだ名そのまんま。

消す ことが仕事。

世の中、遺失物や尋ね人を「探し出す」ことを業務内容とする企
業や個人は多々あれど、 消す ことを主要業務とする店つてのは、
ありそうであまりない気がする。

何を消すのかというと、それは僕もまだ日誌の一部しか読んでいないので言いきれない。

何と言っても 百彩堂（けしもの屋）は、五百年近い歴史を誇る老舗。歴史が長ければ日誌も分厚い。一言で説明しきるには、扱う内容が広すぎる。

今まで読んだ日誌にあった けしもの の仕事内容を挙げると

書き損じた書類の文字削除、水周りの湯垢の除去にカビ取り、庭木に湧いた害虫駆除、公園の除草、壁の落書き消し、表に出てはま^ずい裏帳簿の完全廃棄、過去の忌まわしい記憶の消去、怨念の昇華、呪詛の解除、妖怪退治に悪霊退散
ちなみに、今日の依頼は悪夢の消去。

と、この通り。 何がなんだか内容不明のものも多く、町の便利屋並みの雑多さだ。

おまけに、過去の日誌の中には、あまりに雑に書かれたがゆえ判読できない頁多数。（お師匠は、この読解不能の頁の解読を、僕に期待しているのかもしれない。）

完璧に読み解くには時間がかかる。

日誌を読んで勉強することは必要だと思う。けれど、やはり現場に出て、自分の目で見て耳で聞かない事には完全な理解はあり得ないと、日誌を読み進むほどに僕は思った。

百聞は一見に如かず、なのだから。

そこで僕はお師匠に、現場にも連れて行って下さいと懇願した。

お師匠はふたつ返事で了承してくれた。

そして、今夜の現場見学が実現したというわけだ。

激しく嫌がり抵抗する白猿^{しろはく}を、お師匠がなだめ^{すか}し脅^{おと}して、同道の同意を取り付けてくれたのだから、僕もしっかり学ばなくては、

白獺に本当に喰われかねない。

「 ううううう うあああうああ 」

依頼者の口から、悲鳴とも呻きともつかない声我突然漏れ出す。考え事に気を取られていた所為せいもあり、びくつと身体が反応、心拍数も上昇。 心臓の音が大きく聞こえるって、こういうことなのかと実感。

「 来たんだ 」

白獺の集中を乱さないよう、僕は声を潜める。ほんの微細な変化も見逃すまいと、目を皿にして白獺と依頼者の変化を見つめる。記録用のノートも用意していたけれど、書き取るには手元が暗すぎる。 しっかり見て記憶するしかない、ということだ。

「 あああああ うううううわああ 」

依頼者の形相はいよいよ険しい。身体を震わせ、時々大きな痙攣けいれんを起こす。白獺のかけた呪いのためか、依頼者の身体はベッドに縛り付けられたように真っ直ぐな姿勢を保っているが、その真っ直ぐな姿勢のまま引きつけを起こし、身体を逆エビに反らせたりして呻く様が、まるで、心霊現象の特番を見ているみたい。 「ただいま憑依中」と、テロップをいれて茶化したくなる。 茶化さないと、はつきり言ってただひたすら肝が縮む怖いだけの光景。

「 あ………光 」

白獺の額に光が灯り、その光は次第に白獺の身体全体に広がって

いく。

五分もしないうちに、白獺は全身が蛍のように淡く光り暗闇に浮かび上がる。更に数分、白獺の発する光は依頼主の身体をも包むように広がっていった。

白獺の光に包まれ始めると、苦しんでいた依頼主の呻きは小さくなり、痙攣も次第に小さくなっていく。

白獺の顔が一瞬歪む。

眉間に皺を寄せ、非常に集中している様子。

依頼主の頭の左右に添えていた手を、白獺はゆっくりと額の上に移動させた。それから、何かを引きずり出そうとするかのように、額の上で右手をゆっくり上下させた。

数回目の動作の時、ずるりと、灰色の煙のようなモヤモヤが、引き抜かれる芋のように依頼主の額から出てきた。抜かれたモヤモヤは、額の上で渦を巻き始める。

禍々しい。という表現を使うにぴったりな、おどろおどろしい黒と灰色のマーブル模様の渦は、次第に雨雲の様な塊となり、天井に伸び上がるように成長していく。

伸びると共に、雲の中心から、ぞつとする、不気味な女性(?)の呻き声か恨み言かがぶつりぶつりと、途切れ途切れに聞こえてきた。これまた心靈番組の「こんな声が」「みたいな、低い、ピブラートのかかったおどろ声。言っている言葉は意味不明だけれど、良い内容ではないだろう。どう聞いても、恨み辛みたっぷり、といった響きだから。

白獺の右手の動きが止まり、額から出るモヤモヤも品切れしたのか、ぷつぷつと出なくなつた。依頼主の上にはいま、縦長の雨雲がとぐるを巻いている。

「う……んん」

依頼者が突然もぞと動いて瞼を擦り始めた。更に「ううん」と
間抜けた寝ぼけ声を出すと、瞼がぴくぴくと痙攣するように動き
半開きに。

「彩さいっ」

「はいっ」

パンっ、と、乾いた音が室内に響く。

先輩の鋭い指令に、僕の身体は本人の思考とは無関係に従った。
僕の非力でも威力増幅できる 巨大扇子 が依頼主の額に吸い込
まれた結果、見事、依頼主は再び眠りに落ちた。

けしもの 作業は外部の人には見せないのが鉄則。 例え依頼
者でも、だ。 依頼主のおでこ。 明日アザになっっていないと良い
けれど、ま、少なくとも何があつたかは覚えていないだろう。
しばらくすると、依頼主は穏やかな寝息を立て始め、それは瞬く
間に巨大いびきに变化した。 命に別状はない。 一安心だ。

僕が依頼主の再入眠を確認している間、白獏は依頼主の額から出
したマーブルな雨雲の裾を掴み、切れ長の銀眼で睨みつけていた。

「それが、依頼主の言っていた夢の？化物？？ 正体は何？ 死人
幽霊なの？」

恐る恐る聞く僕に、白獏は不機嫌な険しい視線だけを投げ返す。

「あんの爺イ。 こんな下らん依頼受けやがって。 こんな無節操
下衆野郎が眠れなかつたが、女に祟り殺されようが、なんの問題が
あるってんだ。 二十、いや、三十人近くいるか。 色魔か、こい
つは」

意味不明の台詞を吐きながら、白獏は嫌悪感丸出しに依頼者の頭を殴った。それでも依頼者は目覚めない。熟睡つてすごい。

「何が、二十や三十人？」

「この野郎がこの寝台に連れ込んだ女の数」

さらりと大人な世界の話がされたようだが、反応の返ししようがないので要点のみ聞く。

「で、その女の人達と、その雨雲の関係は？」

ベッドから飛び降りると、白獏はぐにやぐにや動く雨雲お化けの裾を放した。意外にも雨雲は、白獏の傍からは離れない。

「連れ込まれた女のどいつかが、術師でも雇って低級夢魔を送り込んだんだろっさ。その低級が、この寝台に残っていた女共の思念を喰って成長した姿がこれだ。每晚この男の夢に現れる化物の正体さ。おい、猫。開放して見せてやるから、お望みの体験学習でもしな」

「え？ え、え、ええー」

不機嫌な白獏の音が終わらぬうちに、雨雲の中からぬるりとした物体が現れた。髪の毛の長い女性のような姿をしたそれには、身体中に目があり、身体中に口があった。

全身に油を塗ったつるつる光る黒ゴム人間が、ぬらぬらと軟体動物のようにくねりながら、呻き声や悲鳴、愚痴悪態を口々に吐き出している。

はつきり言って気持ちが悪い、の一言に尽きる。　かなりグロテスク。

「そ、そ、そそ、それ、むまって、黒ゴム人間　うわ、わわっ」

たくさん目の目玉が一斉に僕を見た。

よくよく見ると、ある目は涙を流し、ある目は血走り、ある目は怒りにつり上がり、と微妙に表情？があった。　口はそれぞれに、叫んだり笑ったり泣いたり、騒々しい事この上なしだけれど、言葉としては全く成り立っていない。　ただ、物凄い怨念というか、執念を感じるのは気のせいだろうか……。

思わず凝視する僕と、たくさん目の目玉の視線が交差してしまった。案の定ゴム人間は、僕の方へ向かいゆらりと手を突き出した。

ゴム人間から僕の立つ位置までは三メートルちょっと。　普通なら届くはずない距離なのに、そこはさすがゴム人間。　腕をぐうんと伸ばし始め、届くはずない僕の鼻先にまで、ぬらりと光る手を伸ばしてきた。

伸ばされてくる掌にまで目玉と口があることを発見。　またまた怖いもの見たさで見えてしまう、哀しい自分の性を実感。　お陰で逃げ遅れて、手はすぐ目の前に来てしまった。

「……………っ　　っ……………」

どういふ叫び声を上げてよいか分からず、無意味に手をばたつかせた後、とっさにしゃがみ込む。　寸でで、ゴム人間の魔手をかわした。

しかし考えてみれば、後ろに逃げた方が良かったのかもしれない。と、思い至ったところで、しゃがんだまま後方へ移動をしようと思ったら、膝が震え、よろけてべたりと床に座り込む。　しかも悪

い事に、完全に腰が抜けて動けない。我ながら醜態だ。
ゴム手は僕を掴み損ねたのを知ると、今度は下に向かい、ゆるゆると伸び始める。

「……うっ、わ ……」

目を閉じて、頭を抱え丸まった。まるで団子虫かアルマジロのような防御方法。

これで逃げられる訳がない、とは思ってもどうしようもなかった
ので、後は固く目を瞑るしか出来ない。

そろそろ手が僕に触れる。

覚悟した瞬間、頭上で引きつれた笑い声が上がる。ゴム人間の
声だろうか。胸が悪くなる嫌な笑いだ。

逃げられないなら、もう、観念するしかない。このぬるぬるの
黒い手に触れられたら、僕も悪夢に苦しむのだろうか。

と、諦めて数十秒。笑いは未だに響けども、ゴム手が僕に触れ
る感触はいつこうにしない。

笑い声は、どことなく低く変化したような。

恐る恐る眼を開けてみると、白獺がゴム人間をクルクルと手元に
巻き戻していた。

「お前それ、ヨケたの？ コケたの？」

白獺は、回収したゴム人間を振り回しながら腹を抱えて笑った。

「か、かわしたんだよっ」

せいぜいの強がりを言っではみたけれど、鏡を見るまでもなく、
僕の顔は引きつり蒼ざめているに違いなかった。

そんな僕を、白獺は皮肉たっぷり見下した眼で眺めると、ふっとせせら笑った。

「この程度でビビるなんざ、やっぱチビ猫だな。全身総毛だって縮こまつてる子猫ちゃん、ってか？ そんなんで、この先続けていけるのかねえ？」

腹は立つが、とても言い返す気になれない。本当に腰が抜けているのだから。

これはかなりの不覚。しかも屈辱。

膝がまだ笑っているけれど、ベッドに掴まり、意地と根性で直立姿勢に戻る。ここは、屈辱感が力となった。

立つてもよろける僕を見て、白獺はにやにやと愉快そうに笑っている。

「夢魔について詳しく知りたきや、倒錯爺か紅鳥（くまどり）から講釈受けな。

種を蒔いときゃ、夢魔はまた発芽するとか、紅鳥なら懇切丁寧に教えてくれるだろうさ。ちっ。大いびきで寝やがって。

腹立たしい限りだな」

忌々しげに依頼者の頭をまた叩くと、白獺はゴム人間を元の雨雲スタイルに戻し、手でくしゃくしゃと丸めだした。

飴玉サイズまで丸めこむと、おもむろにポイっと口の中に放り込み、それを歯で砕くと、小さな欠片をひとつ吐き捨て、残りをごくりと飲み込んだ。

吐き出された欠片は部屋の隅の闇へ、自主的に転がっていったよ
うな気がする……。

「不味（まず）い」

舌を出し顔をしかめる白獺に、僕は気を取り直し携帯してきた水筒のお茶を注ぎ渡す。不気味なゴム人間がいなくなれば、恐怖もあっさり去ってしまう。気持ちの切り替えは得意な方だ。

「お？」

白獺が眉をあげ、コップを受け取る。

「紅鳥がこれを持っていけって言った。白獺が不味そうな顔をしたら、飲ませてあげて、ってさ」

水筒の中身は、けしもの屋 特製 忘却茶。甘い薔薇の香りのする特級茶なのだけれど、これを飲むと、嫌な事も良い事も全てすっかり忘れられるから、忘却茶 なんて妙な名前が付いているらしい。

良いも悪いもすっかり忘れるなんて、よくよく考えると微妙に危険な代物という気もするけれど、飲む量を適宜調整すれば大きな問題はない、とお師匠が言っていたので問題はないのだろう。きつと。

「猫じゃなく紅鳥ね。 納得」

「猫じゃないっていつてるだろつ。 提案したのは紅鳥だけど、準備したのは僕なんだからな。 ケチつけるんなら飲むなよな」

僕の言葉など丸無視して、白獺はお茶を一気に飲み干した。すると、白獺の身体が再び淡く光った。

人の身体が発光するなんて、なんと不思議な光景だろう。

発光している白獺の姿は闇に浮かび上がり、ちよつと幻想的で綺麗だと思った。

もつとも、口が裂けても裂かれても、白獺にそんなことは言わな
いけれど。

「ねえ。 さっきの吐き捨てた欠片 どうなるの？」

白獺はにやり、と笑っただけで無言。

「 何となく、分かった気がする」

思うに、あの欠片が成長すると、あのゴム人間、になるのではな
かるつか。

当て推量だけど、ほぼ確信。

「 消化終了。 おい、時間」

白獺の問いに、僕は慌てて懐中電灯を腕時計に向け時間を確認。

「 午前三時ジャスト」

白獺はフンと鼻を鳴らすと、「帰るぞ」とすたすた寝室を出て行
った。

依頼主の紳士は、白獺が悪夢を喰ってすっきりしたのか、ありえ
ないほどの大いびきをかいて眠りを愉しんでいる様子。

いつまでこの幸せな眠りが続くのかは、謎、だけれど。

(ご依頼の「悪夢」は完全消去いたしました。 どうぞ、幸せな眠
り愉しまれて下さい。

ただし、新たな悪夢が現れた場合には、新たな対処が必要となり
ます。 今回作業のご請求は以下の通りです。 後日集金に伺った
者に、現金にてお渡し下さい。 六月十五日午前三時 百彩堂

(けしもの屋) スタッフ)

メモを付けて請求書を枕元の目立つ場所に置いておく。報酬は書面できっちり請求しないと、忘れられては困る。

これにて今回の けしもの 仕事は無事終了。 現場退出。

白獭は海角の店へ帰るけれど、僕は時間が遅いので、天涯の自宅へ直帰だ。

帰ったら今晚の記録を忘れない様メモにまとめて、出勤後、日誌に記入しなくては。

本来は、作業担当の白獭が書くべきところなのだけれど、白獭が書くと、読解不能な頁が増えるだけなので、僕が代理記入する事になっている。 これ、今晚の見学条件。

「おら、猫っ。 あと五秒で来ねえと置いてくぞ」

下の階から白獭の声。 急いで行かなきゃ本当に置いて行きかねない。 ここから家まで軽く四十キロ。 間に険しい峠三つ。 先輩に「空間移動」で送ってもらわないと、帰り着くのは太陽が天頂の昼になってしまう。

今日は土曜。 出勤は午後からだ。

出勤したら、お師匠に今回の仕事の講釈を受けよう。 そして、また次の現場見学を頼み込まなくては。

一回や二回や三回見学したくらいで、解った気になるのは阿呆な勘違いだ。 理解のためには場数が必要と実感。 白獭に馬鹿にされないようになるためにも、現場百回、だ。

時間は午前三時十分。

流石に、眠い。

メモ作成は目が覚めてからになりそうだ。

そういえば数学と現国の宿題も出ていたような。

これは明日以降に、なりそうなのがする。

4 「金曜午後・出勤四十五分前」

4 「金曜午後・出勤四十五分前」

六月二十二日金曜日 曇りのち晴れ

「おっとっ
」

金曜の放課後。一週間で一番楽しい時間。

足取りも自然軽くなるから、つい急ぎ足になって、危うく転んで大切な物を落としてしまうところだった。

楽しい時こそ、注意は必要だね。

「あら、彩^{さい}くん。お出^でかけなの？」

僕が向かうとは逆の方向から、おっとりとした老婦人の声。注

意だ。

僕の家之三軒隣のリーズ夫人。

ふんわりと結われた白い髪に、ふっくらとした頬が可愛らしいおばあ様だ。育ちのよさが物腰はもちろん、ゆっくりとした言葉の発し方にも自然に現れている。手にした淡紫の日傘のさし方ひとつでさえ、生来の品の良さを感じさせる。

いつもにこやかで好印象な老婦人なのだけれど、一分で済む話が十五分にはなってしまうから、急いでいる時にはあまり会いたくない人だ。

そう思いつつも、反射的にネクタイの歪みを正すと、僕は最高の笑顔で挨拶をする。

「リーズさん。こんにちは」

「お父さまとお母さま、お元気？」

「はい、元気です」 多分、ですがね。

「今頃は、北欧辺りを回っていると思います」

これも「多分」の話。なにぶんもう半年以上、お互い連絡を取っていないものですから、どこにいるかなんて、実は正確に知らないんですよ。なんて言えはしないけれど。

「お父様はあの？結城財閥？の総帥、お母様は第一秘書もなされている、お父様にとっては公私共に大切なパートナーですものね。」

部下に任せきりにせず、ご自身も先頭に立ってお仕事をなされているなんて、ご立派なことだわ。けれど、寂しいでしょう？ひとり残されて。お父様お母様も、一人息子を遠い地に残しておられること、どんなにか心掛かりでしょうに」

リーズ夫人は、混じりけのない同情の眼差しで僕を見ている。

いえいえ、残念ながら、いつまでも青臭い恋人同士のような両親は、二人揃って旅行が趣味なんです。仕事と趣味が両立できて、それはそれは充実した日々を過ごしていると思われるので、しっকারい者の子供のことは、あまり心配していませんよ。なんてことも、口に出しては言えない。

相手の思いに水を差すようなこと、僕はあまりしたくない性質だ。

「そうですね。でも、僕は父の仕事を理解しているつもりですし、そのお陰でこうして暮らしていることも分かっていますから、寂しいなんて言って、両親を困らせたくはないんです。それに、学校の友人や大井もいますから、毎日、楽しいんです」

ここで明るく、しかし、少しだけ寂しげに微笑むことを忘れてはいけない。なんていったって、老婦人にとつて僕はまだ？ たった十三歳？ の子供で、同情の対象なのだから。

「大井、つて、執事さんの？　まあ、まだ元気に働いていらつしやつたのね。　わたくしより随分おじいちゃんだった気がするのだけれど……。　そういえば、あのご婦人。　彩君がボランティアでお話し相手に行っていた西海岸通りの、あの旧いお宅の、ムータン婦人。　先月亡くなられたのですってね。　わたくし、ぜんぜん存じ上げなかつたわ。　お身寄りがないとかで、ずっと独りで暮らされていたでしょう？　お式とかは、どうされたのかしら？」

リーズ夫人は、新たな話題の主人公になった故人に、今度は同情をしている様子。

「はい。　お身寄りがないということでしたので、勝手とは思ったんですが、両親に承諾を得て、僕と大井で送りの式をさせて頂いたんです。　ムータンさんも、今頃は天国で、懐かしい方々と会っていらつしゃると、僕は信じているんです」

僕の話聞いた老婦人は、今度は心底感激した、という表情で僕の手を取り褒めちぎり始めた。

「まあまあ。　彩君。　あなたは本当になんて優しいいい子なのかしら。　酷い言い方だけれど、赤の他人のお葬式を、あなたが出したなんて。　あなたは最後まで、とても良いことをしてさし上げたわ。　そうでなかつたら、あの方。　誰にも、お葬式すらあげてもらえなかつたでしょうから。　亡くなられた方の事をこう言うのはなんだけれど、あの方、ちょっと変わった方だつたでしょう？」

福祉課の職員ですら近付きたがらないって聞いたことがあるわ。とても気難しくて、その上、なにやら怪しげな術に凝っていて、鬼や化物を呼び寄せて召使いとして使っていていらした、なんて話を耳にしたことが、わたくしあるの。他にも時々、奇声を発していらしたとか、怪しげな白い陰が窓辺に座っていたとか、この世のものとは思えない歌声が夜な夜な聞こえたとか。そんな話を幾つも聞いたことがあって。もちろん、あくまで噂でしょうけれどね。あなたがお相手していたくらいですもの、そんな怖ろしい人の屋敷だったら、出入りなんかできなかったわよね。もっとも、わたくしはそんな噂話、もともと信じてはいないのだけれど。」

老婦人は素晴らしい肺活量で一気に捲くし立てると、気のない振りを装いながら、僕の次の言葉を待っていた。

僕は笑いそうになると、そしてほんの少し、泣きたい気になるのを必死で押し込め、暗くなり過ぎない程度の寂しげな顔で、老婦人の問いに答えた。

「ええ。そんなのはただの噂ですよ。確かに、少し頑固な方でしたけれど、長い間お独りだったから、寂しかったんですよ、きっと。孫のかわり、というのはおこがましいのかもしれませんが、僕はムータンさんを本当のおばあ様のように思っていたんです。少しは僕の存在が、ムータンさんの慰めになっていたら、いいんですけれど」

ここでまた、少し寂しげな笑顔でリーズ夫人の顔を見返す。老婦人の眼は涙で潤み、

「ええ、ええ、間違いなく慰められていましたとも」と、語る声も熱く潤んでいた。

リーズ夫人の中での高感度は、これで更にアップしたこと間違いなしだ。

その後も、お互い笑顔を絶やさずに、真か偽かの知れない話を更
にいくつか交わすと、先約があるといつて、話を終わらせることに
成功した。

別れ際にリーズ夫人は、今度午後のお茶に招待したいといった。
女性からの誘いに、NOとはいえないので、顔出しは次の日曜の
午後となってしまうた。正直、面倒くさくもあるけれど、おしゃ
べりの中から、どんな情報を得られるか分からない。情報は宝。
ご近所付き合いは大切だ。

歩き出したリーズ夫人を、ほんの少しの間見送っていると、石畳
の窪みに足を取られよろめいたので、駆け寄ろうかと思ったが、婦
人は自分ですぐに体勢を立て直し、ゆっくりとした足取りで歩き始
めたので、ほっと胸をなで下ろす。

「女性の危機を放つて自分の事を優先するなど、男としてあつては
ならないことだ」と、自称・紳士の父に、幼少時から耳にタコが出
来るほど言い聞かされて育った。

刷り込みとは怖ろしい効果があるものだ。
女性の危機を目にすると、条件反射的に身体が動く自分がすごい、
と思うことがしばしばある。

しかし、この刷り込み条件反射は将来役に立つこともあるかもし
れないので、まあ、よしとしよう。

リーズ夫人の安全を確認したところで、父に貰った年代物の銀の
懐中時計の鎖を引き、ポケットから出すと同時に蓋を開ける。

針は三時五分钟前。

夫人の話が十分で済んだのは奇跡だけれど、その十分、あつたは
ずの時間がなくなってしまうた。余裕を取り戻すため、ちよつと
走ろうか。

手の中の時計から顔を上げると、日差しに目が少し眩んだ。

夏本番。太陽は本領発揮とばかりに、地上にあるものをギリギリと灼き始めた。シミを気にする御婦人方には嫌なものらしいけれど、僕はこの容赦ない、照り付ける太陽の夏が一番好きだ。

眩しさに負けず顔を空に向ける。

それにしても、今日は本当に天気がいい。

遮られない空は、チューブから出したままの絵の具を塗ったみたいに、混じりない青をしている。

視線を下へ向けると、眼下に広がる濃紺の海の縁に、真っ白な夏雲が浮き島のように並んでいる。

「 婆さんが見たら、喜びそうだよな」

リーズ夫人が話題に上げたものだから、ついあの婆さんの事を思い出してしまった。

婆さんも夏が好きだと言っていた。

そして、その夏の中で、今僕が目になっているような、真っ白な雲が何より好きだと言っていた。

その潔い白さが好きだと言った。

あんな白になりたいんだと、何度も何度も、言っていた。

僕の立つこの場所は、急な坂道を上り詰めた頂きで、天堂島では一番眺めがいい場所だ。

年配者が多いここ天涯地区で、この道を利用する人は少ない。

その上、日差しのきついこの時間、道には人どころか猫の子一匹蟻一匹もないので、自ずとこの眺望を独占できる。

他人嫌いだったあの婆さんを、もし今日ここに連れてきたら、ひねくれた言葉を口にしつつ喜んだらうけれど、もういないのだからどうしようもない。

でも、こんな坂の上に連れて来たりしたら、足腰の弱っていた婆

さんは、転んでしまったかもしれない。

天堂島は、石畳に覆われた坂の島だ。

島中の歩道に敷かれた古い石畳は、時々、縁が擦れて隙間が出来るものがあるから、年輩に限らず、若者でも急いでいる時は注意しないと、つま先を引つ掛けて転んでしまうことがある。

上りでも転べば痛いけれど、下りだったらもつと悲惨。坂はどこでも結構急だから、転んだ上に転がるハメになる人がたまにいる。これは結構痛いし、周囲に人がいたらちよつと恥ずかしい。もつとも、僕は慣れているから、ちよつと引つ掛けたところで、転ぶなんてミスはしないけれど、もし誰かと一緒に歩くことがあるとしたら、配慮が確実に必要だ。

現に、僕の直ぐ足下の石畳の縁も擦れて黒い溝を作っている。行政も、高い税金を絞れるだけ絞り取っているのだから、こういう公道の補修はきつちりやればよいのにと、御近所の年輩方を見かけるたびに思ってしまう。

僕はわりと、妙なところで正義感みたいなものが強かったりする。今度陳情書を出してみようか、と考えている最中だ。

石畳の縁を靴の先で蹴りながら、何気なく、手に握ったままの時計に目を落す。

「あ、しまった」

景色に見惚れ、考え事などしていたら、また時間を二分無駄にしました。

早足にしる走るにしる、早くケーブル列車の駅に行かなくては、一時間に一本の電車が行ってしまう。これに乗りそこねたら、他に交通手段がないから完全に大幅な遅刻。

時間に余裕をなくし慌てるなんてみつともないと思うし、それ以上遅刻なんて恥ずべきことだ。

おまけに、本当に遅刻なんかしたら、僕との相性極悪の白猿しろいぼんが、
据わった切れ長の眼で手に銀の小刀をちらつかせながら、嫌味の五
つ六つや八つ、言うに決まっている。これ絶対的確信。

感傷なんかには、浸っている場合ではない。

5 「天堂島のこと」

5 「天堂島のこと」

日時前同・天気同様

大雑把に言えば、背の高い巨大な台形型の天堂島は、いわゆる富裕層の暮らす高級な居住地区と、標準所得から下の人達が暮らす下町に、きつぱりと分かれている。

『天堂』っていうのは『天国』という意味だと聞いたことがあるけれど、それでいくと、この島は『天国の島』、ということになる。そんな大層な名を誰が付けたのか、《天堂島史》を見る限り定かではない。ただ、誰も変名しようとしなかったのだから、その名に相応しい魅力がある、と、ある一定以上の人間が認めたのだろう。もしくは、名前なんてどうでもよかつたか、のどちらか。僕はおそらく、後者だと思っている。

穏やかな紺碧の海に四方を囲まれ、四季を通して鳥がさえずり、花が彩る、生命に溢れた海上の楽園。

まるで、旅行会社の広告文句のようだ。確かに、魅力は十分ある島だと思う。

しかし、実際にこの島に暮らしてみれば解る。

夏季の半端ない蒸し暑さに加え、衣服の上からでも貪欲に血を吸う凶暴な蚊、太古からほぼ変わらぬ姿で生き続けているという、人間を恐れずそこかしこを這い回る巨大ゴキブリ、買って来たばかりの麵包や月餅の包みを喰い破り、中身の一部のみを盗み喰う鼠等々

に、辟易へきえきする人は少なくないと思う。

もちろん、それらいわゆる「害虫」「害獣」に、僕が自宅で遭遇することはない。

僕のただ一人の同居者であり、結城家に仕える執事の大井は、結城家邸内への無断侵入を、何者に対してであれ赦すことはない。

年齢よわい八十を遥か超えても、一流は一流なのだ。

話はやや逸れたけれど、《天堂島史》によると、島の生い立ちは以下のようなものだ。

昔、世界のあちこちで悲惨な戦争が勃発していた時代。「絶望」という最悪の病が世の人々の間に流行ってしまったらしい。

そんな闇の時代、はるか東南の小さな島に、人々の眼は向けられた。

『天国の島』という、たまたまな名前に、人々は心の拠り所を求めたのだろう、と、記憶に定かでない僕の曾祖父が言っていた気がする。

東南の海上にある『天国の島』に、この世の楽園を求め、島の外から入ってきた人々は、自分達の理想とする居住の場所を、天国の島の上へ上へと求めていった。山の裾から這い上がるように、より高く、より天に近い眺めの良い場所を求め、山を切り拓いていった。

天に近いほど、神へ近い地。近ければ近いほど、より、願いも届き易い

なんて、どう考えても、安易安直に過ぎると思う話を、当時の人々は真剣に信じていたらしく、金に糸目もつけず、高台の僕も住んでいる『天涯』の土地を拓き、競うように自分のものにしていったのだとか。

その結果天涯は、非現実的な程に、整然と美しい、当時の人々の理想を詰め込んだ高級住宅街として、島の頂きに誕生した。

潇洒な洋館の白い壁と、それを取り囲む木々の緑に鮮やかな赤や黄の花が、人の手で整えられ絢爛に咲き誇る様は、一枚の風景画のようだと思う。その絵が好みか好みでないか、は別の話だけれど。

天涯を造る段階で、外地からの荷材積み入れ港となった小さな入り江は、建設作業に従事する為島にやってきた各地の出稼ぎ労働者達が、いつの間にか、雑然としつつも気楽で活気のある町『海角』を造っていた。

生まれたばかりの海角は、天堂島の裾に付いた小さな染み程だったけれど、蔓性の植物が蔓を伸ばすように、まず島の沿岸をぐるりと取り巻き、更には天涯へと続く山の中腹付近まで、生命力豊かに成長をしていった。

天涯の人々に言わせると「海角が天涯を侵食している」のだそうだけれど、何を言われても海角の住人達は全く気にしない。「とったもん勝ち」だと、海角の威勢のいい兄さん達は言う。実際、文句があっても、天涯の上品でひよろひよろの伯父さん達と、海角の、大声で喧嘩ツ早い人達とでは、話し合いにならないことに、一年分の小遣いをかけてもいい。

もつとも、天涯と海角が出来たのは、僕が生まれる遙かずっと以前のことで、歴史の教科書に掲載される程古い話だから、その本当の経緯なんて分かりはしない。けれど、天堂島が『天涯』と『海角』のふたつに別れていることは明々白々の事実であり、ずっと、変っていないことだ。

憎しみ合った末、などという理由で分かれているのではないから、別にいいんだけど。

現在、往き来は自由、無制限なのだから。

ちなみに、僕の家は天涯の天涯路（一番通り）の一番地の一角を丸々占めている。

三階のバルコニーから見える水平線の眺めは、ちょっと自慢に思えるけれど、その他は、別に部屋数が二・三十あると、裏の庭園に厩舎があつて、屋敷裏の馬場では、毛並みの良い四頭がゆつたり駆けていようと、僕にはどうでもよいことだ。

いまの僕の頭の八割は、天橋路九段にあるあの店のことに占められている。

奉公先であり、修行の場であり、あらゆる楽しみの詰まった、僕の楽地。

6 「海角へ」

6 「海角へ」

再び六月二十二日金曜日・いまは晴れ

天涯の天頂中央駅のケーブル列車乗り場は、人もまばらだった。

三時二分。 結局走ったので、最初の予定通り、発車三分前にホームへ到着。

運賃は一律。 乗る時に車掌に渡すから切符は要らない。

古ぼけた赤い列車は、疲れてうたたねでもするかのように、明る象牙色のホームに横たわっている。 なんでも、百年以上働いているという車両らしいから、それは疲れもするだろう。 そんなお年寄りが毎日八回、山を上り下りさせられたら。

夕刻の方が近いこの時間、天涯から海角へ向かう便に乗る客は少ない。

どちらかというところ、天涯へ、煌あざやかく夜景を見に来る海角のカップルの方が多い。 水平線に沈む夕陽や眼下に広がる海角の街灯りを眺め、肩を寄せ合いいちゃついている姿を、たまにバルコニーから目撃する。

観察者の僕にいわせれば、眼前の景色が本当に目に入っているのかは、甚はなはだ怪しいと思う。 特に、男は微妙と思うこと多数回。

まあ、それ以外にも、純粹に夜景や星空を見に来る愛好家もいる。 天涯は島一番高い場所にあるし、建物はどれも低めなので、住宅街からちよつと外れたら、どこからでも海が奇麗に見える。 空も広々としていて街灯も少なめなので、星座観測にももってこいだと

思う。

海角は逆に、建物が密集しすぎていて、近くに見えるはずの海は、方形に切り取られた僅かな幅しか見えず、空も四角い箱の底だ。天涯とは実に対照的。

この対照的なふたつの町をつなぐ列車内は、天涯でも海角でもない。

だけど、天涯から乗る僕には、ほんの少しだけ、海角の臭いが乗り込んでいる気がして、くすんだ緑のシートに座ったとたん、始めて郊外遠足に行った時のように、どうしようもなくワクワクしてしまう。これが、何回乗っても全く変わらずに感じるのだから、僕は、海角へ行くことが真実嬉しいのだと実感する。

いつものシートに大きめの鞆を置くと、かちん、と硬い音がたつ。慌てて鞆を開いて、さっき入れた大切な物が割れたり、ひびがいたりしていないかを確認。大丈夫だ。

僕が座って少しすると、女生徒が三人乗り込んできた。僕の斜向かいのシートに席を定めた様子。腰を下ろすか下ろさないかの内に、賑やかに、というよりは騒がしく、自分達の話に夢中になる。

「ねえ、聞いた？ B班のあの子。何か変な化物に憑かれて、眠ると悪夢にうなされて、半狂乱になって手に負えなかった、って話」

「ああ、聞いたわ。それあの半年近く休んでるとかいう、地味眼鏡っ子でしょ？ すっごく大人しくて静かで、いるかいないかわからないの。想像できないよね？ あの子が、すごい奇声を上げた。り泣き叫んだり、なんてさ。でもホントだったって、あの子の家の前まで行ってみたって子が言ってた。中から聞こえてくる声がさ、まるで怪獣かなんかみたいで、すっごい気味悪くて怖かったっ

て」

「そうなんだ。でもさ、なんかあるツテ？っての？それで、その筋で有名な祈祷師に昨日診てもらったら、すっかり治ったって。ウソみたいにすつきり、元通りの大人しい静かな子に戻ったって。今朝担任の先生が様子を見に行つて、すごく安心したつて、帰りのホームルームで班の皆に話したつて。来週から学校にも出て来るんだつてさ」

「なにそれえ、本当？　すごいウソつぽくない？　だいたい祈祷師なんてのが、むっちゃ怪しいし、それ実は、もぐりの詐欺師とかつてオチじゃない？」

「知らないけど、その祈祷師は本物だつて。前に他でも聞いたことあるよ、あたし。海角にいる、結構昔から有名な人なんだつて。でもね、ぜつたい姿は人に見せないんだつて。そのB班の子の時も、その祈祷師は、家族の知らない夜の内に来て、憑き物を抜つて、知らないうちに帰つて行ったんだつて。でもね、なんか噂では、すごいイイ男なんだつてよ。でね、その祈祷師は他にも、恋愛相談とか、色んな悩みも一発で叶えてくれるつて。そこに依頼すれば、なんでもすつごくスッキリ解決するんだつて！」

「ウソつ、それホントなら、ちょっとかなり興味ない？　しかも、イイ男つてのがホントなら、かなりポイント高くない？」

「高いたかいつ！」

「そうでしょう！　でも、その人の店が何処にあるのか、わかんないのよね。なんか、その祈祷とは別に、裏の仕事をしてるんだつて。それがさ　」

「きや、それマジでやばそうな話じゃない？ すっごい怪しい。でも、ホンとその人ところ、行ってみたいよね。どんな強面な人だろ？ マフィアの幹部っていったら、やっぱり年は結構いつてて、渋くてダンディで」

嫌でも耳に入るあまりの話に、思わず失笑。瞬間、彼女達の視線が僕へと集まる。まさに地獄耳。

が、そこはそれ、咳を数回して、周囲の人に申し訳ない、という顔をして頭を軽く下げる。と、彼女達は自分達の話しに再び没頭。まるで火が点けられた花火。筒から飛び出し、自分達の話の花を咲かせることにしか意識は向いていない。導火線をちよん切るには、並みのハサミでは無理だろう。いや、花火に例えると花火が可哀相だから、例えるならダイナマイト？ そのお気楽勝手なお喋りで、周囲の静寂を吹き飛ばし、第三者の感情に欠片が突き刺さる可能性など、微塵みじんも想像しない。もし想像していたとしても、頓着とんちやくはしないだろう。

「にしても、噂は怖いね」

音に出ない程度に呟つぶやいてみる。

彼女達の話題の「その祈禱師」のいる「その店」は、間違いなくこれから僕が向かう けしもの屋 こと 百彩堂 のこと。

しかし、世の一般の人々には、けしもの屋 は、「消しゴムだ修正液だの？ 消しもの？ だけを扱っている、冴えない潰れかけの文具屋」としか認識されておらず、その『実際』の仕事は知られていない。けしもの 仕事を依頼してきた客だつて、後金（料金は前金と後金に分けて請求をしている）を回収した後に、けしもの屋 の所在と依頼時に対面した人間の記憶は消させていただく決まりになっているので、正しく知られていないのは当然のこと。

とは言っても、噂の種は常に存在し、かつ、遅たくましく育つ。彼女達の噂話はその証明。

ただ、この種は決して正しくは育たず、適当な枝葉を伸ばした都市伝説と化す。

真実の けしもの屋 の けしもの 仕事は、極限られた人だけが知っている。知らない人は一生知ることはない、裏の裏の裏の裏の世界の稼業。 と、言いつつ、過去の日誌を読み見進めば進むほど、妙に普通な雑用仕事も、かなり請けているということが判明。 …… まあ、きつと何かしらの理由あつてのことだろう。 表稼業（になつているか？）の文房具の販売が伸びない（というより、まったく売れない）のだから、資金稼げんせいぎの為に請けた、と言う可能性もある。 百彩堂 の建物は玄青老板げんせいの所有だけれど、光熱費住民税その他諸々、を払わなければいけないのだから、最低限の収入は確保しなくてはならない。 いくら世間から大きくずれているお師匠やあの従業員達でも、それくらいは考えているのだろう。 多分……。

嫌でも入ってくる彼女達の話に、心中大爆笑を連発していたら、発車のベルが鳴った。

三時五分、定刻。 海角へ向け出発だ。

大きく息を吸い込むと、僕は首を締め付けていたネクタイをするりと外す。

これで、もつと楽に空気を吸い込める。

車窓に広がる豊かな緑の間に、時々程度に見え隠れしていた建物が、進むに従い緑よりその数を増していく。 風景の変化を見ながら、ゴトンゴトンと揺れる列車と椅子のきしむ音を楽しんでいる内に、海角中環駅に到着。 天頂中央駅から十分弱。

島のちよつと二合目程に位置する中環駅から、目的の天橋路までは、徒歩でこれまた十分くらい。

列車を下りた途端、熱気を帯びた臭いと音に包まれる。

臭い、というより空気自体の体臭ならぬ空気臭？ ムウツと蒸れていて、とにかく空気自体が重い。その重みに似合った、様々が溶け込んだ臭い。生活感がある、と言えばよいのかもしれない。

真逆に、天涯は臭いや音が殆どない。

季節の花の香りや、時々、どこかの御婦人が焚いている雅みやびなお香の匂いなんかはあるけれど、他にこれといった癖のある臭いはない。聞こえる音も、風に揺れる常緑樹の葉擦れかピアノの音、あとはお上品な笑い声がほんの時々、広い庭先の何処からか微かに聞こえるくらいで、とにかく、とても無味乾燥な印象。静寂を求める人にはお勧めだ。

中環駅の改札を抜け、駅前大路へ一步。

途端、視界がぎゅうぎゅうと狭く、暑苦しいものになる。

どこから湧いてくるのか、物凄い人・人・人の波。その人達が、みんな好き勝手に、声を落とすことなく喋る音量たるや、解体工事現場の音にも負けないんじゃないかと思う。

天橋路までの路は、十四・五階建ての古いビルに囲まれた、緩やかな下り坂が延々と続く。その坂道沿いには、色々な店が軒を並べている。揚げ物売る店、モツの煮込みを売る屋台、切花や果物を切り売りしている店。その横には、派手な色の安っぽい服や雑貨が、軒先に吊るし売られている。

そんな臭いや色彩より何より、店の人と客との駆け引きの声の大きさに、始めて来た時には驚いた。だって、何も知らなかったら、喧嘩をしているようにしか聞こえないのだから。

人また人で賑わう大路を抜け、目的地へ向け下っていく。下るにつれ、路みちは車道と歩道の区別がなくなり狭くなる。狭くなるに

つれ、人口密度も低くなる。

細い路地を幾度か曲がり、海角では珍しく太陽と海が同時に拝める路を抜けると、最後の角を曲がる。ここまでくると人影はまばらもまばら、人が住んでいるのかも怪しく感じる静けさと肌寒さ。

すつと、背中に殺気。

ここ一ヶ月で身に付けた条件反射。振り向きざまに鞆を前方へ突き出し、頭を少し右後方へ反らせる。

カツ、と、鞆のご真ん中に銀の小刀が突き立つ。こういう場合に備え、鞆は硬質の皮革製。飛んで来る凶器を、一定で受け止める強度と柔軟性。弾き飛ばして、凶器を凶手に返すなんて親切をしてはならない。

パンパンと、間の開く拍手が路地に響く。

「へえ？ 丁稚も、なかなかやるようになったじゃねえか？」

出たな、歩く凶器。しかし何故店の外？

理由詮索はさておき、鞆に突き立つ銀の小刀を抜きながら、僕は笑顔でこの憎もとい、ソリの合わない先輩へ視線を向ける。

「白獺大先輩。こういうモノ。投げて寄越すの、止めてくれませんか？」

全身白づくめの白獺は、その涼やか無表情のまま、ボールを投げるように右手を軽く、素早く振る。

銀光が顔の真横を走る。間髪入れず、背後の壁に硬い何か、が突き立つ音が聞こえる。

白獺の、白に近い銀眼が細められる。

手には、更に数本の小刀が光る。

「俺に、何か、言ったか？」

「いえ、何も言ってません」

これ以上口ごたえなどした日には、命が五十あっても足りない。
店の目前で、無駄な命のやり取りなどしたくはない。話題転換。

「そ、それにしても、白獏が昼間から外に出ているなんて珍しいね？
昨日の夜、仕事 だったんだらう？ 店番は誰が？」

仕事 後の昼間、白獏は必ず寝ている。いや、正確に言えば、
仕事 後であろうとなかろうと、昼間は寝ている。それが例え
店番中だとしても、寝る。店番、という名の昼寝タイム。夜行
性なのか何なのか知らないけれど、人員削減検討中の一般的事業所
ならば確実、第一候補になれる。

そんな夜行性白獏の、鋭利な視線が僕を貫く。「考えれば判る
だろつがド阿呆」と、無言の批判と威圧。

お師匠が店番をするのは、嵐の最中くらい。
今日は晴れ、だ。

7 「始まりの話」(前書き)

念のためのお知らせですが、今回のみ、まったく挿絵向きではない、大サイズの絵を末尾に置いています。携帯電話で閲覧されている方には申し訳ありません。

7 「始まりの話」

7 「始まりの話」

まだまだ六月二十二日金曜日・以下略

僕を眼刀で斬った後、白猿しろほくはすたすたと先に行ってしまう。あの先輩と仲良く肩を並べて歩く日など、到底来るとは思えない。

太陽の見える通りを曲がった時から、鈴を鳴らすような、夢のように心地良い音が聞こえて来る。

心臓が、ととん、と浮かれ打つ。足が自然に速くなる。

陽の射し込まない薄暗い路地を抜けると、ぽっかりと視界が明るくなる。左右を石塀で囲まれた小さな石置いしおきの院子にわ。百彩堂

は、この庭子の突き当たり。これまでの路で目にしてきた何れの店舗より、ひときわ古びた佇たたずまい。？老舗？という表現が似つかわしい、実にシックで重厚な店構えだ。

灰色な石の院子に、涼やかな音色が響く。

音源は確かめるまでもない。でも、眼が焦るようにその主を探し、すぐに見つけ出す。

店前に、古風な、裾のゆったりした衣装を着た少女が、団扇をゆったりと扇ぎ、籐椅子に腰掛けている姿を確認。

紅鳥こうとだ。

駆け出すのはみっともない気もするけれど、足が勝手に動いてしまふのだから仕方ない。

たった五メートルくらいの距離だけれど、のたのた歩くのももどかしい。

僕が来たことに気付くと、紅鳥は椅子からふわりと立ち上がり、

世界で一番じゃないかと思う、本当に綺麗な笑顔で僕を迎えてくれる。始めて会った時からずっと変わらない。

懸命に引き締めようとするけれど、相反して顔は緩むばかり。

「紅鳥、なに？ 待っていてくれたの？」

紅鳥の、白い小さな手に手を握られ、声がちょっと上ずってしまふ。そんな僕の心中など知らない紅鳥は、変らない笑顔で僕の腕にまわり付いて、店の中に入ろうと促す。

言葉を持たない紅鳥。

けれど、紅鳥が動いたたびに、周りの空気が揺れて、紅鳥の声の代わりに音を奏でる。まるで歌うみたい。

その音はとにかく澄んでいて、光るガラス細工のように煌いている。キラキラしてはいても、それは決して派手じゃない、優しい、柔らかな輝き。聞いていると、どんな嫌なことがあっても鬱々悶々うつうつもんもんとしていたとしても、静かで幸せな気持ちになってくる。

透ける白磁の肌に、するりと長い漆黒の髪、まつ毛の長い黒目がちの大きな瞳。そしてこの笑顔と身を包む清らかな音。

これだけの器量よし、性格もよし、の紅鳥を嫌う奴なんて、男でも女でもそうはいないと思う。

ただし、幽霊でも大丈夫ならば、の話。

そう。紅鳥は誰にでも見えるし、触れられるけれど、実は幽霊だ。

未だに信じられないのだけれど、本人がそう言っている（会話は筆談だ）のだから、本当なんだろう。もっとも、彼女を幽霊と知っているのは極僅かで、ほとんどの人は、可愛い「百彩堂の看板娘」としか思っていない。それくらいに、紅鳥は自然に、当然のよう

に存在している。

僕にとつても、この店（＝お師匠）と共に、いまや居ることが当然必須の存在。

「幽霊娘相手に、鼻の下伸ばしてんじゃねえよ。サカルには早えんだよ、ガキが」

前方から、悪意しか感じさせない言葉が飛んできた。せつかくの気分が台無しだ。

開け広げた店の扉にもたれるように、白獺が小刀を弄びながら、剣呑な空気を撒き散らしている。

「ったく、短けえ足だな。ようやく到着とはよ。短けりゃ、回転数でカバーしろってんだ」

陽の光の届かない、薄暗い店内を背景に立つ白獺の姿は白く浮き上がって見える。

白獺の姿はどこにいてもとにかく目立つ。

白い肌・白い髪・銀色の眼。

ただそれだけのことだけれど、比較的肌の浅黒い、黒か濃い色の髪が多い天堂島（特に海角）では、白いことは予想以上に目立つ。

町の壁もちよっと濃い目の灰色が多いし、陽もあまり町中には射し込まないから、そこでの白は、浮き上がるように見える。

おまけに白獺は、服も白しか着ないと決めているらしく、腰帯までも白。無彩色の極み。しかも、現代風じゃない、古装劇（要は時代劇だ）の役者が着ていそうなヒレヒレした衣装ばかり。髪や瞳の色を始めとする、諸々の珍しさもあって、白獺が町中を歩くと、かなりの確率で衆目を集める。好奇と笑いを編み合わせた興味の眼差し。不本意ながら、何度か一緒に出歩いたことはあるの
で、僕も体感済み。

紅鳥に言わせると、白獺は「奇麗」だから、皆が見惚れているのだそうだ。男はともかく、女性に関しては強く否定は出来ない気がする。

でも、本人は全く意に介さない。

それどころかたまに気が向くと、笑って見ていた相手を無言で、あの剣のような銀眼で見据え、逆に軽く脅してみたりしている。

時には小刀付きで。

師匠の深い黒の瞳ほどではないけれど、白獺の切れ長の銀眼は、怒らせると凄みがあつて、正視するには結構根性がある。

白獺曰く、「舐めてかかっていた余裕の表情が、だんだんと険しくなつて、最後には蒼白になつていく変化を見るのが楽しい」のだとか。こういつた場面に、二回ほど居合わせたことがある。確かに、相手側の百面相を見ているのは面白い。もちろん、白獺にそんな感想は言わない。言ったら、今度は僕が百面相する側になるだけだ。

白獺は、いわゆる？人間の世界？じゃない、他の世界から来ている『お客さん』らしく、見た目は僕より多少上の青年でも、実際は百何十歳かにはなるのだと紅鳥が言っていた。（紅鳥はその白獺よりも更に、年上らしい……。）

それならば、あのずうずうしさも、性格極悪の擦れた態度も、斜めのモノの見方も、多少納得。

「おい、サカリ猫丁稚。何をこたこた考えているか知らんが、爺イが呼んでるぞ」

イラついた白獺の声。お師匠に言われて、昼寝の前に僕を呼びに店頭に戻らされたってことらしい。なるほど、不機嫌なわけだ。電車のかしまし女生徒達の話が真実ならば、昨晚は仕事だった上に、さっきまで外に出ていたみたいだから、眠気が頂点、とい

ったところだろう。

白獺の態度はむかつくけれど、ここはやはり労わらねばならない、
だろうと思う。

仮にも先輩、仮じゃなくても先輩なのだ。

「　　それは、お知らせありがとうございます。　　あ、そ
うだ紅鳥、これ。　　こんな瓶詰めのカンディ、欲しいって言うて
ただろう?」

入り口の、二段しかない低い階段に足をかけながら、淡い水色の
ガラス瓶を靴から取り出し紅鳥に渡す。

中には赤や黄、紫、白に緑の丸いキャンディーが、小さな宝石の
ように光っている。　　瓶を傾けるたび、カチンカチンと玻璃を打つ
高い音がする。

紅鳥は眼を丸くして、瓶をそつと受け取る。

瓶を高く掲げ、遠い空の光にかざしじっくり見ている紅鳥の顔は、
いつそうキラキラと輝く。　　周囲の空気が一斉に、お礼を言うよう
にしゃらん、と震え、僕をくすぐりたい、幸福な気持ちにさせる
音で包む。　　それだけでも十分なのに、紅鳥は僕の正面に回って笑
顔でちょこん、と膝を折り頭を下げると、僕の腕にしがみついて、
頬をすり寄せながら、大切そうに手の玻璃瓶を見つめる。

「紅鳥、そんなに嬉しい?」

もっと嬉しいのは僕の方。　　来がけに落とし割らなくて本当に良
かった。　　あの時割れていたら、この笑顔は見られなかったのだか
ら。

鏡で見なくても自覚できるくらい、いま、僕の顔は最高にデレデ
レしているに違いない。

コン、と硬い扉の縁を叩く音。

同時、前方から再びの殺気。幸福一転、大盃^{たらい}数杯の氷水を浴びせかけられている気分。

顔を上げなくても分る。確かに、彼の手の中には銀の小刀が光っている。

「こ、紅鳥、お師匠が待っているっていうことだから、僕、ちょっと先に行つて来るね」

腕に絡^{から}んでいる紅鳥の手を離そうとすると、紅鳥は僕の顔を見上げてにこりと微笑み、僕を店内に誘^{よび}うように引つ張る。しゅらんと、空気が揺れる。

「阿呆う。紅鳥も一緒に、だ」

紅鳥の顔から白獺の顔へ視線を移す。やはり据^すわっている銀眼が、さつさと行け、と無言で脅しをかけている。

紅鳥に引つ張られながら、扉にもたれかかったままの白獺の横をすり抜け、店の奥へ続く廊下を抜け、お師匠の部屋へと行く。

いつもは閉ざされている両開きの扉は、片側だけ開けられている。

「お師匠。彩^{さい}です」

閉ざされたままの右扉の前で応えを待つ。

「ああ、お入り」

深い、響きの良い声が返ってくる。

「失礼します」

軽く一礼をして、紅鳥に続き室内へ入る。

正面突き当りの椅子に、百彩堂 老板てんちやうであり、僕の憧れの師である玄青師匠げんせいが腰を下ろし、茶壺から碗へ金色の茶を注いでいる。

その手つきの優雅なこと。

僕より先にお師匠の傍に行った紅鳥は、お師匠の右脇つぐえの卓子に玻璃瓶を置き、ちょこんと膝を折って挨拶をする。お師匠は柔らかな笑みを浮べると、紅鳥へ茶碗を渡す。

今日のお師匠は、長い髪を後ろで一つに束ねているので、いつも以上に顔がよく見える。例えその黒髪に隠れていても、お師匠の容貌は際立っている。白皙はくせきの美青年せきって表現はいまいち適切ではない気もするけれど、二枚目、という表現では軽すぎるし物足りない。

「彩君も、ほら、そこに座って。紅鳥、素敵なものを貰ったようだね？」

紅鳥は笑顔でこくりと頷くと、お師匠からキャンディーの玻璃瓶、それから僕へと視線を移す。お師匠は長い指で、玻璃瓶の表面をなぞる。

「食べられなのに、相変わらず紅鳥はこういうものが好きだねえ。

彩君、悪いね」

穏やかな玄青師匠の眼が僕に向けられる。

紅鳥に見つめられるのとは違う嬉しさと緊張が走る。妙な感じ。

紅鳥は、お師匠から渡された茶碗を僕の左横の卓子に置くと、玻璃瓶を取ってきて、僕の隣へふわりと座る。

今日のお茶は茉莉花茶。丸い爽やかな香りに気持ちちが和む。

これは特級品だ。

「いえ。 家にあつたものを持ってきただけですから。 僕も大井もこういったものはあまり食べませんから、紅鳥が持っている方がよっぽどいいと思って」

お師匠は意味ありげに「ふふ」と笑うと、腰帯に挿していた扇子をすつと抜き取り、はらりと広げる。

「そうだね。 それぞれより輝ける場に在るが幸せかもしれないね。 それより紅鳥。 その玻璃瓶は私が預かっていてあげるから、先に着替えておいで。 その後で髪を結つてあげよう」

紅鳥は、少し名残惜しそうに玻璃瓶を見つめた後、お師匠の横の卓子に再び瓶を置き、奥部屋へと消えていく。

「？ 着替えるって、お師匠。 紅鳥、何処かへ行くんですか？

それに、僕に用事って……？ 白猿と店番代わらないと、彼、昨晚仕事 だつたんですよね？」

「おや、昨晚 仕事 だつたこと、よく知っていたね。 その通りだけど、まあ、大丈夫だよ。 白猿君はどうせ、店番でもそうでなくても、昼間は寝ているだけなんだし」

いや、その通りなんですけど、一応でも？ 開店中？ の店の番なわけですから、「寝ているだけ」というのは、そもそも問題なのではないか、と言いたいところを呑み込んで、お師匠の言葉の続きを待つ。

「今日はあの御婦人の、大切な日だつたらう？ 彩君、行きたいかと思つてね」

はつとした。

そうだ。今日、だった。

「紅鳥も、一緒に行きたいと言って聞かなくてねえ。悪いけれど、一緒に連れて行ってもらえるかい？ 御婦人も、あの娘のことは気に入っていたようだし。君の元気な姿と紅鳥の歌。きっと喜ぶだろうよ」

あの捻くれたばあさんが、そんな素直に喜ぶ姿は想像できないけれど、ばあさんにはまだ、感謝の言葉を述べていないことを思い出す。

派手で、高慢で、見栄っ張りで頑固で、最期まで憎まれ口をきき続けたムータン婦人。

ひとり院子にわに佇たたずんでいた時の、寂しげな横顔は、とても美しかった。

いま、けしもの屋にいる僕がいるのは、あの日、あの婦人と出逢ったから。

> i4740 | 240 <

8 「縁結びは生徒会」

8 「縁結びは生徒会」

遡ること八カ月前・十月十日木曜日

九月の入学式から一ヶ月。

新しい学生生活に、新入生もそれなりのテンポをつかみ始めた頃、天堂中央第一学院中等科では生徒総会が開かれる。生徒会主催、新年度恒例の行事。

天堂中央大学付属、天堂中央第一学院は、創立百八十年になる名門校で、初等科から高等科までが併設されている。生徒の八割以上は、初等科からの知った顔で、残り二割が転入生。故に、新入生、新生活とはいっても、実際には新鮮味は薄い。

生徒数は各科五百人程度、一班は三十人以下で、男女共学だけでなく、女子の比率が若干高い。

この学院は、初等科であれ中等科であれ、学生の学外の奉仕活動参加に力を入れている。

地域の清掃活動から、病院や高齢者入所施設への慰問など、とにかく、学生が自身で責任を持って出来ることへは、積極的に参加を促している。

奉仕活動は、？奉仕？という以上、強制参加ではないけれど、内申に影響を与えることは確実なので、打算を含めて、ほとんどの生徒が参加をしている。純粋に、奉仕精神旺盛な生徒も多数いることを、念のため追記。

僕？ 僕は……半々、と言っておこう。

生徒総会では、生徒会執行部新役員の紹介と、前年度の活動報告

がまず行われる。それから、今年度の学外奉仕活動についての詳細な説明がされる。

この奉仕活動の説明が、総会のメインだ。

総会解散後一週間内に、各学年を担当する役員に、希望を提出することを言い渡される。

提出内容は、奉仕参加を希望するか、希望する場合、どのような内容の参加を望むか、の二点。

初等科の時、僕は清掃活動に従事していたので、中等科では福祉活動に参加しようとは決めていたが、その中でも、保育園などで、両親が迎えに来るまでの時間、預けられている小さな子供の遊び相手をするか、独居の高齢者宅を訪問し、雑事を手伝ったり話し相手をする活動か、どちらを選ぼうか悩んでいた。

それを、素直に一年担当の生徒会役員に伝えると、「じゃあ、お話し相手の奉仕が足りないから」と、あっさり後者に従事することとなった。

それから一週間後。参加者各人に訪問先が言い渡される。

訪問奉仕は、二人一組で、一人の高齢者宅を受け持つ。慣れた三年生の中には、一人で担当をしている人もいるらしいけれど、何があるか分からないので、基本は複数人で担当をする。

五・六人一組で、高齢者の公共入所施設を担当する場合もあるらしい。しかしこちらには、既に慣れた新二・三年生が、昨年度に続き行くことが決まっているので、自然、新入り一年は、六月に卒業した旧三年生が受け持っていた人々を、割り当てられることが多いくなる。

「結城君。あなた西海岸通りの、独橋路四番地にお住まいの御婦人を知っているかしら？」

木曜五限の放課後、廊下に呼び出された。

新三年生、生徒会書記の先輩が、担当予定先の住所が記された紙を渡しながら、僕の顔を伺うように見つめ言う。

「いえ。独橋路といったら、西海岸通りでも北側の下通りになりますよね？ 僕の家とは逆方向なので。あちらにはあまり行ったことがありませんから、そこにどなたが住まわれているかは、ちょっと……」

第一学院の生徒は、家柄抜群、いわゆる上流階級の子息子女がほとんどで、生活環境の影響か、若いにも関わらず、言葉遣いは寒々しいほどに上品丁寧。

「そうね。あなたのお宅からは少し離れているし、あの辺りは人家が少ないから、知らなくても当然かもしれないわ。あのね、あなたには、そこに住んでいらっしやるムータン婦人のお相手をお願いしたいの」

度のきつそうな銀縁眼鏡をかけ、耳下で長めの髪を二つに括った先輩は、制服の襟を弄いじりながら、少し遠慮げに言う。

「わかりました。それで、僕と一緒にその方を担当するのは、何年のどなたですか？」

「それがね、訪問奉仕は希望者が少なく、その、一年生のあなたにいきなりなんだけれど、その御婦人は、あなた一人で受け持つて貰もらいたいと、執行部では希望しているの。お願い、できるかしら？」

先輩は、妙に僕に気兼ねしているようで、最初に挨拶して以来、僕の顔を見ようとしない。

「？ 構いませんけれど、その、ムータン婦人の前任の方は、二人とも卒業された先輩なんですよ？ その方達の記録があれば、見せていただけませんか？ 御婦人の趣向等を、知っておきたいので」

必要情報の入手は、物事をスムーズに進めるためには欠かせない。現場で集めても構わないけれど、事前に知っているといたないでは心の余裕が違う。もっともそれは、その情報資料が正確且つ明快であれば、の話だけれど。それは見てみないと判断できない。すぐに反応が返ってくるかと思いきや、先輩は少し俯き、逡巡^{しゆじゆん}している。

僕は次に何を言われるか、後輩らしく、無言で待つに徹する。

「それが 何もないの」

先輩は、左斜め下に視線を落としたまま、曖昧な口調で言った。

「何もない？ ああ、それではその御婦人は、今年度から新しく訪問先に登録された方なんですね？」

先輩の気まずさを打ち消すように、僕はなるだけ明るい声で、はきはきと応じてみたが、相反して先輩は、視線を更に深く落す。

「それが、そうではなくて……」

「?? 前から、訪問先だった、ということですか？ それならば、記録がないというのは、いったい？」

僕の疑問に、先輩は意を決したように顔を上げる。銀縁眼鏡の向こうから、僕の瞳をきつと見据え、僕の両肩に力強く手を置く。

「頑張つてね、結城君。 私達、あなたならきつと出来ると、信じているから」

先輩は、少しぎこちない笑顔で僕の肩を二回叩くと、さつと踵かかとを返し、生徒会室へと続く廊下を、素晴らしい歩行速度で去っていく。

教室前の廊下に、一人残された僕の手には、訪問先の住所と日時、訪問時の一般的注意が書かれた紙と、一抹いちまつ以上の不安が残された。

9 「初訪問・其の壱」(前書き)

今回、無意味に「落描き」を末尾に置いてあります。(しかも暫く出演しない人物：)

読んで下さっている方への感謝を込めて…のはずが、ホントにただの落描きになってしまいました。

気持ちだけは、文字で伝わると、信じて…。

9 「初訪問・其の壱」

9 「初訪問・其の壱」

昨年十月十一日金曜日 晴れ

転がり始めたなら動きは速い。

しかも、ここは坂の島・天堂島。 転がり出したら加速はすれど、
何かにぶつかるまで止まりはしない。

「それじゃあ、行ってらっしゃい」

学外奉仕活動を統括する生徒会執行部、一年担当の先輩に見送られ、放課した教室を後に、訪問先へと向かう。

初訪問日。

決定を告げられた翌日が訪問日になるとは、なんとも忙しいこと。
お陰で、大した予習ができなかった。

しかも、事前に入手できた情報は、なんともミステリーに満ちた、
真偽が定かでないものばかり。

「あー、おまえ、あそこ、に行くことになったんだ。 そりゃゴシ
ューショーさま」

初等科以前からの幼馴染・公孫秀こうそんしゅうが、にやにや笑いながら言った。
何故「ご愁傷」なのか問うと、「ま、ユニークっていうの？」と、
もったいぶって笑った後、「行きゃわかるさ、すぐに」と、僕の肩
を叩いた。 生徒会の先輩と同じ。

他の友人五・六人に同じことを尋ねたが、僕と同じに知らないか、
秀と同じに僕を励まし慰めるかのどちらか。

「うーん。まあ、確かに行けば嫌でもわかることだけど……」

壁が高ければ高いほど、乗り越えたいという思いは強くなる。

邪魔が入れば、それを排除か回避することに力を注ぐ。その邪魔が、自然現象のように不可測、且つ防ぎようのないものでない限り、何かしらの手立てはある。はずだったのに。

「若。 何事かございましたか」

リビングのソファアールでため息をついていた僕に、大井が緑茶を運ぶ。花形に押された和三盆の茶菓子付き。

抑えた赤の、紅葉が描かれた白磁碗に揺れる鮮緑をみて、ふと、最後の頼みの綱があったことを思い出す。

「大井は、僕の曾爺ひいじいさんの時から天涯に住んでいるんだったよな？」

「左様でございます。 若、いまさら何の確認でございます？」

大井は僕のことを「若」と呼び、父のことを「殿」と呼ぶ。 いたい、どんな時代の呼称だと言いたいところだけれど、大井が口にする、非常にしっくりとくる表現なので、敢えて修正を求めはしない。

総白の短髪を後方へ綺麗に撫でつけ、濃い銀鼠の上に渋い鉄紺の袴という和の装いで、家事一般から広大な敷地の管理、来客の接遇他一切を一人でこなす大井は、天涯の住人の中でも、上から何番目かに入る古老。 しかも、情報収集のベテラン。

彼なら、件の老婦人について何かしら知っているに違いない。

「それは、いま、必要な情報ですか？」

大井は、その年齢を感じさせない張りのある声で、静かに問う。

「情報は重要だって、いつも大井が言っていたんじゃないか？」

ちよつとむつとした口調で言い返すと、桃色の和三盆を口に放り込む。季節外れの、牡丹の形をしたその砂糖菓子は、口に入るや、さあと、滑らかに溶けてなくなる。

「情報収集は、確かに重要。正確に、過不足なく集める事が出来れば、見通せることは多くなりましょう。しかし、ことによっては、収集時期、というものがある場合もございます」

「時期？ なんだよ、それは。明日必要な情報を今知りたい、と思うのは、時期が間違っているか？」

大井は何も答えず僕の顔をただ見ている。

少し厳つい、無骨に見える大井の無言注視は、僕が一番苦手とする攻撃。

「自分で考える」と、暗に言っているのだ。

結局、大井からも情報は得られなかった。

そんなこんなで、昨日の会話を反芻している内に、目的地 通称、西海岸通りの独橋路四番に到着する。学校からここまで徒歩三十分。雨風の日には少し遠い。

学校を出てしばらくは、大きな邸宅がまばらに路の両脇にあったが、最後の十分間、人家を見た記憶はない。

「独橋路」という地名を教えるかのように、人家が途絶える十分前、一本の小橋を渡った。

その先にあつた初めての人家が、目的地だったというわけだ。
西の海が眼下に広がり、眺めはなかなか気持ち良い。
けれど、なんとも寂しい場所。 風だけはよく通る。

「これ。 廃墟……じゃ、ないんだ」

そう言わずにはいられない、寂れた家屋。

入り口となる門扉は錆くれて、蝶番が壊れ、傾いたままで半開き。
門脇に植えられた庭木の、茂りきつた枝葉や伸び放題の雑草に、
その先に見えるはずの玄関は隠れて見えず、遠目に、辛うじて目に
出来る家の壁や屋根は、あちらこちらがボロボロに崩れ、剥がれ落
ちている箇所多数。 敷地はかなり広い。

「なるほどね。 来たんだ、阿秀のやつ」

外観だけで、「幽霊屋敷」として売り出せる趣十分。 これで、
怪しげな声や影でも確認できれば、怪奇現象愛好者向けの、立派な
遊興施設になると思われる。 声や影は演出できるから、現時点で
も施設活用は可能かも。

ただ、その手の遊興施設は、オープン当初はそこその人気を得
られても、長続きはしないもの。 短期的にならば、試みとして所
有するのは話題性もあるし、面白いとは思うけれど、所有が長期間
となれば、採算割れが必至。 半端には手を出さないに限る。

しかし、そういう謎めいた、怪しげな事象に強い興味を抱く人は
少なくない。

腐れ縁的友人の公孫秀などは、身近なその代表。

真実虚構の別なく、怪奇現象が「大好物」である。「探険」と
称した、ミステリースポット巡りは、秀の趣味その一。 初等科一・
二年の頃は、僕も何度か無理矢理付き合わされたが、ここ数年は無
視で通している。

そんなわけで、秀や、彼に引つ張られた友人達が、ここを訪れたであろうことは容易に察しが付く。来たことがない、という方が変だ。

そんな秀と長年友人をやっているとしても、生憎、僕はその手の現象に興味はない。

そも、幽霊だ妖怪だといった、空想や想像の産物を信じていない。何事にする、現代科学や心理学等を以つてすれば、その謎の大半は、説明ができると思っている。

人間が認知できる現象には、それを起こす原因因子が必ず、何かしら、何処かしらに在るものだ。現在、究明しきれていないものでも、将来には解明されると信じている。

などと、不満渦巻く頭でごちゃごちゃ考えていたら、無駄に五分が過ぎてしまった。

ネクタイを少し緩め、壊れた門扉の先を睨むと、深く息を吸う。

「ごめんください。天涯中央第一学院から参りました、奉仕活動の者です。どなたか、いらっしやいますか？」

大声で呼びかけること七回。

聞こえるは、風が草葉を揺する音だけ。人的な反応は一切なし。

「間違ったっけ？」

昨日渡された、住所の記された紙をポケットから取り出す。門扉横に、ひび割れ欠けてはいるが、辛うじて判読可能な陶器製番地プレートプレートの数字を確認。間違いはない。

訪問の曜日と時間は、事前に生徒会から各訪問先に伝えられている。前日（要は昨日）には、確認の電話もされているはず。

「それなのに、不在って。訪問拒否されてるってことなんじゃないの？」

更に一回、先と同じ呼びかけをした後、変わらず応えがないことを確認。

こうなったら、無断進入もあり、だ。

中で、件の老婦人が倒れていたりしたらいけない。 「心配

だったから勝手に入ったんです」という理由いいわげが成り立つ。

腰近くまで伸びた草の下には、玄関と、その奥に在るであろう院子にへ誘うように、二本の石敷きの小路があった。生い茂る草で、足元がよく見えず歩み辛い。しかも、ほとんど天堂島の慣習かと思えてくる歪いびつな敷石は、デコボコと縁が擦れて所々窪みがあるので、足を引つ掛けて転びそうになること複数回。

並列していた二本の小路の分岐点に着くと、一旦立ち止まり、左右を見る。

玄関に先に行くのが良いかとも思ったが、もし居留守を使っているのならば、玄関からまともに呼びかけたところで、無視をされる可能性が高い。それならば、少々違反行為だとは思つが、院子にまわる方が、現実性が高いと踏む。

分岐点から院子まではずぐだった。

小路と院子との境には、とりあえず壊れていない、小さな白い木戸があり、その先にはやはり、緑けぶる院子が広がっていた。

雑草も生えてはいるが、ここまでの、ぼつぼつと荒れ果てた小路から想像したとはかけ離れた眺め。

自然を活かしつつ、美しく整えられた院子にわ。

濃淡ある緑の中に、鮮やかな赤や黄、紫の花が咲き乱れている。

思わぬ眺めに少し見惚れたが、すぐに妙だと感じる。

ここに咲いている花々は、いずれも今が花期ではない。

梅、水仙、蘭、牡丹、芍薬、芙蓉、杜若、薔薇　どれもが、自宅や近所の庭先で見えるものよりも大きく、己の美しさを知り、それを誇示するように咲き競っているよう。

手入れの行き届いた植物園でも、これほど見事に咲かないのでは、と思う。

けれど、何よりも目を惹いたのは、その中心に立つ婦人の姿。

後頭部で丸く結われた雪のように白い鬘を、金の笄しゅうがいで留めている。笄には、真珠と紅珊瑚と思われる宝石が埋め込まれている。

顔には細かな皺が見て取れる。手には杖が握られており、それに凭もたれるように立っている。複合的に見て、それなりに高齢。

けれど、その外見から推測する年齢とは結び付けられないような装いを、その老婦人はしていた。

鮮やかな大紅の裙子スカートに金糸銀糸で刺繍の施された緋の衫子シャツ。肩には淡い黄色の圍巾ストールを羽織っている。年齢を問わず、派手、の一言に尽きる格好。

だけど、それは婦人にとっても似合っていた。

咲き誇る緋牡丹のような姿で、老婦人は見ていた。

眼下に広がる海を、その上に広がる秋晴れの青空と、高く浮かぶ白い雲を。

ただ、静かに見つめている。

その姿を、僕もただ見つめ続けた。

風だけが、止まることなく流れ続ける。

「鬱陶がきしい餓鬼がきだね」

突然の人声。　合わせるように、草木が風に鳴る。　そして再びの静寂。

「は？」

誰が発した言葉か判らず、僕は思わず周囲を見回した。

「いつまでそこに突っ立っているつもりだい？ 人様の家に、許しもなく勝手に押し入るような教育を、第一学院はしているのか？」

第二声でようやく、出所が目の前の老婦人だと知る。

同時に、明らかな居留守が使われていたことも判明。

これが、ムータン婦人との記念すべき出会い。

> i 6 4 1 8 | 2 4 0 <

10 「初訪問・其の貳」

10 「初訪問・其の貳」

同・昨年十月十一日金曜日 晴れ

後日、公孫秀こうそんしゅうに初訪問日の話をしたところ、「へえええ？ 追いつ返されなかつたんなら、お前、婆さんに気に入られたんじゃネーの？ さすが、？ご婦人オトシ？の彩少爺さいしやうぢやんだなあ」と、へらへら笑いながら言った。誰が「ご婦人オトシ」だ。妙な綽号あだなをつけるのは、阿秀あしゅうの趣味その二。

いや、趣味というより無意識のクセ、と言っべきか。

「気に入られる」。つまりは「気に入り」になる、こと。

その意味するところは、「心になうこと」「好きなこと」、対象は「人や物」様々。

つまり、僕は婆……もとい、老婦人に、好意を抱かれた、もしくは、好感を持たれた と、阿秀は言いたいらしい。

まだ一日しか行ってないが、その？ たった一日？ の内に吐かれた暴言及び暴挙の数々を思い出すに、どれをとっても「気に入り」という言葉とは、結び付かない。

いや。結び付けたくも、ない。

「勝手に敷地内に入り、大変申し訳ありませんでした。僕は、天

堂中央第一学院一年に在学している、結城彩、と申します。何度か、表から声をお掛けしたのですが、お返事が聞こえなかったもので……。失礼ですが、ムータン婦人、でいらっしやいますか？」

僕は、心底申し訳なさそうに頭を下げた後、遠慮がちに婦人の貌を覗き見た。

口の端や目尻に数本、小さな皺はあるものの、その容貌は玲瓏、言葉を交わさなくても、犀利な頭脳の持ち主であろうと推測される。老婦人は僕の問いに応えず、珍獣でも観察するように、侵入者である僕を頭为天辺から爪先まで、じっくりと時間をかけて観た。

「あの」

あまりに長い沈黙に耐えかね、僕が先に口を開く。このあたり、僕の経験値がまだまだ低いことの表れだろう。

「よく、喋る餓鬼だ。しかも、言葉が汚い。気色の悪い」

「……………」

返す言葉が見つからなかったのは、言うまでもない。

言葉が汚い？ こんなことを言われたのは、生まれてこの方初めての経験。

恐らく、僕の顔は強張っていたに違いない。

僕の問いに答えないうまま、婦人は野良猫でも追い払うように手を振り、玄関へ回るよう言った。

玄関から、薄暗い廊下を抜け、居間と思われる、院子に面した房間へと通される。

微塵も期待はしていなかったが、まず座ってお茶を勧められる、

とか、互いに自己紹介をし合う、等の儀式はなかった。
いや。そも通されたこの房間は、そんな和やかな時間を過ごせる空間じゃあない。

「来ちまったんなら仕方ない。せいぜい働いてもらおうとするよ。
ここだ。この房間の壁を、綺麗に塗りなおしておくれ。前に
来た奴等は、中途半端で遣り逃げしたんだよ。見な、お陰でこの
有様だ。壁色は真白がいい。塗り終わったら、お前のここでの
務めは終わりだ。来る必要はないよ」

「……………」

婦人の一方的な言葉は、半分も耳に入っていなかった。意識の
九割九分までが、視覚に奪われていた。

三十平米程の広さの、洋風な房間の壁面は、超前衛芸術モダン・アートの描きか
けか？と思いたくなる斬新さ。

？アート？という表現は、芸術を愛する人々に失礼かもしれない。
調度品は、中央に置かれた紫檀と思しき木製の椅子と？子以外、
まったく何も無い。

房間の入り口で、呆然と立ち尽くした僕の頬に風が触れる。鳥
の声も遠くに聞こえる。
視線を少し上げる。

始めて、少し離れた正面の景色に気付く。
院子にわに面し、両開きの大きな扉がある。

どちらも開放されていた。扉の上半分は硝子板が嵌められてお
り、閉じていても、院子がよく見えるだろう。下半分の木枠部分
には、控えめだが、凝った彫刻が施されているようだ。

扉に縁取られた院子の緑と花々は、一幅の花鳥画の様で、掛け軸
を觀賞しているような、端正な眺め。

が、僅か三度程、視線を斜めに動かすと、別世界へ踏み込む。というより、突き落とされる。

本来の壁の色や模様は、まったく判らない。

上から幾度も、ペンキを塗ったり壁紙を貼ったりした痕跡が見られる。その場しのぎで行った作業らしく、塗りに斑ムラがあったり、壁紙が剥離したり破れたりしている。本物の廃屋の室内の方が、余程マシな状況じゃないかと思えるほど、ゴテゴテと、あらゆる色と柄が入り混じった、ひと言で言えば「趣味が悪い」壁面。

題するなら「混沌」、といったところか。

長く見ていると、溢れる色柄に酔ってしまいそうだ。

「ぼさつとしてるんじゃないよ、餓鬼、？奉仕？したくて押し掛けて来たんだろ？」

「僕には、？結城彩ゆつきさい？という名があります」

憎憎しげな老婦人の言葉に、思わず言い返してしまった。しかし、誤った反論とは思わなかったので、勢いで言葉を続ける。

「僕は自己紹介をしました。若輩者が、無礼な口を利くと思われませんか、用事を言いつけられる前に、お名前くらい、教えて下さってもよいのではないのでしょうか？」

老婦人は、表情を変えることなく、底の見えない黒い瞳で僕を見据えた。怒り出すかと思っていたが、意外にも、老婦人は皮肉気味ではあるが、笑顔を浮かべた。

「はん。まったく、近頃の餓鬼は口ばかりが立つ。だが、お前

の言い分ももつともだ。あたしの名はムータン。ムータンでも婆さんでもババアでも、好きに呼びな」

ムータン婦人はすつと身を翻すと、奥に続く房間へ向かい、小振りの茶盤と熱水瓶ポットを手に戻ってくる。茶盤の上には茶壺きゆうすとふたつの茶杯ちやわんが載っていた。

「今日は空気が乾燥している。まずは喉を湿らせな。作業はそれからでいいよ」

円形つぐえの？子に茶盤を置くと、婦人は慣れた手付きで熱水瓶ポットから茶壺へ湯を注ぎ、茶杯へ注ぎ分ける。青茶の芳醇な香りが、開け放たれたままの窓から入る微風に乗る、房間の入り口に立ったままの僕まで届く。

茶は蜂蜜色の輝きで、熟した果実のように、とろりとした香りと柔らかな味わい。

と、この瞬間だけを切り取ると、確かに婦人の態度は好意的にも思える。

しかし、それは早計というもので、第一第二の印象が、ムータン婦人、こと？婆さん？の本性を余すことなく現していたのだ。

この三十分後から、僕は婦人の一方的申し付けに、ただひたすら従事することとなる。

どう思い返しても、初訪問は？衝撃？の大安売りで、好印象はない。

もっと端的に言えば、最悪 だった。

「公孫秀」を名前で呼ぶ時の「阿秀」の「阿」
は、親しみを込めた

仲の良い者同志での呼び方です。 気の置けな
い仲間同士でよく使うようです。

11 「後悔と意地と小さな怪我」

11 「後悔と意地と小さな怪我」

以降、明記ない限り昨年

十月十九日土曜日 快晴

週二日、各二時間。

火曜日と金曜日、午後三時から五時。

それが、僕が学院側から言い渡された、独橋路^{どくきょうじろ}四番地への訪問予定日時。
のはずだった。

それが週三回に変わったのは、今週火曜の午後三時五十分頃の話。

「手際の悪い餓鬼だ。 そんなちんたらやっていたんじゃお前の卒業までかかるんじゃないかい？ 白を塗る前に、緑の黴^{カビ}が生えちまうだろうよ」

訪問二回目の火曜日。 ムータン婦人開口一番の台詞。 今日も華やかな大紅一色の装い。

「すみません。 なにぶん、慣れない作業なもので。 慌ててやって、壁に傷を付けてもいけないですから……」

ビニールシートの上に置いた脚立に跨り、皮スキ（汚れ落とし用のヘラ）の柄を握り締め答える。 こびり付いたペンキをこそぎ落とすため、顔は壁に向けたまま。 ついでに、無駄と思いつつ自分

の名前を強調して言ってみる。

「先週末にこつちの用件は言っておいたのに、当日になって道具を運び込むとはなあ。まあ、この一連の段取りで、小僧、お前の手の悪さは分かったよ。昨日のうちに運び込んでおけば、下準備の三十分を無駄にせずに済んだんだよ」

念押しが効いたのか、？餓鬼^{ガキ}？から？小僧^{こそう}？には昇格した。その変化に意味があるか？と考えると、虚しい気もするが……。

どの口が「昨日のうちに運び込んでおけば」というか？昨日夕方訪ねた時、居留守を使ったのはこのどいつだ？承諾もなしに邪魔になるのが目に見えている道具を無断で置いていく訳にもゆかず、僕は重い脚立・ビニールシート他を、再び学校へ持ち帰るはめとなった。あれら重量級かつ嵩張^{かさば}る荷物を担いで学校からここまで往復するのは、育ち盛りの健康な少年でも、かなりの重労働だったんだ。などとは言えないので、「申し訳ありませんでした」と、せいぜい素直に謝る。

「あたしゃね、他人と一緒にいることが嫌いなんだ。落ち着いて茶も飲めやしない。こんな押し付けの訪問なぞ要らんと、ずっと断っていたんだよ。それを、役所の奴等やお前の学院の生徒会何たら共が、連日押し掛けてはぎゃんぎゃん喚くもんだから、面倒になつて、二年前から承諾してやった。だがどうだい？仕方なしに受け入れてやったのに、こちらの要望を言つて遣らせたなら、どいつもこいつもちんたらしてなかなか進みやしない。それだけでも腹が立つつてのに、ちよつと注意をしたら泣き出す、脚立を倒して壁をへこませたり床にペンキをぶちまけたのもいた。その内には、来る顔が週毎に変わった。鬱陶しいつたらなかったよ。だからもう、今度こそお断りだと言つてやったのに、懲りもせず、今度はお前を送り込んできた」

ねちねちと、婦人は作業する僕の背に言葉を浴びせかけ続ける。自分だけ、淹いれたてのお茶を愉しみながら。独特の甘い香りが風に乗って届く。桂花茶と推察。庭先の金木犀きんもくせいの花を摘んで乾燥させたのだろう。合わせた茶葉は、さしずめ弱発酵の青茶。

埃避けのため頭に巻いたタオルと、顔半分を覆う巨大マスク。首にもタオルを巻いて、流れる汗を吸わせる。手には軍手。ただし滑るので、皮スキを握る右手はしていない。

塗料はがし溶剤の刺激臭が、淡い茶の香りを抹殺する。これも、「お肌に優しい低刺激 臭いも穏やか（自社製品比）」が売りの製品。改良の余地はまだ十分にあると思う。

現在、作業に使う道具の半分は我が家からの持ち出し。

もちろん、活動に必要な経費は学院側が負担するし、訪問先家庭の都合により発生する費用は、基本、訪問先の家庭が出すことになっているが、何分にも、過去の担当者達がしかした後始末をするという側面が強いので、ムータン婦人に費用の全額負担を求めるのは憚はばかられる。費用のことなど口にしようものなら、「嫌なら来るな」で終わるだろう。だがしかし、天涯区行政福祉課の職員と共に、「地域福祉に力を入れている」生徒会執行部は、「問題を抱えていそうな高齢者ほど、より、気にかけるてはいけない」と主張。特殊事例ではあるが、可能な限りムータン婦人の要望に副たすけようという努力しようというのである。実に前向きだ。それにはまったく異論はない。

ただその裏に、二年間で堆積した婦人の不平不満を、今年度こそ解消、改善し、更には良好な関係を構築、伝統ある学院の名誉挽回を図りたい、という思惑が垣間見える。ある意味、重要な局面である三年目の特命大使として白羽の矢が立ったのが僕。新入りだ

というのに、ずいぶんと見込まれたもんだ。

ともかく、本格的に壁を塗り直すとなると他にも必要な道具はま
だある。銀縁眼鏡先輩、生徒会経理担当者と僕の三者協議の結果、
作業完了後に、経費申請書を提出することとなった。

そんなわけで、現在学院側から支給されているのは、予備も含め
た三組の軍手だけ。

朝晩は多少涼しくなってきた十月半ば。しかし日中はまだまだ
暑い。

放校後、急いで自宅に戻り作業しやすい服に着替えて来たのだけ
れど、埃よけにと長袖を選んだのは失敗。暑くてすぐに袖をまく
った。

作業は予想以上の肉体労働。

労働による体温上昇に加え、ムータン婦人の言葉による血圧上昇
で、僕の体温は普段より、軽く一度は高くなっていそう。マスク
とタオルで蒸れ、更にコンマ五、高くなっているかもしれない。

「けれど、今年も訪問を受け入れてただけて本当に良かったと、
執行部の者が言っていました。あの、この壁塗りの他にご要望が
あるのですしたら、遠慮なく仰って下さい。可能な限りの努力はい
たします。もちろん、僕に出来る範囲で、の話ですけれど」

作業を続けながら、恐縮気味に返答。

謝罪と意見伺いは、相手の顔を見ながら口にすべきだと思いが、
非礼を承知で態勢維持。

そも、婆さんは僕の謝罪など聞いてやしない。

僕は僕で、本心から婆さんの言うことを聞きたいと思っているわ
けではない。

しかし、訪問先で要望が出された場合、真摯しんじに耳を傾け、可能な

限り要望に副うよう努力する。これは執行部の方針で、初訪問前日に渡された注意書きの五番目に記されている。新米として無視するわけにもいかない。

だが、この注意書きに順じた言葉が仇となる。この後、不毛なやり取りを何遍かした拳句、追加で土曜、午前十時から午後五時までも訪問することとなった。

その晩、激しい後悔に苛まれたことは言うまでもない。

翌水曜朝一番、執行部へ報告に行ったところ、「やっぱり結城君に頼んだ私達の目に狂いはなかったわ！もちろん、問題はなくてよ。頑張って頂戴！」と、銀縁眼鏡先輩は、嬉々として激励の言葉を送ってくれた。

僕としては、「最初からあまり無理をしないで」くらいの台詞を、極僅かに、期待していたわけだが、ま、そんな展開を望むことが極甘、ということも予測はしていた。

ちなみに、ムータン婦人は日曜も作業に来いと言ったのだが、精神衛生を護るため、「予習などをしなければいけない」という、学生らしい理由を付け断った。「そんなもの夜すれば十分だろうに、勉強も要領が悪いと見える」などと嫌味を言われたが、譲る気には更々ならなかった。挑発に乗ってなるものか。

*

「今日もいい天気だ。少々暑いが、花が喜んでるよ。ここ最近パツとしなかったからね。ああ、その作業に区切りがついたら表を掃いておくんだ。昨晚の風で、葉が随分と散った。集めた葉は、土に還すから捨てるんじゃないよ。そうそう、門脇の草木に、少し水を遣っておかなきゃだ。重ねて言っておくが、院子には入るんじゃないよ。素人の小僧に荒らされたくはないからね」

昨日に続き、脚立の上で黙々と作業している僕に、ムータン婦人は、今日も目に眩しい朱の裙子スカートに込み入った刺繍の施された黄の衫シャツを見事に着こなし、晴れ晴れとした声で指令を出す。壁との格闘前に、？子こと椅子を院子にわ側の扉脇に移動させた。風通し良く、眺めも最高の位置。それは気分も良いことでしょう。

こんな瑣末な感情に阻害され、即座に返答できない自分の未熟さをまた痛感。この超前衛芸術壁との戦いに、そう簡単に区切りなぞぞ付くわけねえだろうが……。

ああ、心内言語が荒んでいく。
いけない。もっと前向きに、思考転換を図らなくては。

今日はめでたい初土曜訪問。訪問四回目。

昨日までの六時間の付き合いで、婦人との会話もそれなりに重ね、互いに「いけ好かない相手」と、とりあえず認識しあった。

この先、この非友好的印象に変化がもたらされるかは、「神のみぞ知る」だ。

婦人の淹いれる茶は、非常に美味だろうということは、主に嗅覚で知っている。

味覚的には、初日の一杯だけしか味わっていないのだが、あれは大井が淹れる茶に引けを取らない。茶葉の良さもあると思うが、淹れ方の妙技に由るところは更に大きい。あの一杯は、まさに口福ふくだった。

今日は菊花茶のよう。黒茶の厚みある発酵香と菊花のきりりとした香りが程よく混じり、マスク越しでも愉しめる。今日は暑いから、このお茶はさぞ美味に違いない。

こめかみに流れた汗を、軍手で拭う。
ついでに腕時計を見る。

十一時前五分。まだ一時間も経っていないのに、三時間は働い

た気分。

残りの壁面を見遣ると、軽い眩暈に襲われる。前途遼遠。昨日までの作業で進んだのは、せいぜい一面の五分の一度。

過去、この壁と闘った素人達（この点は僕も同様）が、手順も考えず塗ったり貼ったりを繰り返した結果、壁の厚さが部分により不均一、ところによつては半立体という有様。

昨年度までの担当諸先輩が、訳も分からず、暴言に怯えながら遣らされた末のあり様だろうが、不器用にも程がある。過去の壁紙やペンキを取り除いてから作業しろってんだ。しかもこんな見苦しい、解体途中の家屋の如き有様で放つて逃げ出すなんて、遣らされた経緯はさておき、プライドはなかったのか？

……と、何を考えてもため息が漏れるばかり。過去を憎んでも無駄なだけだ。

とにかく、過去の遺産を剥ぎ落とし、壁面の汚れやカビをすつかり取り除いて壁面を均した後、ようやく、ムータン婦人所望の「真白」を塗ることが出来る。壁を塗る作業をしたことはあるが、ここまで惨い壁を真つ更の状態に戻すのは初めてなので、実際、この作業にどれ程の日数を要するか見当がつかない。だけど、少なくとも今月の訪問日内で二面は終わらせる。来月半ばには塗りに入る。当座の目標だ。

「小僧、手が止まっている。まだ始めたばかりだったのに、もう疲れたってんじゃないだろうね？」

「そんな、まさかまだ疲れてなんかいいですよ。どうやったら効率的に作業が進められるかを、ちよつと考えていただけです」

声だけ笑いながら、皮スキを動かす手に力を込める。平常心、平常心。

「お前、まったく感心するほど口と心が一致していない。後悔を育てるのが、お前の趣味なのかい？」

それでいうなら、婆さんの趣味は他人をいびり倒すことだろう。

「あはは、そんな自虐的な趣味持っていませんよ。でもなにぶん、まだ中等科に入ったばかりの？餓鬼？ですから、困惑してしまう場面は、たくさんありますけどね」

さすがは年の功。僕の心中などお見通しというわけだ。悔るべからず。

しかし、読まれたからといって気にするものか。

だいたい、そんな趣味があるかってんだ。

これはもう、僕の意地だ。

一度、自分の口から「行く」「やる」と発言した以上、僕は、胃に穴が開こうと嵐が吹き荒れようと、訪問を続け、作業もやり遂げる。

どういつ経緯であれ、一度やると決めたことを途中で投げ出すな
ど、僕の活券こけんにかかわる。諸先輩と同じに、婆さんに好き勝手に
こき下ろされてなるものか。

「　　つ　」

力加減を間違え、壁に当てていた左手に皮スキの角が刺さる。

「どうした？　ドジをしたんじゃないのかい？」

椅子に腰を下ろしていた婆さんが、いつのまにか脚立の横まで来て僕を見上げていた。

心配しているというより、少し怒って見えた顔は、房間の中で一番光が薄い場所に立つせいか、顔色がとても悪く感じる。

「あ、ああ、いえ、ちょっと皮スキが滑^{ヘラ}って。でも大丈夫です。ほら、軍手をしていましたから、怪我はしていません」

軍手をはずし、手をヒラヒラと動かして、まったく平気だということを見せる。

婆さんは「うちには薬なぞないから、怪我なんてされたら迷惑だよ」と言い捨て、椅子に戻った。

茶杯を持ち上げ、飲む間もなく置いた音が、静寂の室内に響く。普段ならこんな音は立てないのに。

左手に視線を落とす。

厚手の軍手のお陰で、事実、流血まではしていなかったが、皮が少し剥け、薄く血が滲んでいる。

ジンジンと痛む薄傷を、改めて意識して見た。傷の割にはズキンズキンと、脈打つような痛みがしぶとく続く。ふっと、自分の心が、皮スキの角のように尖っていたことに気付く。

恥ずかしくなった。

12 「自己理解から始めてみる」

12 「自己理解から始めてみる」

十月二十六日土曜日 薄曇り

自分で言うのも何だけれど、僕は衣食住他、あらゆる面で恵まれ過ぎていて、右を向いても左を向いても、各業界で成功を収めた大人達に囲まれ、かつ、チャホヤと一族のアイドルの様に可愛がられ（両親と大井除く）育つたため、他人の心情を推し量ることがいま一步下手で、上から視線になつてることが多々ある。らしい。それを、大井から窺たしなめられたことが幾度かある。

自分はそのなつもりはなくても、無意識の優越感を持つて他人を見ていると、幾度か指摘された。

そういう「自分」がいることを知り、向き合えと、かなり厳しく諭さとされたこともある。

言われた時は、何となくしか理解していなかった大井の言葉が、ここ最近やたらと甦よみがえる。

「ひと息つきな」

ぶつきらぼうにかけられた声に、僕は脚立を降りて埃を払う。マスクを外すと、新鮮な空気を思い切り吸い込む。

訪問七回目。

お茶を淹いれ終えた婆さんは、先週と同じく窓際に置かせた椅子に腰かけ、院子にわの花を愛でている。花々は相変わらず絢爛けんらんだ。

花を眺めている時の婆さんは、何も言わない。瞬まきもせず、た

だ花だけを見ている。

初めて、院子先で目にした横顔と同じ。

こういった時、僕はここにおいてよいのかと、一瞬、戸惑いを感じる。何かの、邪魔をしているのではないかと。

先週土曜のプチ怪我騒ぎ以来、婆さんの言葉は多少丸くなった。

嫌味がなくなったわけではもちろんない。乱暴で手厳しい言葉は健在だ。しかし時々、僕を気遣う素振りを見せる。

その証拠に、今こうして、茶を僕に分まで淹れてくれている。

今日は緑茶。しかも茶菓子まで付いている。考えられないほどの待遇改善。少し、怖いかも。

シンプルなグラスに入れられた茶葉が、ゆっくりと底に沈み、ふんわりと広がり始める。低温で淹れられる緑茶は、控え目ではあるが、それでもふくいくたる香りを立ち上らせる。

?子の向かいに置かれたもう一脚に腰を下ろし、礼を述べてグラスに手を伸ばす。

「すごく甘い」

「味が気に喰わなきや飲まなくていいんだよ。茶も、嫌われた奴に飲まれるなぞ哀れだ」

素直な賞賛だったのに、どうしてこうも捻くれた返答がくるのか。さすがに多少は慣れたけど、婆さんの中には贅辞を素直に受け取ってはならない、という家訓でもあるのか、と毒づきたくなる。

「すごく美味しいって言っているんです。昨日も言いましたが、もう少し、僕の言葉を素直に聞いてくださいよ」

これくらいの反論は許されるだろう。

婆さんは僕の顔をちらと見ると、「はん」と短く鼻を鳴らし、院子の花に視線を戻した。

視線の先に咲くのは、天堂島で降ることはない雪のように白い牡丹。幾重にも重なる花卉の、ふわりと軟らかいことが遠目からでも感じられる。

小さなため息とともに菓子を手取る。

茶色い薄皮の中にとっぷり入った白餡は、うっすらと柑橘かんきつの風味で、その中に入った蓮の実の触感が心地よい。これまたすごく美味なのだけど、もう敢えて口には出さない。

黙々と菓子を味わいつつ、室内を見渡す。

今日の作業で、二面目の半分ほどは終わる予定。作業にも慣れできたことだし、このまま行けば、予定通り今月中に壁半分の下準備は終わる。

この房間やへには、今僕たちが腰かけている椅子と？子以外何も置かれていない。

院子の華やかさと反比例して、あまりにも殺風景に感じる。これで壁面すべてを真白に塗ったら、もっと寒々しく感じやしないだろうか……。

自宅の居間の壁も、限りなく白に近い象牙色で、無駄な調度品は置いていない。ゴテゴテと飾り立てるのは、僕を始め、両親も基本、好まない。（ただし、二人の？趣味の房間？については……：黙秘。）大井は言うまでもない。

壁色が例え同じだとしても、占める面積によって印象は変わるし、同じく装飾が少ないといっても、実際に置かれている物が違うのだから、自宅と印象が違うのは当然だ。

それでも何か足りる。そう感じる。昨日からそれが気になつて仕方がない。

具に見たところで気付けないような気がして、目を眇めてみる。

僕の家に限らず、どこの家庭でも割とあるもの。友人の家に行っても、ほぼ確実にある……。

「あ……わかった」

「何だい？ 何がわかったってんだい？」

婆さんはあからさまに怪訝な目で僕を見る。

僕は慌てて「昨日の数学で解けなかった問題がわかったんです」ということにして、茶を少し飲む。ああスッキリした。

照片だ。

絵でもいいけど、家族や友人との思い出を感じさせるものが、それが一切ないんだ。

天堂島の人々は、家族の照片を居間や寢室に飾るのが好きだ。

同居している息子夫婦、離れて暮らす孫や曾孫、既にこの世を離れた先祖の照片でも、とにかく、家族を何より大切に想う。外から天堂島に移り住んだ人々でもそれは同じで、リーズ夫人の居間にも見るからに仲の良さそうな家族や、孫の笑顔が零れる照片が数枚、綺麗な額やスタンドに入り飾られていた。

だけどここの房間にはない。根拠はないが、僕の立ち入っていない他の房間にも、それらは置かれてはいない気がする。

何故だろう？

照片ではなくても、何かしら思い出の品を身近に置くことは、極めて普通のことだろうに。殊に女性はそうだったことが好きではないだろうか。母は僕の幼少時の照片はもちろん、父と出会った頃の照片から子供の頃の思い出の品まで、大切に飾っている。（幸いなことに、居間は家族照片と、一族が揃った時の集合照片の二枚だけ。）

淡い疑問が生まれる。

例えば、婆さんが結婚をしていなくて、夫君や孩子がいなくても、

親や兄弟姉妹、友人の一人二人はいたはず。しかもそれなりに大きな房子だ。ここにずっと一人で住んでいたわけでもないだろうに。

婆さん　ムータン婦人のことを、もう少しちゃんと知りたいと思った。観察で得られる情報以上の婆さんを知りたい、と思った。（恐らくは）漆黒だった髪が、雪のように白くなるまでの歳月を、ムータン婦人はどんな風に生きてきたのだろう。その中で、どんな人達と出会い、どんな出来事があり、どんな感情を抱き、どんな風に乗りに越えて来たのだろう。

大井よりは若いかもしれないが、それに近い歳月を生きてきたのだから、様々な出会いや別れがあったに違いない。

家族は、どうしたんだろう？

一番初めに抱いてもよかった疑問に思い至った途端、好奇心が疼く。

院子に視線を戻した婆さんの横顔を見る。僕が見ていることに気が付いても、婆さんは黙って見ている。

照片の代わりに、院子があるようだと思った。何故か、それがとても寂しく思えた。

これも、僕が恵まれているが故の、上から目線の思いだろうか？ すっかり冷めた緑茶を一口飲むと、僕は婆さんと同じ方向へ視線を向ける。

「僕、兄弟はいないんです」

いきなり家族構成を尋ねるのは憚られる気がして、まず、自分の事を話すことにした。

婆さんは少し驚いた顔をしたようだったが、言葉を挿まなかった。

胸襟むねしんを開いて貰いたいならば、まず自分が先に開くことだと、いつか大井が言っていた。
残りの少なくなった淡い緑湯の中で、すっかり広がった茶葉がゆらゆらする。

父のこと、母のこと、大井のこと、幼馴染のこと、学院のこと。全部を開け広げに話すわけではないが、僕がいる毎日を、ほんの少し、婆さんに話してみたいと思った。

自分のことを語るのは、少しくすぐったい不思議な感覚。文章に書く以上に、語り出すことは難しいように感じる。

自分にとっては普通で、「当たり前」と思っていることを言葉に出して、しかも他人に聞かせようとすると、意外と自分のことを自分で知らないことに気付く。

巧く話す必要は、ないのだと思う。

というより、上手くまとめて話すことは出来ない。散文のように、ぼつりぼつりと、バラバラに言葉が浮かんで来る。それをボツボツと口に出す。

聞いている婆さんには、何のことか分からないかも知れない。僕自身、何を話そうとしていたのか分からなくなってきた、ふっと言葉を切る。

沈黙が続いた。それは、ほんの僅かの間だったかもしれない。

風が二回、頬に触れた。さらりと心地よい風。

言葉のない時間はさらに続いた。

けれど、初対面の時のように重苦しくは感じない。

茶湯の少なくなったグラスに、婆さんが湯を足してくれた。

「それで終いかい？ 十三年、生きてきたんだ。もう少しは、色々なことがあっただろう？ 結城彩」

婆さんが、始めて僕の名を口にした。

13 「ついででの幼馴染紹介」

13 「ついででの幼馴染紹介」

十一月十六日金曜日 晴れ時々曇り

金曜は午後二時で全課終了。

ほとんどの生徒が参加している奉仕活動のためだ。
活動に参加していない生徒にとっては棚ボタ的な早いしゅつじかん放学。

「すんげー。本気でその道に向いてると思うわ。オレ、弟子に
してもらおうかな？ あ、マネージャーでもいいか」

放課した教室で「ごく一部」の不参加者・公孫秀こうそんしゅうが、教卓上に猿
のように座り言った。

昼休みに買っていたメロンパンにかぶりつきながらしきりに話す
ので、教卓の下にはボロボロ食べこぼしのクズが落ちる。通りす
がりの女子が「ちゃんと掃除をしてから帰ってよね」と、尖った声
と視線を向けても、そんなちんぷん瑣末な事を秀が気にすることはない。
そも、それらの言葉も視線も何もかも、話に没頭中の秀の五感には
届かない。

「僕がどの？道？に向いているのか、簡潔に述べてくれるか、阿秀あしゅう
？」

「ホスト」

また別の女子が、先程と同じ言葉を秀（と一緒にいる僕）に投げ
つけて教室を出て行く。

秀が掃除をするはずないことは長年の経験から知っているので、僕は無言で教室の隅の用具入れから箒ほうじとちりとりを取ってくる。

「阿秀」こと公孫秀は、ひとつのことに意識が向いている間、周囲で何が起きようと一切無関心。関心事に対する「自分の納得」が得られるまで、他の事は完全シャットアウト。良く言えば、（関心事には）非常に高い集中力を持っている。

ただし、飲食のみは別枠。

極限に集中した状況でもこれだけは忘れないし、意識がなくても口元に食物を運べば確実に食べる。飲食は息をするのと同じ、生存に必須な自発活動なのだ。

兎にも角にも、「我が道のみを行く」秀のしでかすことの後始末をするのは、何故か共にいることの多い僕がする。はめになっている。

積み重ねたフォロの結果、世間一般がみなす僕達の関係は、ただの「親友」ではなく「大親友」だ。

その大親友は、三個目のメロンパンをもごつかせながら、（僕の）未来予想図を語り続ける。傍からクズが床に落ちる。ええい、早く食べ終われ。

「根拠は？」

秀の妄想暴走問題を早期解決させるには、話を終結させる方向へ導き、かつ新しい関心事を示し、行動するように仕向けること。

新たな行動を促すには、まず現在進行形の妄想を、秀自身に消化させなくては進まない。話を無理矢理終了させようとしても無駄、話に付き合う方が早い。

「難攻不落の毛虫婆さんを落とすからに決まってんじゃん。天涯の他のおばちゃん達で、お前を悪く言ってるって話聞いたことないから、これで天涯のおばちゃん達は制覇したんじゃないの。う

ちの曾祖母ちゃんも？小彩は本当に気の利く良い子で優しく可愛くて、あんな子がうちの子だったら……以下略？って褒めちぎりよ
うだもんな。彩少爺はやっぱり、この道に進むしかないって。
めげせ？ホストの明星？だよな。頑張ろうぜ、少爺」

「その？少爺？っていつのやめろよな。お前だつて、？海運王？
の異名を取る公孫家の？三少爺？だろうが」

秀の言葉をまともに取り合っていないのは、無駄に体力を消耗するだけだと知ってはいても、四回に一回は反応を返してしまう。無邪気無遠慮無頓着な言動について乗せられてしまうのだけど、僕がこんなぞんざいな言葉遣いを出来るのは、秀に対してだけかもしれない。生まれた時からのお隣さんで一番の幼馴染。まさに、気心知りあつた仲つてやつだ。

公孫秀の家は、僕の家
の隣。

隣といっても、どちらも敷地面積があまりに広大。両家の玄関から玄関まで、正攻法で行けば急ぎ足でも十五分強かかる。

正攻法じゃないのは何かつて？

極単純、敷地境の塀を乗り越え、互いの私室の窓から侵入すること。七分は短縮できる。塀はさほど高くないし、有刺鉄線等の侵入防止策も取られていないので、乗り越えること自体は意外に容易。

ただし、難関がある。

僕の守役である執事の大井は、このような不法侵入を認めない。たとえ相手がお隣の少爺だとしても容赦はない。

剣道八段、弓道七段、柔道黒帯、フルマラソンも難なく完走する大井の守りに隙はない。

捕まったら最後、重低音の一喝の後、道場（離れの一棟だ）で座禅をさせられる。

短い時は三十分、いまのところの最長時間は一時間四十五分。
何故詳細な時間を知っているかは、言うまでもないと思う。
ちなみに、一昨日の時間は五十分。

「そ。 オレは三番目で下にも四人弟妹がいるからいいの。 大哥いちばんめが家業はしつかり継いでるし、二哥は補佐をしつかりしてる。
大姐だいなえの姐夫タンナもキレモノで、四弟も将来ユーボーだからオレは何の期待も受けてないし、受ける気もないから没問題もんだいなし」

四弟はまだ就学前のはずだけど、確かに秀よりは落ち着きがあるかもしれない。 ひとえに、この兄を見て育っているからだろう。

「阿秀。 ムータン婦人の綽名あだな、なんで？毛虫婆さん？なんだ？」

「なんでって、最初に忍び込んだ時、バケツ一杯の毛虫を投げかけられたから。 すげえんだぜ、どこから忍び込もうとしても絶対見つかんの。 あ、芋虫だったこともあるわ。 芋虫より毛虫のほうが言いやすいから？毛虫婆さん？。 おまけにさ、性格もゲジゲジしてそうじゃん？ 追ひ払われたことしかねえけどさ、あのテの年寄り、わがままで依怙地でさ、周りのやつらが何言っても絶対耳を貸さないタイプだよな。 けど本当は寂しがりでさ、でも素直になれなくてつつぱってんの。 うん、それだ」

一人でしゃべって一人で納得する自己完結。

「悪びれる」という言葉は秀の辞書にない。 「懲りる」という言葉も、同じく載ってはいない。

いったい何回忍び込もうとしたのか。

「けどよ、婆さんの茶と菓子、オレも食ってみてえ。 大井の爺さ

んのめちや美味茶と絶品菓子で鍛え抜かれたお前が美味いつてんだから、相当美味いんだよなあ。　くー、いいなー、食いてえく。
なあ、今日も行くんだろ？　オレも付いてっていいだろ？　忍び込むスリルより、甘い菓子の方がいい。　そうだよ、そうすりや念願の内側も見られるじゃん。　？　神秘の藪に覆われた、幽霊屋敷の真実や如何に？　ってタイトルでどう？　次の学年新聞のスクープ欄。　なんか掴めたら新聞部のやつらに売れるかもだぜ？　照片付きなら三日分くらいの昼飯おごらせられるかも。　来週の学食メニュー、食いたいのが多いんだよな」

確かに、とてもこれが大家の少爺とは思えない。

「……あのさ、なんで、そんな何回も忍び込もうとしたわけ？　そんなに入りたいんなら、正面きつて尋ねればいいじゃないか」

「それじゃ面白くないじゃん。　スリルとサスペンスを堪能するためには、身を挺しなきゃいけないんだぞ。　荒れ放題の家に謎の派手ハデ婆さん。　しかもさ、家の中から時々？　身の毛もよだつ？　奇声が聞こえたり、逆に？　天上の調？　みたいなすんげー綺麗な音が聞こえてくるって噂もあるんだよな。　けどオレとしたことが、婆さんの鉄壁の守りに阻まれてまだ真相を掴めないでいるんだよなあ。

あの婆さん、大井の爺さんに負けないかもだぜ。　それにあそこ、門の外から見ると敷地広そうだし、あのぼうぼうの草むらの奥に、意外と、思いもしない光景が広がってたりする可能性あるかもじゃん？　ほら、古臭い話の中で、モンのすごい藪を抜けたら、夢のような世界が広がっていたってやつ。　サルやカップパを子分にした坊さんが空飛んでたりしてさ。　なんてつたつけ？　えつと、確か？　逃幻狂？？」

「……それをいうなら？　桃源郷？。」

ついでに、サルとカップパは関

係ない」

言っていることはともかく、秀は時々勘が鋭い。野性的な勘、てやつ。

桃源郷はオーバーにしても、確かにあの院子にわは、一種異世界とも思える眺め。通い始めて一カ月近く経つというのに、花は一輪として萎しおれる様子はなく、初見の時と同じ姿で目を愉たのませてくれる。綺麗なことは良いことだけど、造花でない限り、ここまで長持ちするなんてあり得ない。

婆さんは、僕が院子に入ることを何故か許さないのです、間近で花を見たことはないのだけれど、遠目であれ、姿形も芳香も、どれをとつても造花には思えない。

とすると、さすがに少々ミステリー。

そんな院子をミステリー狂の秀が知ったら、五倍は誇張して吹聴すること間違いなし。ムータン婦人ではないが、門から中の様子は秀に知られないに限る。

「あれ？ じゃあイノシシとパンダだっけ。それともウシとクマ？ ま、いいや。なあ、オレも行っていいだろ？」

「お断り、だ。お前が来ると、作業がよけい進まなくなる。ようやく普通に訪問できるようになったところでお前なんか連れていってみろ、僕まで毛虫を浴びせられるだけだ。それに今日は臨時で休み。海角に買い物に行くんだ」

秀の散らしたクズを掃き終えると、帰り支度を整える。

「海角？ なんでそんなところ？ 買い物なら天涯で済むじゃん。あ、わかった。本当は毛虫婆さんの所に行くのが嫌になったんで、海角に逃亡するつもりなんだろ？」

「作業で使うものを買に行くんだよ」

秀はますますわからない、といった表情で僕の顔を覗き込む。口の端にメロンパンのクズが付いたままだ。

「作業つて、壁の塗り替えだろ？ そんなのに使うもん、天涯のバカでっかいホームセンターにたんまりあるじゃん」

「天涯のどの店にも、目的に適う物がなかったから海角まで行くんだよ。海角の方が店数多いだろ。だから、ほら行くぞ。ケーブル列車の時間は三時五分だから、急ぐぞ」

「つて、オレも行くの？ なんで？ 何買いに??」

首を大きくひねり考え込む秀に、僕はポケットに入れていた海角地区の地図を渡す。

「なにこれ？ 赤バツいつぱい。百貨店に雑貨屋？ この店でも買収したいわけ？」

「そんなわけないだろ、昨日までに僕が回った店。天涯で見る品しか扱ってなかった。お前さ、？探検？でよく海角に行ってただろ？ ミステリースポット探し兼買い食い目的で海角中回ってるんだろ？ 買いたいののは？汚れ落とし？と？白ペンキ？。地図や電話帳に載っていない、卸問屋でも小売店でも、そういった品物を置いていそうな店に行きたいんだ。付き合ってくれたら湯麵一杯」

教卓の上であぐらをかいたまま腕組みをした秀は「うーん」と唸った後、「プラス、肉包子と粽子と串焼きと芒果布甸と？枝果汁追

加で手を打ってやるよ」と、にいと笑って教卓から飛び降りた。
なんともけつたいな組み合わせだが、地理に明るい秀がいれば、僕
一人で探し回るより効率がいい。

あの謎の？染み？を早くなんとかしないと、婆さんのヒステリー
が酷くなる。

14 「海角の文房具屋」

14 「海角の文房具屋」

ひき続き十一月十六日金曜日 晴れた

僕の身の上語りを初めてから、ムータン婦人との距離は、更に数ミリは縮まった。

訪問の度、少しずつ語る僕の話、婆さんは表情を変えず、けれど確実に愉しんで聞いている。時々、嫌味混じりの合いの手が入るのだけど、その言葉が、僕の話をちゃんと聞いている証拠。

(おおむね) 良好な雰囲気のおかげで、剥離・除去作業は順調に進み、十月最後の訪問日には、最後の一面の四分の一を残すだけとなっていた。

ただこの壁が一番の曲者で、何度も重ね塗ったペンキや壁紙のために、半立体化している部分が数か所。

僕はためらうことなく、半立体を平面に戻し、こびり付いた汚れを拭い取っていった。

これが終わればいよいよ下地塗り、そして、婆さん希望の「真白」を塗ることが出来る。

手にも自然力が込めるといふもの。
拭う度に、最初の壁色である赤よみがえが甦る。派手ではない、落ち着いた深みが品格を感じさせる茜色。なのに、婆さんはこの色が好きではないという。嫌いならば仕方がないけれど、少し惜しい気もする。僕はむしろ、真白よりこの色の方が婆さんには似合っていると思っから。

だけど、当の本人が嫌いと言うなら仕方がない。僕は要望に副うまでだ。

拭っていく中で、小さな灰色の染みを見つけた。

どうせならその汚れもさっぱり落としたらいいと思ひ、汚れ落としを含ませた布で拭いた。

けれど全く落ちる様子が見えないので、少し力を込めて拭いた。そして、異変が起こった。

灰色だった染みは濃さを増し、赤の中に黒々と浮かび上がった。布の汚れが壁に移ったのかとも思ひ、新しい面で拭きなおした。

しかし、最初は大豆程の大きさだった染みは、更に黒く大きくなる。何度新しい布に替えても結果は同じ。それどころか、拭えば拭うほど染みは鮮明に、しかも大きくなっていく。

まるで、零した水が地面に広がると同じ、壁の四方へまき散らされるように成長し、一定の大きさになると拡張を止めた。

理解できない現象に絶句していた僕の背後で、椅子の倒れる音が響いた。

振り返ると、口元を覆った婆さんが真っ蒼な顔で目を見開いていた。

「このガキっ、どこに目えつけてやがんだ。　　氣イ付けて歩きやがれっ」

肉厚の身体にぶつかつた衝撃と浴びせられた怒声ではっと我に返る。

途端に喧騒。　　人いきれ。　　通りすがりの人々が、ほんの一瞬僕に視線を置いて流れ去っていく。

「あ、す、すみません」

ふう、と息を吐く。　ぶつかったのが怒鳴るだけの普通のおじさんでよかった。

ここは海角。　天涯の広々とした歩行者の少ない路とは違みちう。　考え事をして歩いていてはいけない。　罵声を浴びせられるだけでは済まない場合もあるらしいのだから。

「おーい、彩さい、なにぼやっとしてんだよ、こっちだつて」

溢れる人ゴミもなんのその、慣れた足取りでずんずん先を行く秀しゅうが、路の真ん中で立ち止まり手をぶんぶん振っている。　秀の声はかなりでかいしよく通るのだけど、周囲の人々の話声も負けていない。

「ボケっとしてると財布抜かれるぞ。　そんなことになったら、オレの目的が果たせなくなるだろ、気を付けろよ」

いつの間に、秀の目的遂行が第一になつたんだ？

「なあ阿彩さい、どうしたんだよ。　そんなボーっとしてるのつてお前らしくないぞ。　なんかオナヤミゴトがあるのか？　美味しく物を食べるためには、不要物は腹にため込まないにかぎるんだぞお」

横に並んだ僕に、秀は眉をしかめて説教ぶつてみたのち、肩に手を置いてにかつと笑う。　秀なりに心配をしてきているらしい。

「まあ、あると言えばあるんだけど……」

秀に話したらこじれるだけだと思つ。

「よし、じゃあその不要物のハナシをじっくり聞かため、あの店に入ろう。あそこのモツ煮込み、すげー美味いんだ。そろそろ冬限定メニューも出てると思っただよな」

「さつき、休憩とか言っ**て**芒果布甸とタピオカ入り牛**布甸**を二杯ずつ食べなかつたか？ 海角に着いた直後にはワンタン麵二杯肉包子四個串焼き六本を、？燃料？とか言っ**て**食べたよな。お前の目的の半分は達して、僕の目的はまだ果たせていないぞ」

「十軒は回ったじゃん、目的の品がなかっただけでさ。とにかくさ、固いこと言わずホレホレ、行こう**つて**。これ食ったら次の店案内するよ。とっ**て**おきの店だぞお。それにさ、彩はめつたにこんな外れ来ないだろ？ これも社会勉強だ**つて**。なんでも経験しときゃ役立つ**つて**、ほら入った入った」

確かに、秀のおかげで思いもしない場所にある小規模店を、最短距離で巡**つて**はいる。

それは認めるし感謝しているが、飲み食いしている時間の方が長くないだろうか。

おまけに、回ったどの店にも大差ない品物しか置いてなかった。製品名が違**つて**成分は一緒。それでは買**い**求める意味がない。資金に余裕があ**つた**としても、無駄な買**い**物をいまはしたくない。秀の手を借りるに**して**も、重量級の荷物を天涯まで持**つて**帰るの大変だ。買**う**物は必要最低限に**したい**。だからこそ、これまでに試用**して**いない製品を見**つ**けた**い**のだけ**ど**、なかなか**どう**して簡単ではないらしい。

微抵抗する僕の背をグイグイ押す秀の勢いに負け、ついに観念して店に**一**歩足を入**れる**。

も**う**好きに**して**くれ。

「サン・シャオイエ
三少爺」

右方から青年の声。

二人揃って顔を向けると、公孫家の使用人である李光が立っていた。

「光哥？　なんでここにいんの？」

「彩様。　三少爺がいつもご迷惑をおかけしています」

丁寧に頭を下げる李光は今年二十七歳。　知らなければ大学生くらいにしか見えない。

大井と同じく非常に真面目で、誰に対しても敬語を崩さない。

公孫家内における、秀の良き理解者でありお目付けでもある。　代々公孫家に住み込みで仕えているらしく、秀のおむつ替えもしていたらしい。

秀は彼の事を？　光哥？と呼ぶ。　使用人であれ年上なものには違くないし、実兄達より秀にとっては親しみやすい存在なのだ。

僕も彼の事は好きなので、秀につられて光哥と呼んでいる。

「光哥、どうしたの？　秀に用事があるんだよね？　僕に遠慮は要らないよ」

李光はいま一度軽く頭を下げると、秀の顔に視線を移した。

「翠環様が探しておられます」

「四妹が？　なに、また熱でも出した？」

翠環は秀の三歳下の妹で、この兄をとても慕っている。　病弱で、

ほとんど屋敷から出られないので、自由に外を飛び回る秀が語る、面白おかしい話をのが聴く好きなのだ。秀も、十人いる兄弟姉妹の中で、翠環だけは特別に可愛がっている。

「左様でございます。　急ぎお戻りを」

「　わかった。　と、いうわけだ彩。　悪い」

頭を掻きながら秀は僕に頭を下げ、僕が渡していた地図に赤丸と住所を書き込む。

ついでに、モツ煮込みの持ち帰り用注文も忘れない。　しかも三人前。

「　百彩堂ひゃくさいどう　？　天橋路九段つて、ここは白雲路だから、中環駅近くだよな？」

「中環駅には近くなるけどかなり奥まってるんだ。　試しにその文房具屋に行ってみ」

「文房具屋？　百彩堂　つて、聞いたことはあるような……」

「ああ、文房四宝ぶんぱうしほの老舗で知る人ぞ知るって店だったらしいからな。いまはただの文具しか扱ってない廃業寸前の店なんだけど、すんげー面白いんだ。　毛虫婆さんちなみに攻め落とすの難しいところなんだけどさ、上手く入り込めたら、意外と掘り出し物があるかもだぞ。　なんてたって別名　けしもの屋　だからな」

婆さんの家と同じく攻め難い？　秀好みのミステリースポットと文房四宝の老舗　どうにも釣り合わない。

まあ、古い建物に幽霊話の一つや二つあっても特別不思議ではな

いけれど、秀の「すんげー面白い」場所は、かなり胡散臭い場所、
ということになる。ムータン婦人の家も良い例だ。そも、店な
のに「入り込めたら」って、どういう意味だ？ けしもの屋っ
て別名も微妙なんだけど……。

「 わかった、行ってみる。 助かったよ。 翠環によろしく」

「 今度遊びに来てやってくれよ。 四妹、お前のご哥哥アニキと
思っ
てんだからさ」

持ち帰りの品を片手に、秀は李光と人ごみの中に消えて行っ
た。見送る僕にモツ代の請求が来る。 翠環への土産なら、甘い物
の方が良かったんではないだろうか。
時間は五時。

夏と違い陽が沈むのが早い。 ぼやぼやしていたら暗くなる。
天橋路に行くのなら路面電車で五駅戻らなくてはいけない。

文房具屋なら閉店時間も早いかもしれない。

慌てて乗り場に行き、丁度到着した中環前駅行きへ飛び乗る。

駅前大路はさっきまでいた白雲路より人で溢れていた。 大路の
両脇に並ぶ店数も半端ではない。 既にネオンで煌びやかだ。

行き交う人々の話声のこれまた大きいこと。 怒鳴りあっている
みたいだけど、声の主の顔はだいたいどれも笑っているので、喧嘩
ではないのだろう。

考えてみれば金曜夜の始まり。

一般的に、人々が一番浮かれる時間なのかもしれない。 これか
ら気に入りの店にでも繰り出して、大いに飲み楽しもうってところ
だろう。 あの男女の一団はさしずめ合コンか？ 笑って話しつつ
も、表情がいま一步固い。 まだ互いに探り合いしてるって感じ。

「なんて、人間観察してる場合じゃないか。えっと、天橋路は……こつち」

地図と道路標識などの案内板を頼りに天橋路九段を目指す。
進めど進めど、人人人。

あまりの熱気に人酔いしそうだったけれど、脇道に入りいくつ目の角を曲がったあたりから、急激に人数が少なくなった。

更に進むと、通行人はいないに等しくなる。路の両側に並ぶ店舗も、早々とシャッターを下ろしている。駅前のお店はあんなに客で溢れていたのに極差が激しい。

この周囲は十四・五階建の古いビルに囲まれているため、大きく西に傾いた陽の光は届かない。

街灯はあるけれど、電球が切れかけているのか薄暗い明りしか提供していない。

「道、間違ってない よな……」

道を探ねたくても、誰もいないのでは尋ねようがない。きよるきよる周囲を見回していたら、錆かけた街灯の柱に、白ペンキでこの住所と思しき地名が書かれていた。

天橋路八段。間違っっていないようだ。

地図と照らし合わせ、さらに小路を進むと、少し大きな路に出た。

「海」

海角に来て、初めて海を目にした。

しかも、半分沈んだ太陽が水平線上に金と朱の線を引いているなんて美しい眺め。

左右をビル影が黒く塗りつぶし、夕空と太陽、そして海とのコントラストを際立たせる。これは天涯にはない眺望。

「なんて、見惚れてる場合じゃないって」

時間は五時四十五分、秀が印を付けてくれた地図によれば、斜め前の路地を抜けたあたりには件の店はある。

この店に求める品がなければ次を探さなくてはいけない。時間は貴重だ。

海の見える路を横切り、最後の小路に入る。

街灯もない暗く狭い路地。初めての場所での暗さ、足が少し遅くなる。これで道を間違っていたら悲惨。

不安が首をもたげ始めた頃、突然小路が途切れ、ぽかりと開けた空間に出る。

長方形の空間の左右は瓦屋根の葺かれた古めかしい石壁があり、所々に大きな植木鉢の樹木が置かれている。どれも見事な枝ぶり。

その傍には、陶磁製の円卓と榻。これら後から置かれたもの以外、すべてが灰色だけれど、ちょっとした趣のある院子のよう。周囲のビルより低い壁の向こうから夕陽がこの限られた世界を明るく照らす。

「なんだ、まともそう」

何故か、ほっと胸をなでおろす。

視界のど真ん中に、古めかしい構えの建物。

これまでの通りでは見かけなかった、木と石が見事に調和した家屋。重厚で「老舗」というに相応しい店構え。

間口は六間程か、奥行きは分からない。

紅灯籠が入り口の左右にぶら下がり、ゆらゆらと摩訶不思議な光を放つ。秀じゃないけれど、志怪や伝奇小説を思い起こさせる雰囲気。中から出てくる老板娘（何故か女性のイメージ）が、実は

既にこの世の人ではなく、店を訪れた客に絶ち難い思いをよよと涙ながらに語る……なんて話の舞台にしてよさそう。

傾いて、書かれた文字も判然としない看板が、更に想像をたくましくさせる。 いったい、創業何年なんだろう。

「 秀に感化されたかも」

自分の想像に呆れつつ、重そうな木製ドアの前に立つ。 何故かまた少し緊張。

開店時間も閉店時間も何も書かれていない。

けれど硝子の張られた窓からのぞき見える店内には、黄色い明りが灯されている。

少なくとも店員はいるのだろう。 それならば躊躇ためらうより行動だ。 見た目通り重い木製のドアを引くと、カラランと古びたドアベルの音が響く。 どこことなく懐かしい感じ。

などと悠長なことを思えたのは束の間。

ふいに視界が霞む。

外から見えた灯火の黄光が滲んで見える。 まるで霧が霞みの中にいるみたい。

なんで？

15 「気分は連日厄日」(前書き)

文末に、まったく意味のない落描きを置いています。

イラストなど見たくない方は、挿絵の非表示を推奨いたします。

内容には全く無関係です。しかも態度が悪い…です。

15 「気分は連日厄日」

15 「気分は連日厄日」

十一月十七日土曜日 曇りのち晴れ

ムータン婦人宅へは、十時に着けばよいのだけど、少し早めに家を出た。

時間ぎりぎり慌てるより、少々余裕を持って行動するに越したことはないから。

まあ、一時間以上の余裕は、「少々」とは言わないけれど……。

十一月も半ばになると、真っ昼間の陽光の下でない限り、暑さは大して感じなくなる。

空気が軽く爽やかになるこの時期は、散歩するにはもってこいだ。天涯の空気はもともと澄んでいるけれど、秋に入り更に透明さを増した。空の青も、日差しが和らいだせいか心なし優しい。

もつとも今の僕は、澄み渡った青空や清々しい涼風を、「わあ、気持ちが良いねえ」などと、悠長に楽しめる気分ではない。

その一因は、昨晚、悶々と考えている内に刻々と時間だけが過ぎ、結局、一睡もせぬまま朝を迎えてしまったから。

不眠であろうと、朝の定例コース（座禅 行水 朝餉^{あさけ}）は変わらぬ時間に終えた。

若干、食が進みにくかったものの、いつも通りに全てをこなし、養分摂取も十分だ。

普段なら、この一連の過程で完全に目が覚めるのだけど、今日はどうにも頭がすっきりしない。

むしろ、時間が経つ程に身体は重く、気力ゼロになっていく。

「これではまずい！」と、かろうじて活動を続けている脳の一部が警鐘を鳴らす。

ムータン婦人の家に着くまでには、頭をしゃっきりさせておかなければ「嫌味の嵐」だ、という思いもあったし、室内でじっとしていると、昨日の悪夢、を思い出すだけなので、目覚まし+気分転換……といった目的で早めに家を出たのだ。

そう。じっとしては思い起こす隙を与えてしまう。考える隙を与えぬよう、極力身体を動かしておこうと思っただけ、鉛のように重い身体が、気を紛わせるだけのアクティブな行動を取りきれないでいる。

「……………」

背中にぞぞつと寒気が走る。

思い出しかけたものを、脳内から追い払うべく頭を振る。

と、眩暈めまいがした。

たかが頭を振ったくらいで眩暈を起こすなんて、やっぱり、疲れているんだ。(もちろん、睡眠を取っていないことも大きいけれど、)

この「疲れ」は昨日の影響が、全身隅々余すことなく残っているのを、引きずりたくなる足や異様に重い腕から改めて、ひしひしと感じる。

頭の中も凝固した溶岩が詰まっているみたい。重いし、まったく動く気配なし。

それでも、眩暈覚悟でもう一度頭を振る。

「……………」と、とにかく……………く、昨日の事は忘れて、そう、忘れて、今日

の作業に集中しなきゃ。 今日こそあの染みを消す、本日の目標本の課題……」

自己暗示にもならない言葉をぶつぶつ繰り返しながら、やたら遅い歩みで婆さんの家を目指す。

普段なら二十分弱で着くけれど、この歩調では三十分はかかる。出発時間を一時間以上の早めたのは、あながち間違いではなかったかも。

九時三十五分、ム↑タン夫人宅 目的地の門前に到着。

「余裕を持って」が、僕の基本姿勢とはいえ、いくらなんでも早過ぎた。

「遅れても文句の嵐だけど、早過ぎても嫌味の乱打だよな、きつと……」

ため息交じりに、既に見慣れた家屋をじっくりと見遣る。変わらぬ、荒れ果てた外観。

屋根に生えているのは、背の高い草とばかり思っていたけど、一か月の観察結果、どうも樹木の若木だと判明。成長したら婆さんの家は根っこの下だ。

内装が終わったなら、外側も直さなくてはいけないと思う。自然のままに風化するのも、おもむき 趣があつて、それはそれで良いかもだけど、婆さんが住んでいる間は無事に立っていてもらわないと困る。

この家が倒壊したら、これまでの僕の努力は、全て無駄になってしまうわけだから。

「まずは、現在の内装作業を終わらせることだよな。 うん」

嫌味の五つ六つ言われたところで今更、だ。

覚悟を決めて、二十分早く玄関を叩く。

インターホンくらい付けて欲しいのだけど、居留守を使われたらどの道意味なしなので、敢えて婆さんに要望はしない。

「ムータンさん、彩さいです。 予定より早いですけれど、いいですか？」

大声で三・四回呼ばわったが、無反応。

更に数回、手と口を動かしたけれど、結果は同じ。 いつもの居留守攻撃かと思ったけど、何か、違和感を覚える。

念のためドアノブに手をかけてみたけれど、当然のようにカギはかけられたまま。

「ムータンさん、ムータンさん？」

確認するように呼び掛けても、応えはない。

妙に、静かすぎる気がする。

周囲には人家がないのだから、静かなのはいつものことだけれど、あまりに何も聞こえない。

さやと葉を揺らす、僅かな風の音すらしない。

嫌な予感がする、というのはこういう感覚なのだろうか？

次の行動を具体的に考えるより、より速く身体が動く。

初訪問日以来初めて院子にわへの小道を通り、白い木戸の前に立った。

「ムータンさん！」

悪い予感というものは当り易いらしい。

深い赤の衣をまとったムータン婦人が、院子にわの真ん中に倒れていた。

院子を包み込む緑の中で、その赤が妙に生々しく映える。

「ムータンさん、ムータンさんっ」

「院子には入るな」という婆さんの言葉は欠片も頭になかった。覚えていたとしても、人命救助のためならば、禁止事項だって破らざるを得ない。

古い木戸を押し開くと、初めて足を踏み入れた院子を駆け抜け、婆さんの傍らに膝をついた。

「大丈夫ですかっ、ムータンさん、ムータンさんっ」

肩に手をかけ、軽く身体を揺すってみたけれど、まったく反応がない。

転倒した時に頭を打ってはいけけないので、下手に動かすのは危険。身体を揺するのはやめた。

救急車も呼ばなくてはだけど、この家、電話なんてあつたっけ？

「ムータンさんっ、大丈夫ですか、聞こえますか？ 僕の声、聞こえませんか？ ムータンさんっ」

婆さんの耳元に顔を寄せ、大きな声で呼びかける。繰り返し、繰り返し。

頭の芯が、急速に凍えていくのが分かった。

嫌な予感、恐怖に変わろうとしている。冷たくなっていく手で、投げ出されていた婆さんの手を握る。僕の手以上に冷たい。体温を感じない。

「聞こえないの……婆さん。ねえ、婆さんっ、聞こえたら指先だけでもいいから動かしてっ。なあ、ばあさんっ、聞こえてる

「んだろっ???」

手にも声にも力が入ったのが良かったのか、握った手に、弱いながらも反応が返ってきた。

「 出て、お、いき……」

薄く眼を開いた婆さんの言葉に、肩の力が抜けた。

多少朦朧^{もつろう}とはしていても、意識はあるようだし、毒が弱いながらも、憎まれ口も利ける。

ようやくほうつと、息が吐ける。

相手が落ち着けば、こちらの調子も戻るといふもの。 病人相手ではあるが、ガツンとひとこと言いたくなった。

「まったく、こんな状態で何を言ってるんですか。 だいたいですね ……」

屈めていた背を伸ばした途端のこと。

ぐにやり、と視界が歪んだ。

続いて激しい眩暈。

まるで最悪の車酔いをした時のよう。 真っ直ぐ立ってなどいられない。

「言った……だろうが、お前は、院子^{にわ}には入るなと。 お前にこの院子は ……」

先よりしつかりした婆さんの声^{スカー}が上から降ってくる。

布をたっぷり使った婆さんの裙子^{スカート}が、しゃらりと、動く度に波音を立てる。

婆さんは体調が戻ったのか起き上がり、既に立っているらしい。代わりに、今度は僕が緑の絨毯の上に倒れてしまっている。婆さんがいつもより早い口調で何かを言っているが聞き取れない。いや、聴く気力もない。あっという間にブラックアウト。まさに、闇の底へ落ちるよう。かなり気持ちが悪い。

まったく、

昨日から一体、なんなんだ？

> i 1 1 1 4 6 | 2 4 0 <

16 「現実裏の非現実」

16 「現実裏の非現実」

十一月十七日土曜日（のはず）

絶句。^{ぜっく}

起・承・転・結、の四句からなる漢詩の形式ではない。言葉が
つまって「絶句」するのは、どんな場合か？

脳味噌が、目にした対象をしかと認識する前に、身体が動きを止
めてしまうのは、どのような状況下？

どちらにしても、正と負のパターンがあると思う。

そして。

幸か不幸か、昨日僕は、両パターンを身を以って体験出来た。

*

百彩堂 の重厚な扉を開けると、同時にドアベルの時代を感じ
させる乾いた音が響く。

ここまでは普通。この後が問題。

ドアベルの響きに合わせ、霧か霞みか靄^{もや}か、が室内にたちこめ視
界を不鮮明にした。お化け屋敷でもあるまいに、不可解な現象。

しかも、これが普通の靄ならば、まだよかった。ところがこれ
は、吸い込むと激しい咳くしゃみ鼻水を誘発するシロモノだった。

激しく咳き込むこと数回、ハンカチで口を押さえ、ようやく呼吸を整え顔を上げた時、靄はいくらか薄くなり、床に沈んで 正確にいえば、再び積っていった。

「……………まさか、とは思っけど……………」

確認したくない疑念を、それでも晴らすため、床に降り積もる白いもやもやから正面、四方の壁、そして天井へと、順に視線を送った。

予測を超える光景。 惨状、といつてもよい気がしてくる。

クモの巣の展示場か、と思いたくなる天井は、オブジェの昆虫（新鮮なものから干物になったものまで）が、さながらクリスマスツリーの飾りのようにぶら下がり、左右と正面にある陳列棚や？台（らしき）台の上には、雑然と物（おそらく商品）が置かれ、その上に、床と同じかそれ以上に厚みある埃がうず高く降り積もっている。埃と共に、鼠がかじったと思しき紙屑の残骸、そしてこれが一番喜ばしくない、天堂島名物とも言われる巨大ゴキブリの死骸、とその排泄物。 実際に目にしたのは初めてだけど、あのツヤつと光沢のある黒茶色で楕円形の昆虫は、まず間違いなく、それ、だろう。

話に聞いて予想していた以上に、大きい。

公孫秀こうそんしゅうの自室を代表に、足の踏み場もない、雑然とした「巣」の如き室内も幾例か見て来たので、多少の散らかりなら、大して気にはしない。 最近では新たに、ムータン婦人宅の衝撃もあって、荒れた室内に対して耐性は増したと思っていた。しかし、それらはまだ甘かった。

「 比較の問題じゃ、ないような……………」

「ここは現在進行形で営業中の「店」、であるはず。なのに、このありさまは何事？」

埃の膜を被った硝子シェード越しの黄色い灯に照らされ、全てが朧おぼろに、物悲しく見える。

目的の品が、この埃の下に埋蔵されている可能性は……なさそうだけれど、聞くだけは聞いてみなくてはと思い、店員の姿を探すが、見当らない。

時間的にみて、奥に入って夕飯でも食べているのかもしれない。

「すみません、お尋ねしたいことがあるのですが、どなたかいらっしやいませんか？」

口元をハンカチで覆ったまま、店の奥に伸びる暗い廊下に、それなりに大きな声で呼びかける。しかし、店員の姿は現れず、応えの言葉すらも聞こえてはこない。二回同じ呼びかけをしても、以下同文。

どこその宮殿ほどに広大でなければ、声は届くだろうに。

そも、ドアベルが鳴った時点で、来客があつたことは伝わっているはず。

ふつふつと、怒りが込み上げてきた。

こんな廃屋も同然の有様で、店などと称してよいのか？

しかも、「現在不在」等の張り出しでもしているならまだしも、来店して、対応を求めている客を無視するなんて、店員の接客教育はどうなってるんだ。

「誰も、いないんですか？」

ちよつと不機嫌な声で、もう一度だけ、人の有無を確かめるように呼び掛ける。

タンッ。

乾いた硬質の音が、静寂の店内に短く響く。

気のせいではなければ、僕の目の前を、なにやら輝く物体が、過ったような。

「……うるせえ……」

突然の声にぎくりとする。悪いことをしていたわけでもないのに、反射的に身体がすくむ。

「いい気分で寝たつてのに、ぎゃーすか騒ぎやがって。用件をさっさと言いな」

まだ若い、といっても僕よりは年のいった青年の声。その出所は、埃に埋もれた左方^{カウンタ}？台の奥のよう。声の主を求め視線を向けると、？台の上で組まれた足が目に入る。白い靴^{スボン}白い？子で、ほとんど保護色。（けど、さっきまではなかったような……。）肝心の足から上は見えない。それ以前に、商品の上に足を組むのは、問題ではないだろうか？

「あの、この店の方、ですか？」

タタン、と、先と同じ音が上がる。

音源は僕の右方。そして、明らかに音の数と同じ数の光が、僕の顔の前を疾^{はし}つていった。

冷や汗が流れる。音をたてた物を確かめるべく、顔だけ右に向けてみる。

「……！！」

離れていて見え難いが、三本の小刀らしき物が、陳列棚の木枠に

突き立っていた。ひよつとしなくてもあれを、この店員（らしき）人は、僕に、向かって投げたのか？ あり得ない、普通なら。

「オレは、用件をサッサと言え、っていったよなあ？」

殺気を覚え視線を左方に戻す。

この店に入って三回目（？）の絶句。

真っ白。

古風な、じだいげき 古装劇スタイルの衣装から長めの髪、そして、薄暗くはつきりはしないけれど、おそらくは瞳の色も、白。色素が薄いとこういう問題ではなく、白い。

真っ白な青年の手には小刀。その白刃が、薄明りを受け鈍く光っている。多分、棚に突き立っているのと同じ形状。凶器を持つ手が緩やかに動く。

「ま、ま、待って、僕はただ」

動揺している僕を見据えている白の瞳が、小刀の刃と同じような銀の光沢を帯びた。

「てめえ、どこから来た？」

元々不機嫌そうだった白い店員の表情が険しくなる。苦情の一つは言おうと思っていたけれど、まだ口にはしていないのに。

「何処から来たと、聞いてるんだ！」

言葉と共に、白店員は？カウンター 台をひらりと飛び越え、僕の目の前に微量の埃と共に降り立つ。僕より頭一つは大きいのに、なんとも軽くてしなやかな動き。

なんて、感心してしまっている僕の胸座を、白店員は掴みあげた。目の前には白銀の小刀が光る。

「ど、？何処から？って、僕はただ買い物に来ただけで　　は、離して下さいよっ」

切れ長の据わった白の瞳と刃の鋭利さが、二重に僕を切り裂く。

（いや、実際には少しも切られてはないのだけど。）　　だけど、冗談は抜きに、身の危険を感じている。

命の危険を、何故文具屋に来て感じなくちゃいけないんだ？　やはり秀うしろのやつの「すんげー面白い」場所は、ロクなところではない。

「臭うんだよ、てめえ」

白店員は締め上げるように、どンドン僕を持ちあげるものだから、足が床にしっかり着かなくなっていく。

「ふ、風呂には毎日入ってますっ。今朝だつて座禅の後に行水つて、話すにしても、とにかく離して下さいよ、この状態は、ちよつと苦しい　……」

本当に、呼吸がし難く乱れてきた。　　両手は自由なのだけど、相手の力が強いし、こういう直接的暴力に曝されることに慣れていないから、対応の仕方が分からない。　　大井に、ちゃんと護身術を習っておけばよかった。

しゃらん　。

鈴の音が降るように響いた。

いや、響いたように感じられた。

霞む視界の端に、鮮やかな紅が翻る。　　続いて、白い小さな手が

視界に入り、白店員の手に触れた。

「なんだ紅鳥べにとり。こいつを離せっていうのか？」

白店員の声が少し丸くなった。それと同時に僕の足がしっかりと床に着く。

まだ胸座は掴まれたままだけど、呼吸は一気に楽になる。

再びしゃらんと、清音が周囲に響く。

命の危険の緊迫性が減った気がして、横目で新たに出現した「紅鳥べにとり」なる人物の姿を確認。

心臓が止まった気がした。

一拍後には、反動のように激しい動悸。横目どころか、思わず顔ごとその女の子へ向けてしまった。

「可愛い」なんてありふれた言葉なら、十乗しても足りない女の子が、白店員の手に両手を重ね、大きな杏仁型の瞳で見上げていた。ふるふると首を横に小さく振り、白店員の手を僕から外させた。

白店員は「ちっ」と舌打ちをして腕組みをし、僕はその隙に数歩後ろに下がると、服の乱れを簡単に直した。視線は紅鳥べにとりという姑娘お嬢にむけたまま。

僕と同じ年くらいだろうか？ 凶暴な白店員と同じく、古い絵に描かれる女性が着ていそうな、布をたつぷりつかった紅と淡黄の衣装を着ている。流れる絹糸のような長い髪が、紅鳥姑娘が動く度にさらさらと動く。

気のせいかな、その度に心地の良い、空気を揺らす鈴のような音が響く。けれど、姑娘の身に付けている装飾の何れにも、鈴らしきものは見当たらない。

「だらしなく口開けて見てんじゃねえよ、エロませ餓鬼が」

この言葉に、自分が口を開けて見ていたことに気付き、慌てて口元を引き締める。

紅鳥姑娘は視線を僕に移し、にこりと微笑んだ。それだけでまた、頬が緩みそうになったのに、姑娘は僕の傍らに寄ってきてちよこりと膝を折って挨拶をすると、僕の手を取り、手のひらに「大丈夫ですか？」と指で文字を書いた。姑娘は、言葉が不自由なのかもしれない。

「えっ、あ、はい、大丈夫です。その前に、僕こそありがとう。この野蛮な店員さんから助けてくれて」

男が女に助けられるなんて情けない、と言う人々もいるかもしれないが、状況如何によつては、女が男を助ける場面だつて多々あると思うし、現実、いま起こつた事實は事実。

僕の言葉を聞くと、姑娘はふわりと花が咲くみたいに笑つた。軽く眩暈がするような綺麗な笑顔。しかも、気のせいじゃなく、紅鳥姑娘が何かしらの行動をとると、周囲に柔らかく澄んだ音が響く。

例えは変だけど、この音を耳にすると、まるで布団の中か適温の風呂に浸かっているような、心地よい安心感に包まれる。

「おい、餓鬼。その？野蛮な店員？つてのは、オレのことか？」

声が低くなっている。首筋にピリピリとした感覚。危険が戻ってくる感じ。しかし、引き下がる気にはなれない。

「事実でしょう？ 来店した客いきなり小刀投げるなんて、野蛮が嫌なら？凶暴？に言い換えましょうか？ そんなことしてたら、

あなたただけではなく、この店全体の印象が悪くなるって、考えないんですか??」

腕組みしていた手をゆっくりほどきながら、白店員は、口の端に歪んだ笑みを浮かべた。紅鳥姑娘が慌てて白店員の傍に歩み寄りふるふると首を振ったが、小さな彼女は、簡単に後方へ押しやられてしまった。

「紅鳥は向こうへ行つてな。遺言、残せないのは自分のせいだと思えよ」

「だからっ、そういう行動が」

予測は付いていたので逃げる。

護身術を極めてはいなくても、だてに大井に鍛錬されているわけではない。ついでに言えば、秀と共に行動をしていけば、逃走しなければならぬ状況にも度々直面する。秀には遠く及ばないが、避難するのは慣れている。

勢いよく床を蹴り、埃をわざと巻き上げ、なるべく態勢を低くし、すばやく物陰へ移動する。カウンター? 台や陳列棚の上の物体に気を配っている余裕はない。落として踏んでも、この店員のせいだ。ついでに、無事生きて帰れても、肺を病んだらやっぱりこの店員のせいだ。動く度、煙のように巻き上がる大量の埃を吸い込んで、呼吸器を冒されかねない。

「ちよろちよろ動くなっ。時々来やがる小猿と同じく逃げまわってんじゃねえよ。てめえの年頃の餓鬼は皆猿か? 大人しくやられろっ」

ひょっとして、その「小猿」って……。

「冗談じゃないっ、なんで大人しくやらねなきゃいけないんだよっ。これ、明らかに犯罪だろ。暴行傷害で済んでも懲役、僕が死んだら極刑だってあり得るんだからなっ」

これまでに投げられた小刀は十三本。 いったい、何本隠し持っているんだ？ 早く表に出ないと、真剣に危ないかも。

「極刑だ？ そんなもんは人間」

パーンと、乾いた音が上がる。 同時に、凶暴店員の言葉が途切れる。

「……な、何しやがる、爺イっ」

なんとか屋外へ逃れようと、？台と扉の間のくぼみに隠れていたので、凶暴店員に何が起こったのか分からない。 顔を出して確認しても大丈夫か、判断に迷う。

「紅鳥が、表で白猿君しほくが暴れているって言うから来てみたんだけど、君、何をしていたのかな？」

第三の人物の声。 「白猿しほく」というのが、あの凶暴店員の名前らしい。

しゃらん、という音に顔を上げると、目の前に紅鳥姑娘が屈みこみ、僕ににこりと微笑みかけていた。

幅広い袖口から小さな手を出して、床についていた僕の手をそつと取り、引つ張る。 どうやら「出て来て」と言っているらしい。

姑娘に引つ張られ、少しドキドキしながら立ちあがり、？台カウンターの陰から出る。

正面に、凶暴店員白獏と、長い黒髪で顔半分を隠した長身の男性が立っていた。

古典的な艶のある濃紫の長袍に身を包み、口元を大ぶりの金扇子で隠しているが、微笑んでいるのは雰囲気伝わる。

「君だね、白獏君の被害にあったのは。申し訳なかったね、怪我はないかい？」

「何が悪」

白獏が反論しかけた途端、スパーンと、気持ちのよい打撃音が店内に響く。

見ていたはずなのに、一連の動作が確認できなかった。が、黒髪の男性の扇子が、白獏の頭頂部を打ち据えたのは間違いないと思う。白獏は頭を抱え、痛みに耐えている模様。

「白獏君は、？反省？という言葉を、早く覚えようね。ここでいう公序良俗という言葉に含まれる、数々の道義的礼節も、もう少し身に付けなければだな」

「何が反省で何が道義で礼節だ。あんたが言うのがちゃんちゃらおかしいってんだ、この倒錯衣装爺イが」

パチン、と扇子がたたまれ、男性の口元が露わになる。やはり微笑している。

けれど、髪に隠れていない左目だけが、笑っていない。白獏以上切れ長の鋭い黒の瞳が、白獏を突き刺すように見据えている。

男性は扇子で、白獏の顎を持ち上げる。

「まだ、言いたい言葉、は、あるかね？ 大切な店員の最後の言葉

だ。傾聴するよ」

笑っているのに言葉が怖い。

別に直接的な表現があるわけでもないのに、黒い。いや、笑ったままで婉曲的だから、余計に怖いのか。しかも、発する気が半端なく重い。離れて見ているだけの僕がひしひしと感じる程の威圧。ならば、目の前で浴びせかけられている白獺の心中や如何ばかりか。ちらと、表情を伺ってみる。やはり、明らかに気圧されている様子。

紅鳥姑娘が、「倒錯衣装爺イ」と呼ばれた男性のもとへ行き、僕を助けた時と同じように首を振った。悲しげな音がその場を満たす。男性ははらりと扇子を広げると、今度は目も一緒に微笑んだ。

「冗談だよ、紅鳥。白獺君でも、うちでは大切な人材だから、消すのはいよいよ、の時。その時はこんな前置きはないから。だから、白獺。あの少年にしたことを反省する、よねえ？」

ひきつった、ぎこちない動きで白獺は肯首した。促されて、かなり嫌々そうだけれど、僕へ謝罪の言葉も口にした。

さらりと怖いことを言った（気がする）男性が、どうもこの店のトップらしい。

「さて、と」

男性の視線が僕に向けられる。思わず姿勢を正す。改めて見ると、顔半分しか見えないけれど、容貌の際立った男性だ。

「君は、ひゃくさいどう百彩堂へ買い物、に来たそうだけれど、何を、お求めかな？」

パチン、と扇子の音が響く。

*

「彩、結城彩」

婆さんの逼迫した声で、夢から戻された。

「ば……さん？」

「気分はどうだ？」

明らかに安堵の息を吐いたのが分かった。

どうやら僕は、寝台に寝かされているようだ。婆さんは傍らの椅子に座り、僕の手をずっと握っていた様子。

「……ああ、僕、倒れて……いえ、少し頭が重いですが、大丈夫です」

起き上がろうとする僕の肩を、婆さんが押さえた。

「無理をするな。もう少し、横になっておくんだけ」

確かに、まだ少し眩暈が残っているので素直に従う。意外な事に、婆さんが再び僕の手を握った。

「ムータンさんが、ここまで僕を？ ずっと傍に？」

「仕方なしにだ。この家で倒れてどうにかなられたら、あたしの面子メンツに関わる。まったく、お前が言いつけを守らなかった

からだ。 ……二度と、するんじゃないよ ……」

ぎゅっと僕の手を握った後、婆さんは立ち上がり、背を向け房間へやを出て行った。

婆さんの去った室内を見渡す。

代赭色たいしやの壁に、磨かれた焦茶の家具と窓枠。 ……ここからも、院子にわの白牡丹が見える。

初めて通された房間。 作業をしている房間と比べたらとても狭い、個人の空間。

寝台と小さな？子つくえに椅子の他、白牡丹を描いた掛け軸が一幅、寝台と対面する壁に掛けられている。

掛け軸の右上部には句が書かれている。 内容は、思慕の念。

『白は、「悼いたむ色」だね 』

ついさっきまで夢で反芻していた、昨日の店でのやり取りが思い出される。

『その御婦人は何故、？白？に、こだわるのだからね』

何故、なんだろう ……。

17 「深くなるのは謎ばかり」

17 「深くなるのは謎ばかり」

十一月十九日月曜日 晴れ

『近都分明似儼然

遠觀自在若飛仙。

他年得傍蟾宮客髀

不在梅邊在柳邊。』

1

古典の名作の中に出てくる詩。

夢の中で出逢った書生と恋に落ちた主人公の女性は、夢から醒めた後も夢中の男性を恋い慕い、

終には儂はかなくなってしまふ。

女性は、生前自分の姿を掛け軸に描き、この詩を書き添えとある場所に埋めさせた。

細かな過程や最終的結末は様々だけど、この話に限らず、恋のために命儂はかなくなる女性（男にもいる）の話は珍しくはない。

もっとも、この話は最終的には念願かない、幸せな結末を迎えるのだけだ。

「けどなんかあの絵には、じっくりこないよな……」

午前の授業が終わり、生徒は各々気の合った友人と昼食を買いに売店や学食へ向かう。持参した弁当を教室で食べる生徒も少なくない。僕は後者。売店や学食を利用するのは月に二・三回、基本は、大井が作る栄養バランス完璧な弁当。（ちなみに、全部が全部作ってもらっているわけではない。僕も出し巻き卵やキンピラなどの副菜を作る　こともある）

「メシ喰わねえの？　弁当持ってきてんだろ？　要らないなら仕方ないからもらってやんぞ？」

死んだ魚の目をしていた授業中から一転、つやつや輝く目をしている。ちなみに自分が持参した弁当（三重箱）は既に二段目の半分以上がなくなっている。

「登校前に麵麩も買ってただろう？　だいたいもう少しゆっくり、味わって食べるよな、授業終わってまだ十分しか経ってないのに、なにほとんど食べ終わってんだよ？」

「二十分に味わってるよー。光哥の料理が美味すぎるからなくなるのが速いんだ。それよ色彩、体調いいのか？　週末具合悪かったんだろ？　はっきり言って顔色悪いぞ？　目の下にクマできてるし」

もぐもぐ口を動かしながら、公孫秀は空いていた前の席に座り、僕の顔を覗き込む。

金曜に海角で分かれて以来、秀とは今日学校に来るまで一度も会っていない。なのに何故、ムータン婦人と大井以外知らない、僕の週末の体調を知っているのか。

「秀さ、ひよっとしなくても一昨日の晩、またうちに忍び込んだ？」

夢現に、捕り物があつてゐるらしい物音を、聞いた気がする……しかも五・六・七回。

「大井の爺さん酷えんだぜ、あの晩さ、上手いこと彩の部屋の窓まで辿りついてラッキー、つて思つたらお前寝ててさ。窓を叩こうとしたら爺さんに捕まつてよ。まだ九時過ぎだったのに寝てるなんて変だと思つてさ、理由訊いたら体調悪いっていうから、見舞いしたいって言ったの？今宵はご遠慮いただきたい？の一点張りですさあ。時間変えて何回かチャレンジしたけど毎回阻まれてさ、最後はとうとう座禅だぜ、しかも一時間。昨日は四妹が体調崩してたからさ、昼間に少しだけ様子を見に行つてみたら、おまえ、婆さん家に行つたつて。無理して悪化させてないか心配してたんだぞう。どうだ？友情だろう？」

「友情」は非常にありがたいけど、夜中にそこまでは如何にかと思う。まあ、そこは？思い立ったら即行動？の秀らしいし、心配してくれる友人がいることは、素直に嬉しいことだ。

「別に大したことはないんだ。色々あつてちよつと寝不足が続いて……」

話し始めて、ふいに金曜の悪夢を思い出す。

「……秀。百彩堂に極悪凶暴店員がいること、知つてた？」

三重弁当箱を専用袋に入れながら、秀は頭を少し傾けちよつと考えた後、にかつと笑う。

「なかなか味わえないスリルだったろ？あの白い兄ちゃんのおか

げで、あの店にはコソ泥入れないって話だもんな。 オレいつも店先で見つけられて小刀投げられんの」

「な〜に〜が、？なかなか味わえないスリル？だよっ！ 殺人行為だろ、あんな凶暴な店員がいるならいるって言えばよ！ それ以前に、あれが店？ 埃ほこりが商品、みたいな状況だったぞ。 買い物に行つて命の危険にさらされた末に掃除までするはめになるって変だろう」

卓子つくえを叩き、少し荒げた声を上げたので、教室に残っていた生徒諸君の注目を浴びてしまった。 軽く咳払いして座り直す。

僕の怒りをよそに、秀は目を更に輝かせ前のめりになる。

「すげえ、彩。 本当に店内に入れたんだ！ オレ、あの兄ちゃんに阻まれて店中入れたことないんだ。 なに何？ 詳しく聞かせよ。 他の店員は？ なんか面白いもん置いてた？ ？埃が商品？つて？ なんで？掃除？することになったん？」

「なんでつて ……」

それは僕が訊きたいくらいだ。

「 知りたければ自分で確認してくればいいだろ？ もれなく？スリル？が味わえる。 これ以外、僕が秀に伝えられる？情報？はない！」

百彩堂 で見聞きした内容、及び得た品について、『関わりのない人間に？話さない？？見せない？』という条件で、とある 試供品 をもらった。 だから、話すわけにはいかない。

その条件がなくても、これ以上口を開くと、秀に文句ばかり言いそうなので、黙るに限る。

「えーケチい、なんで？ ちょこつとくらい教えてくれないじやん！ あそこが文具店で けしもの屋 っていう^{あだな}綽名で呼ばれてるって情報は本当だぞ。 それとも何？ もう文具屋じゃなかったのか？ 店員情報については、行けば分かることじゃん。 前情報入れてたらおまえ、行くの止めただろ？ 探してる商品があるかの確実性もなくて、危険だけあるような店だって知ってたら、彩、行つたか？ 身の安全を優先した、違うか？」

鋭い。 さすがは十三年来のつきあい。

「 確かに。 あの店の存在を教えてもらったことは……うん、感謝しているよ。 ごめん、言い方が悪かった」

少しむくれ顔の秀に素直に頭を下げる。

秀は僕の弁当から出し巻き卵を抜き取り口に放り込む。

「これでチャラな。 で？ 目的のモノなかったの？ けしもの屋 の由来になるような、消しゴムとか修正液とかは？ まさかあの兄ちゃんが殺し屋で消すのは人間、なぐんて愉快的なオチじゃないよな？ そんな必殺仕事人みたいな仕事を表だってさせとくほど、天堂島の警察ものんきじゃないだろし」

客に小刀投げる店員が野放しにされているだけで、十分のんきだと思っけど……。

「 微妙に焦点のずれた商品は売っていたみたいだよ。 埃に埋もれて半分しか見てないけど……」

店内の惨状が再び脳裏に浮かぶ。

ため息が漏れる。

ムータン婦人宅の壁だけでも気が重いのに、悲惨極めたあの店内を、「店」と呼べる状態に戻す、という約束を僕はさせられてしまった。幸いなのは、清掃完了の期限を設定されていないことくらい。

「どしたの？ 胃が痛いのか？」

言いながら、僕の弁当の中身を次々口に放り込む。色々な意味で、本当に胃が痛くなってきた。

「食べていいから、箸つかえよ」

箸ごと弁当を秀に押しやる。当然のごとく受け取った秀は、顔を真横に傾け僕の顔を凝視しながら「そっか」とつぶやいた。

僕が金曜日のこと　つまりは　百彩堂　でのことを「本気で」話したくないということ、これで、ようやく、察してくれたに違いない。

相手が「嫌がっている」「ことを理解すれば、知りたがりの秀も、質問攻めにすることは（ほぼ）ない。

秀は僕の弁当を、何食か抜かれた欠食見さながらのスピードで食べていく。さっき食べた三重箱の中身は、いったい何処へ行ったんだろう。

「んで？」

「んで??？」

「金曜のこと、話したくないんだろ？　なら土曜は？　大井の爺さんは詳しく言わなかったけど、彩、毛虫婆さん家ムータン婦人で倒れたんだろ？」

何があつたん？ 昨日は訪問日でもないのに行つたつてことは、目的達成できそうなのか？ なんか、画期的なモノを手に入れられたとか？」

本気で、がっくりと肩を落としたくなつた。

金曜のことと土曜のことは、密接につながっているのだけど、秀にとって金曜のことは金曜のこと、土曜は土曜で別の話。事情を知らないのだから、無理からぬことだけど……。

「僕さ、秀を本当に羨ましく思うよ……」

「うわ、なにそれ愛の告白？ そんなイマサラなこと口にするなんて、受け止めてやるけど彩、やっぱり熱でもあるんじゃない？ おまえがそんな素直なこと口にするなんてさ、末期じゃない？」

そんな告白をしたわけではないけど、真実そう思うことがある。

秀は、自分の関心事に嘘や誤魔化しなんてしない。疑問に感じたことは素直に堂々と、口に出して真っ直ぐ相手に問う。

僕には出来ない、秀を羨む点のひとつ。

「訊いてみて、いいかな……」

呟くような僕の言葉に、秀は首をかしげるだけで、何も言わなかった。

*

昨日の婆さんは、いつもと違っていた。

訪問日でもないのに現れた僕に、婆さんは少し驚き、念を押すように体調を尋ねたが、僕を追い返そうとはしなかった。

僕をいつもの房間へ通すと、一人院子に出て、僕が帰るまでずっと、灰色の雲が覆う空を見ていた。

僕は僕で、そんな婆さんに必要以上の言葉をかけることができず、壁の染みと向かい合った。

金曜、百彩堂で渡された、手のひらに収まるほど小さな白磁製の薬瓶。

中には、いくら試供品とはいえ、たった数滴の液体しか入っていない。

土曜は、結局何も作業できないまま家に帰ったので試せなかった。次の訪問日である火曜まで待っても良かったけど、どうしても早く確認をしておきたかった。

婆さんの目に触れないよう、壁はブルーシートで覆っていた。捲ると、黒々とした禍々しい染みが変わらずにあった。

用意してきた白布に瓶を傾ける。少しとろりとした無色無臭の液体が、瓶の口から布に落ちる。湿った部分で一回、染みを拭いた。

途端、ぞぞつと背筋に悪寒が走る。黒染みが、悲鳴をあげた気がした。

ガラスを爪で引つ掻いたような、不快で、耳を塞ぎたくなる奇音。壁から布を離すと、音は聞こえなくなった。気持ち悪い冷や汗がこめかみに流れた。

拭った部分だけ、穴を空けたように染みが消えていた。代わりに布が、どす黒く変色していた。

『もし、これで染みが？消えた？ら、君はもうそこへ行かない方がいい』

『玄青と名乗った老板の音が、いま耳元で囁かれているかのように聞こえた。』

その理由は聞いていない。正確に言うと、教えてもらえなかった。

寢室の掛け軸の詩。

いったい誰が、何を思い書いたのか。

この謎の液体で、消えた染みの正体。

婆さんの家へ行かない方がいいという理由。

あつちにもこつちにも、訊きたい事がありすぎる。

17 「深くなるのは謎ばかり」（後書き）

1 湯顯祖 《牡丹亭》 人民文学出版社より引用

18 「体当たりすると堰は切れる」(前書き)

文末に、内容とは無関係の落描きを置いています。(1月31日)

)
(
見られたくない方は、挿絵表示をOffにして下さい。

18 「体当たりすると堰は切れる」

18 「体当たりすると堰は切れる」

引き続き十一月十九日月曜日 晴れ

百彩堂ひゃくさいどう、店内清掃引き受けの経緯は以下の如くである。

金曜晩、百彩堂 店内における刃傷沙汰（未遂）事件の原因は、白獾しろはくという店員にある。店の責任者である玄青老板げんせいばんちやうはすっぱりと言いきった。

しかし

「結城彩君ゆつきさい。君は、白獾君が二回、小刀を投げた段階で、身に及ぶ危険を推測できたと思われるが、君は店外へは逃げず店内で逃げまわった。そうだね？」

玄青老板は大型金扇子で口元を覆い、穏やかな声で言いながら、床に散らばる様々な物へ視線を流した。僕が逃げまわる際、櫃台カウンタや棚からはずみで落とし、蹴散らした品々だ。

要するに、店内の乱れの一因は僕にもある、と言っているのだ。白獾への、目にも止まらぬ置き目を目の当たりにした上、老板てんちやうの指摘に反論出来ない面もあったので、僕は店内清掃を「自主的に」申し出ることとなった。

老板は、形式的に「無理はしなくていいのだよ」と言いながら、「君の都合のいい時間にゆっくりでいいから。ここ数年、君以外に？ 買い物？ に来た客人なんて、いなかったのだからねえ」と微笑

んだ。

とつさに、「それならば掃除の必要はないのでは……？」という言葉が心中で生まれたが、その場を支配する老板の笑顔に、瞬時に圧殺された。

*

ケーブル列車を降り、他の降車客より鈍い足取りで改札へ向かう。改札を抜ける前、一旦立ち止まり深呼吸。覚悟を決め、海角中環駅から駅前大路へ出る。

月曜の午後四時過ぎ。

金曜夜の賑わいとはまた違う活気。

夕飯の買い物を済ませた御婦人がたや下校途中の学生達が、好き勝手喋りながら行き交う。

飲食店の呼び込みの声と、甘い辛い様々な食べ物の香りが、人の流れと共に漂ってくる。

駅を出るまで感じていた微々たる不安など、人ごみに入った途端粉碎される。

ちゃんと顔を上げ、周囲の状況を素早く読み取り身体を移動させないと、駅へ向かう人波に押され、思うように前進できない。下手にぶつかって、金曜みたいに怒鳴られるのもごめんだ。

だけど、慣れてくるとこの人ごみを縫っての移動は、ちよつとしたスポーツの様で楽しい。

楽しむ余裕が出てくると、人ごみの先に在る他の事物にも目が届くようになる。金曜と違い、まだ陽は高めなので、通りの全容がよく見える。

陽光の下の、目に映る光景は天涯とあまりに違う。

こんな驚き方をしていると、僕が海角に来たことがないかのよう

に聞こえるかもしれないが、それは否^{NO}。 時間帯を問わず、海角に来たことは何度もある。

けれどその際は、大抵明確な目的があつて、その目的地だけを指し、送迎の車で移動をしていたので、通りすぎる町の様子などあまり気にしていなかった。 というより、関心がなかった。

それが現在、諸々の経緯で意識改革をさせられている。

意識に変化が起きると、何度も訪れたはずの町の、見えるもの聞こえるもの全てが新鮮に感じる。

天涯では考えられない、半下着姿の小父^{おじ}さんが、店先で串焼きを焼いている。 秀^{うしろ}ではないけれど、タレの焦げる香ばしい匂いがかがされると、胃袋が勝手に反応してしまう。

店主と顧客の喧嘩腰の会話。 おそらく、これが海角流コミュニケーションなのだろう。 あちこちから同様のやり取りが聞こえてくる。

串焼き屋の隣の、狭い袋小路を有効活用して、小柄でやせ気味の^{おば}小母さんが造花を売っている。

種々雑多な造花は、どれもが現実にはあり得ない目にも眩しい蛍光色か派手な赤。 花の横で、やや控え目に売られているTシャツも極彩色。 どこかで見たことがあるような^{ブランド}牌子のロゴが、ドンと胸にプリントされている。 よくよく見れば、ロゴの一字が有名牌子とは違っている。 限りなく偽物に近い本物、といったところか。

大路を挟んだ隣の区画には、開業してまだ五カ月、八階建ての大型ショッピングモールがある。

(ちなみに、運営しているのは結城のグループ会社で、僕もプレオープン^{ひとケタ}の招待会に顔を出した。)

先程までの庶民派店から打って変わり、価格設定が^{ひとケタ}一桁以上違う商品が、鏡の如く磨かれたショーウィンドーに飾られている。

吹き抜けの一階ホール中央には生花店があり、一本一本、透明セ

ロファンで巻かれた生花が、宝石のようにガラスケースに並べられている。海角の人々が好みそうな、華やかで鮮やかな花を多く取り揃えていて、先の小母さんの造花とは一線を画する高級感が匂い立つ。もっとも、一本が（海角での）二回の食事代より高いのだから、高級感漂うのも当然だろう。

ただ、好のみの云々はさておき、小母さんの店で売っている造花の方が、海角の町には似合っているように思う。

「へんな、町」

虚実混在、といった印象。

何が虚で何が実かは判らない。

真と偽、新と旧、すべてが渾然と融合して、この町独自の色彩を生んでいる気がする。

もっとこの町のことを見たい、と始めて思った。けど今日は先を急ぐ。

本日ここへ来た目的を、忘れてはならない。

角を幾度か曲がり下るうち、本日の目的地 百彩堂 へつながる最後の小路に着く。

一旦立ち止まり、小路の先にある景色を思い浮かべると、ついでに金曜夜の惨事も甦る。

巨大な漬物石を両肩に乗せられたよう。 陽光の明るさとは対照的な、暗澹あんたんとした気持ちになる。

「いや、今日は大丈夫。 大丈夫だろう、大丈夫なはず …」

自己暗示にもならない、あくまで「気休め」の呪文を繰り返す。

本日、 百彩堂 を訪れるのは、約束させられた掃除をするため

ではなく、幾つかの謎を玄青老板げんせいばいに尋ねるため。

老板は「いつでも来てよい」と言っていた。

凶暴店員白猿しやくばんは、老板がいれば凶行に走ることはない（はず）。それに何より、あの店に行けばもれなく、紅鳥姑娘こうりゅうにも会える（はず）。

小路を抜け、百彩堂 前の石院子いしわ入り口に立つ。周囲に白い人影がないことを確認。

その後、院子を囲む壁に背を預けながら、店舗入り口を目指す。秀の話だと、店に入る前でも白猿の小刀に襲われる可能性がある。玄青老板に会うまで油断禁物。防御用の鞆は、いつでも楯として使えるよう手に持っておく。

しかし、文具店訪問に異様な緊張感を漂わせている僕は、傍から見れば明らかに不審者だろう。

「ふう……」

途中で小刀に襲われることなく、無事、年季の入った木製ドアの前に立つ。第一関門突破、といったところ。

幅のある木枠に、身体を重ねるように立ち、摺り硝子すりガラスと見紛うばかりの、汚れた硝子窓越しに店内を伺う。
いない。

「けど、金曜も？ 一見いっけん？ は、誰もいなかったんだよね……」

緩みかけた気持ちを引き締め直すと、覚悟を決め、ドアをぐいと引き開ける。

音に色があるとしたら、このドアベルの音は暗褐色あんせつしき。郷愁誘う枯れた音が、埃で装飾された店内に虚しく響く。

「ごめんください。先週？ お世話？ になりました、結城です。」

あの、どなたかいらつしゃいませんか？」

油断なく周囲に視線を配る。

節電のためか、電灯はつけられておらず、明るい戸外に比べ店内はとても暗い。おかげでゴミもとい、埃ほこりに覆われた商品の哀れな様を、具たぶらに見ることは出来ない。が、金曜に僕（と白猿）が荒らした状況から、店内の様子は少しも変わっていないことは判る本気で、僕が掃除するまでこの状態で放っておくつもりなのだろうか。

（白猿に）刺激を与えない程度に、控えめな声量で五回呼びかけるが、今回もまた応えはない。

やはり、？営業中？の札は見当たらないが、開錠されている以上営業中のはず。ならば誰もいないわけがない。聞こえていないか無視か、何れにせよ誰かはいるはず。

こうなりや大声出すしかない。

「どなたか、いらつしゃいますよ、ね！」

効果一発。

しかも幸運なことに、聞こえて来たのは心地よい鈴の清音。足先から脳天に、ビリリツと痺れが走る。ちよつと緊張。少しすると、予測通り樺色かほいろの衣に身を包んだ紅鳥姑娘が姿を現す。挨拶をすると、姑娘も膝を折り挨拶を返してくれた。

「あの、今日は」

来店目的を告げようとすると、姑娘は目の前まで寄って来て、じつと僕の顔を見上げた。

杏仁型の大きな瞳がやんわりと細められ、姑娘は花も恥じらう笑顔となる。しかも、媚薬めいやくの如き清音を伴って。思わず見惚れて

言葉なんて忘れてしまう。

頬の筋肉が緩みすぎないよう苦心している僕の右袖を、紅鳥姑娘はくいと軽く引いた。

「どうやら」ついて来て、「、と言っているらしい。」

「制服姿ということは、掃除に来たわけではないようだね。まあ、座りなさい。紅鳥、客人用の茶を取ってきておくれ」

前回の房間を通り過ぎ、曲廊を更に奥深くへ進んだ、水上に浮かぶように建つ古亭へと案内された。

頭上の扁額には 碧落亭 とあり、左右の柱上には 霧裡看花

水中望月 とある。

霧中に花を看、水中に月を望む 少々変わっているけれど、詩情のある対聯。

歳月を経て落ち着いた古亭の深い丹色の柱と、池を囲む青々とした木々の調和は見事。

風のない水面は鏡のようで、木々や古亭を倒映している。よもや、こんな池水を有した庭園があるなんて思いもしなかった。

しかも、手入れはかなり行き届いている。

緑を背景に、鮮やかな濃紫の長袍に身を包んだ玄青老板は、優雅な手つきで茶を淹れていた。今日は、長い髪をひとつに束ねている。記憶に違うことなく、容姿は端麗、纏う空気は典雅。

挨拶もそこそこ、勧められるまま円卓の向かいに腰を下ろしたものの、一抹の不安を拭いきれず周囲に視線を走らせる。

「白獺君なら睡眠中だ。彼は基本夜行性だね。雷が直撃しない限り起きないから、安心しなさい」

前回同様大振りの金扇子で口元を覆いながら、玄青老板は目を細

めた。

心中を見透されていたことに少々気恥かしさを覚えたけど、不安の一つを消せたことで気持ちに確実な余裕が生まれる。

紅鳥こうとり姑娘が運んでくれた、澄んだ黄金色の茶の、ほの立つ蜜のよ
うな香りは、疲れかけていた心をほんのり和らげる。一口含むと
梨のような甘みが広がる。一緒に出された棗なつめもじ糯も甘酸っぱくて、
緊張を解く手助けをしてくれた。

「それで、件の婦人宅の染みは消えたかね？」

前触れもなく、玄青老板が本題に切り込む。

質疑応答の準備が出来ていなかった僕は、飲みかけていたお茶を
誤飲し咳き込む。隣に座っていた紅鳥姑娘が、心配そうに背をさ
すってくれる。不幸中に幸い。

「し、失礼しました。はい、消えました。試した部分だけ
ですが、？悲鳴？を上げながら、驚くくらいきれいに……」

言葉を続けようとする僕の口元を、玄青老板は扇子の先で軽く押
さえた。

「私の言ったことは、覚えているかね？」

深く響く声で、老板は僕の間を見据え尋ねた。

引き込まれそうに深い黒の瞳。けれど、底のない穴を覗きこん
でいる様で少々怖い。

「あの 試供品 で、もし染みが消えたら？もう行かない方がよい
？」

「だが、結城彩君。君は、その言葉に従う気持ちはあまりないよ
うだね？」

老板の一見、穏やかな視線に気圧されつつも、僕は視線を外すこ
となく口を開く。

「どんな薬剤でも消えなかった染みが、頂いた 試供品 を使った
ら、付着したばかりの汚れのように簡単に落ちた。あの液体を用
いれば消えると分かったことで、染みの問題はひとまず解決しまし
た。ですが」

息継ぎしてお茶を一口。老板は面白そうに僕を見ているだけで、
「ああ」とか「そう」とかの相槌あいづちひとつ打つことはない。

反応が何もないのはどうもやりにくい。

「何故、あの液体で染みが消えたら、ムータン婦人宅へ行ってはい
けないのか、僕には解りません。消える際に聞こえたあの悲鳴の
ような音と、関係あるのでしょうか？ あの液体はいったい何です
か？ 成分分析をしたわけではないのでこれは僕の勘ですが、あれ
は市販されている品とは異なる特殊なもの、そして何より、あの染
み自体が、普通の染みじゃない。老板は染みの正体が何か、ご存
知なのではないでしょうか？ もしかして、ムータン婦人を、知っ
ておられるのでは？」

扇子を広げ、思わせぶりに数回揺らめかせた後、老板は僕の目の
中を覗くように、顔を近づけてきた。アップになっても端正な顔
は端正。あまり間近で見つめられると戸惑ってしまう。

蛇に睨まれた蛙、は、こんな気分だろうか ……？

「御婦人に、直接訊いた方が速いのではないかね？」

質問に答える前に、軽く頭を振って膠着した視線を解してみる。
ついでに、老板との距離を少し取る。

「それは考えましたが……出来ませんでした。染みのことで、ムタン婦人は何か、深く悩んでおられる様子で、婦人に尋ねるのは……傷をえぐるような行為に思えて……」

くすりと老板は笑った。

「では、私に尋ねる理由は？」

「玄青老板。僕はとても感謝しているんです。あの晩、たまたま買い物に來ただけの僕の相談に乗って下さったこと。自分で言うのもなんですが、染みの話は、荒唐無稽な、作り話に思われても仕方ない内容だと思います。でも、老板は最後まで僕の話を聴いて下さった上に、あの試供品を下さった」

再び息継ぎ。先はまだ長い。

「染みが消えたことで、液体の効果は明らかになりました。老板が、僕の話を子供の虚言と判断し、適当にあしらったわけではないと知ることもできました。僕は老板、あなたの事をよく存じませんが、染みに関わることで僕を騙すことはない と、信じています」

「それはありがたい評価だが、やや性急な判断に思われる。それも勘かね？」

「そうです。僕は老板の言葉を信じます。だからといって、ム

「タン婦人宅へ行くのをいきなり止めることには抵抗を感じます。最近ようやく、親しく会話出来るようになったんです。憎まれ口がほとんどですが、婦人も、僕との会話を楽しんで下さっているように、思っています。それに、やりかけの作業を途中で放り出すことも僕の主義に反します。ただ、作業を続けるためにはあの液体を、十分量売って頂かなければいけません、し……」

老板は僕の顔に注目したまま、微笑崩さず話を聴いている。視線を少し外してくれると、ありがたいのだけど……。

「それに　その、老板の先日の助言がとても気になって、明日の訪問に躊躇しているのも、事実です。不安や疑問を曖昧なまま放置しておくことは精神衛生上良くないです。　？行かない方がよい？明確な理由があるなら、それを知った上で僕自身も考え、判断したいんです。　染みに関する事でご存知の事があるのでしたら、どうか、教えて下さい」

よし、言いきった。

「？公孫秀に見覚え？作戦。　訊きたいことは直球勝負。　ただ、投げ慣れていないからコントロールは悪いけど。　た

とにかく、ここまで口にしたからには後に退けない。　たとえ明日の払暁シキハルヒまでかかろうと、何らかの答えを得るまで帰らない覚悟。　大井には、今夜帰宅しない場合の理由（含む・明日遅刻する場合の学院への連絡）も言い置いてきた。　準備は万端だ。

玄青老板はやや目を細めると、紅鳥姑娘に何か耳打ちをした。姑娘はふわりと挨拶すると、黒髪をなびかせ清音と共に古亭を去って行った。

「君は、この店が　百彩堂　以外の名で呼ばれていることを、由来を含め聞いたことはあるかね？」

椅子から立ち上がった老板は、僕のすぐ脇に立った。長身なのは分かっていたけど、座っている横に立たれると、まるでガリバーを見上げる小人になったよう。

「けしもの屋」という別名を、友人から聞きました。消しものばかりを売っている、少々風変わりな文具店だと」

ふふと笑いながら、老板は扇子を畳む。

「風変わりな文具店、ね。開店休業状態だけど、百彩堂は元々、文房四宝ぶんぼうしほうを主力商品とした店だ。現在、表の店舗部分で消しものばかりを扱っているのも間違いない。ただけしもの屋の由来は別にあると言ったら、結城彩君。君はいついどんな業務内容を思い浮かべるかね？」

「清掃請負業」

「なるほど。たまに近いことはするな。だが、あの店内を見て、本気でそれを言っているのかね？」

一般的視点から、あの店内が非一般的状態であることを、老板も認識してはいるらしい。

しかし、清掃業でないとすると。。
？解体業??不用品回収業??除霊師?（これは秀の影響大）等々、思い付いたものを挙げてみたが、どれも「近いね」の曖昧な言葉の後に次の回答を促される。

残るは。ふと、昼食時の秀の言葉が思い出される。

「裏社会的な、例えば、暗……」

「暗殺等を請け負う非合法組織？」

言いごもる僕の言葉を引き取り、老板はにこやかに言い放つと、愉快そうに笑った。

「場合によつては、それに近いこともするかな。しかし、半端に生死に関わることはしない、面倒が多いからね。ちなみに、合法非合法でいえば、法の圏外、だな。さて、他には？」

またさらりと、とんでもないことを言った気がする。

秀のノリとは違う不可解さ。反応の返しようがない。

「あの どうも僕の浅い知識では、答えが永久に出ないように、思えるのですが……」

「そうかね？ 確かに、少々意地悪な質問ではあるが、答えは至極単純、依頼された対象を 消す 仕事。なんのひねりもないだろう？ 君が挙げた業種との近似点多いが、やや特異なのは、消す対象が、君が？ 現実？だと認識している世界に、存在するとは限らないこと、だな。この けしもの 仕事は完全予約制でね、依頼がないと行わない。あくまで副業なんだよ、百彩堂 の売り上げでは生活が成り立たないからねえ」

百彩堂 の売り上げでは生活が成り立たない、という部分以外、まったく理解できない。

「君の質問は、いわば？ 企業秘密？に当たるものでね、依頼者といえど、簡単に話して聞かせるものではない が、特例、という言葉もある」

唾然呆然としている僕に、老板は究極の笑みを向ける。

「そこで結城彩君。君、依頼してみる気はないかね？ 特別特典としてなら、君の質問の一部に答えられる。こちらが勧誘している面もあるから、料金は格安にしてあげよう。 個人情報保護に關しては、どこよりも万全だから安心していい」

多少覚悟はしていたけど、相当アブナイ世界の人と、接点を持つてしまった気がする。

僕の心中を察してか、老板は目を細め、ふっと笑った。
それから一口お茶を含むと、扇の先で僕の顎を持ち上げ、ゆっくりと僕の上に屈みこむ。

「は……う ……つつ!？」

動揺を通り越し、思考停止・五感喪失。

「百聞不如一見。 君が？理解？するためには、裏付けのない言葉より目に見える実証、だろう？ では明晩、行うつしよつか」

聴覚が一番に復活。

元の立ち姿に戻った老板は、優雅に金扇子を揺らめかせている。
涼やかな音と共に、樺色の裳裾をなびかせた紅鳥姑娘が戻ってくる。 その背後には白い人物X。

視界に入るものが何か、も認識できるまでに回復した。
しかし、口を開くことは当分出来そうにない。

よもやの接吻^{くちづけ}。

しかも 人生初の……。

> i 1 7 5 7 0 — 2 4 0 <

19 「決行日 前編」

19 「決行日 前編」

十一月二十日火曜日 晴れ

朝目覚めると、不思議なほどに身体が軽かった。

昨日、けしもの屋 こと 百彩堂^{ひゃくさいどう} で、ムータン婦人宅の染みについて相談した結果、玄青老板^{げんせいぼ}を始めとする けしもの屋 総動員で「助っ人」に来ると言う話になった。

具体的除去方法は知らされていないものの、今日中に件^{くだん}の染みの決着を付けてみせる、との話。

解決目処が付いた安心からか、昨晩は早くからぐっすりと眠れた。それが、身体の軽さにつながっているのかもしれない。

「でも……」

？何か？が、もやもやと頭の隅でとぐるを巻いている。

解決の目処が付くとは別に、何か他の、あまり楽しくないことが昨日あったような気が……。

「何だっけ？」

いくら考えても何も思い当たらない。単に疲れがまだ残っているだけかもしれない。

そう。今日はその程度のことを気にしている場合ではない。

三か月に亘り格闘^{わた}してきた染みと、決別できるかもしれない重要な日なのだから。

「若。本日放課の後、かの婦人宅へ直接行かれ、帰宅は何時になるか分からない。このご予定、変わりはございませぬか？」

座禅を終えた後、大井は食卓で僕に尋ねた。

僕の予定を具体的に確認するなんて、大井には珍しい行動。

「ないけど？」

学生である僕の日々の予定は、学校行事が中心となるのである程度規則性があり、余程でない限り大きな変化はない。毎晩、翌日の大まかな予定を僕から伝え、大井はそれに合わせ食事時間などの調整を行う。

毎朝、当日の予定を軽く確認はするけれど、こんなピンポイントの予定だけを念押しに確認することは珍しい。

「若。昨日 百彩堂 へ行かれて、得るものがございましたか？」

食後の緑茶を勧めながら、大井が僕の顔をじっと見る。大井が朝からこんなに喋るのは珍しい。

「……多分あった と思う、けど何故？」

僕の曖昧な答えに、大井は目を僅かに細める。大井がこういう表情の変化を見せる時は何かがある。

大井はムータン婦人のことはもちろんのこと、百彩堂 のことも知っている。

しかもおそらく、かなり詳細な情報を持っている。と、踏んでいる。

けれど大井は僕には話さない。

あえて、僕が壁にぶつかるよう仕向けているとすら思える。

壁にぶつかって、何が問題か、どう対処するのがよいかを僕自身に考えさせるため、僕の身に危険が及ばない限り、ぎりぎりまで口出しする気はないと思われる。

そんな？見守る？こと、を第一とする大井が、こちらが問う前に口を開く時は、直面している問題が「かなりの難題」である場合。背筋を伸ばし、改めて、大井の顔を真正面に見る。

「大井。何かあるのならはっきり、言ってくれ」

僅かな沈黙の後、大井はおもむろに懐から折り畳んだ懐紙を取り出し、スツと僕のの前へ置いた。

「これを、お持ち下され」

ごくりと唾を飲み込み、懐紙を引き寄せ、開ける。

「……なに？ これ」

そら豆よりやや小さい、綿状の物体がふたつ懐紙の上にはよんと置かれている。

「耳栓、でございます」

とうとう我が家にまで不可解現象が起こり始めたかと思い、あからさまに不信の顔を大井へ向ける。

「お持ちいただければ、若のお役に立つことがございましょう」

それ以前に、何故「耳栓」なのかの理由を言って欲しい。

「ただ、口の重い大井とそれ以上の会話を続ける時間的余裕はない。」

「登校時間5分前だ。」

＊

「本日も判子を押したような学校生活。」

「公孫秀が、美術の授業前に石膏像に化粧と花柄のフリル模様を描いて、美術教師に追いかけてまわされたことを含め、いつも通り平穏で単調な時間が過ぎて行く。」

「いつも通りだけど、何故か今日は、時間の経過が遅く感じられた。」

「彩、今日はどうすんの？ いよいよ決戦の日なんだろう？ 敵陣に直接乗り込むのか？」

「ようやく放課した教室で、秀は例の如く売店で買っておいいた麺麭を頬張っている。」

「いつのまにムータン婦人宅が？ 敵陣？ になったんだ？」

「「そうだ」と答えると、秀も制服のポケットからごそごそ何かを引っ張り出し、ぬつと僕の目の前に突き出した。」

「縦長の黄色の紙に、記号か暗号か、といった文字が、黒々とした墨で書かれている。」

「モノの本で見たことがある、？ 霊符？ とかいう護り札。 確か、道士だか方士だか忘れたけど、そういった呪術師的な人が用いる呪いの言葉を書いた紙だ。」

「「なんで、霊符？」」

「「分かんないけど、光哥がさ、彩が毛虫婆さん家に行くなら渡しとけて。 ほら、光哥の老爺が道士だったんで、光哥も呪いとか」

意外と詳しいじゃん」

光哥の老爺おじいさまが道士だったことは知っているけど、何故、いま、僕に、この靈符をくれるのか。光哥も大井に負けない情報通だから、何かを知った上で、秀を介して靈符を僕に届けてくれたのだらうけど。

「秀。無駄とは思っけど念のため確認。この靈符、？何に對して？効力を持つ護符か、光哥から聞いた？」

「いんにゃ。？護符です？ってしか光哥言わなかったから。知ってんだろ？光哥が大井の爺さんに負けなくらい口重いの。護符だから、魔除けとか病氣平癒とか学業成就とか金運上昇とかになんじやないの？」

後半二つは関係ないとして、「魔除け」というのは引っかかる。もしかしたら、必要な物かも。

僕が神妙な顔をして靈符に視線を落としていると、秀が下から覗きこんで、これまた神妙な顔をして見せる。

「オレも付いてって、彩の手伝いしてやりたいんだけど昨日の夜四妹メイがまた熱出してさ、今日は早く帰るって約束しちゃったんだよなでもなあ、ここで親友の助太刀をしないというのも」

「いやっ、秀の気持ちは嬉しいけど、翠環すいかんとの約束が先だろ？翠環は秀の帰りを待ってるんだから、ほら、早く帰ってやらないと。あ、あと光哥にお礼を言っというて」

このまま喋らせていたら、本当に付いて来ると言い出しかねない。秀に鞆を持たせ無理矢理教室から押し出す。今日は本物の「助

「人」が来ることになっているのだ。間違っても、秀に付いて来られては困る。（正確に言えば、いつもだけど……。）
光哥の霊符を大井の耳栓と一緒にジャケットの内ポケットにしま
うと、僕も教室を出る。

秀の言葉を借りて言うなら「決戦に臨む」ため、いざ、ムータン
婦人宅へ赴かん　だ。

＊＊

今日も予定通り、三時五分前に到着。

ムータン婦人に会ったらず、今日「助っ人」が来ることを話し
ておかなければならない。

他人が家に入るのを嫌う頑固な婦人から、僕以外の第三者（達）
がこの家へ入り、作業することの承諾を得ることは、結構至難だと思
う。

「承諾を獲得」するまでのシミュレーションを、頭の中で何パタ
ーンか考えながら、いつもの如く数回婦人の名を呼ぶ。すると、
いつもよりやや間があつたが、スツと扉は開いた。

いつもならここで「一回呼べば十分だといっているだろう？　物
覚えの悪い餓鬼だ」くらいの嫌味で出迎えられるのだけど、いくら
待てども何の音もしない。

不審に思い、開けられた扉の中に一步入ると、嫌味が飛んで来な
い理由が分かった。

「ムータンさん、いったい、どうしたんですか！」

シミュレーションなんて無意味になる。　本日の予定を悠長に説
明する状況ではない。

日曜夕方に分かれてからたった二日程なのに、ムータン婦人は立
っているのもやっと、といったやつれた姿になっていた。

顔は蠟のように血の気がなく、衣服の赤が、普段よりくすんだ茶褐色のせいか、まるで枯れかけの花の様。

いまにも倒れてしまいそうに見える。

「無理しないで下さい！ 一体どうしたんですか？ 風邪ですか？ とにかく、まず寢室へ戻って横になって下さい。この間僕が休ませてもらった部屋ですよ？ 小言は後で聞きますから、勝手に入りますよ。ムータンさん、僕の肩に体重かけてしまっていますから」

肩を貸そうとする僕の手を、ムータン婦人は弱弱しく握った。

目を閉じ、数回、深く息を吸っては吐くを繰り返すだけで、何も話そうとはしない。言葉を発するのも辛い状態なのかもしれない。

「ムータンさん、寢室に」

「あたしや、病人じゃないよ。寢室なんかに行ってどうする？ いつもの房間へやに行く。結城彩、お前はあの部屋の作業に来たのだろうか？ あたしはその目付をしてるんだ。寢室なんかで寝ていたら、お前が失敗したりしても気が付かんだろうが」

毒は弱いながらも、いつもの口調。

見てみると、顔色も最初より少しよくなっている

ほんの少し安心。 だけど

「でも、まだ顔色が悪いです。 それじゃあまるで」

言いかけた言葉を慌てて呑むと、婦人がすかさず「死にかけた病人の顔のよう」かい？と、僕が呑み込んだ言葉を少し意地の悪い笑い顔で言った。

「な、何言っているんですか、縁起でもない事を口にするよ、本当に起こってしまうよって伝え、知らないんですか？ 冗談言うならもう少し軽く笑えるものにして下さいよね」

僕がしたり顔で文句を言つと、婦人は表情を和らげ、僕の頬に手を添えた。

「結城彩。 存外、おまえは優しいね」

ムータン婦人の口から褒め言葉が出るなど、想像もしたことはなかった。

予測外の現象にどう対処してよいか分からず、僕は戸惑った顔をしたに違いない。

「豆鉄砲でも食らったような顔だね。 もういい、一人で歩ける」

婦人は頬から手を離すと、僕を置いていつもの房間へ歩いていった。

追いかけるように部屋の入り口まで行ったものの、そこで足が止まってしまった。

窓辺に立ち、院子にわを眺めている婦人の背が、妙に遠くに見える。

「ムータンさん」

僕の呼びかけに、婦人は振り返らずに言葉の続きを促した。

「あの あの詩。 寢室の、白牡丹の掛け軸にあった。 ムータンさん、好きなんですか？」

「あの詩、あれは　　妹妹いもうとが好きだった。　　お前は知っているのだろつ、あれが劇中のものだということは」

「《牡丹亭》ですよ。　　ちゃんと見たことはないですけど。　　ムータンさん、妹さんがいらっしやっただんですね」

考えてみれば、いつも僕が僕のことを話すばかりで、婦人から率先して何かを話すことはなかったように思う。

「血縁あねいせつとじゃないが、姐妹と呼び合う仲だった」

婦人はようやく振り返つて僕を見た。

逆光で表情はよく見えない。　　ただ、言葉には、懐かしむような響きが滲んでいる。　　見えない表情はきつと、始めて婦人を見た時と同じではないかと感じた。　　院子に佇む、遠くを見つめていた横顔。

「結城彩ゆつきさき。　　お前は作業をしに来たのだろうか？　　おしゃべりは後におし」

婦人はパチンと手を打ち合わせ、僕の目を醒まさせた。

はたと気付くと十五分、何もしないで過ぎてしまっていた。　　慌てて作業準備にかかる。　　けれど、出だしのテンポが狂ったために、「助っ人」について話すタイミングを失った。

僕が準備作業を始めると、婦人は定位置の椅子に座り、いつものように茶を淹れ始める。

今日のお茶は青茶らしい。　　とろりとした、熟した果物のような香りが漂ってくる。

いつもと同じ訪問日。

いつものように時間が過ぎて行く。

このまま五時まで作業をして、帰り際に「続きは木曜に」といつて帰る。いつもの流れ。

でも、今日は五時には帰らない。帰れない、というべきか。

「助っ人」である 百彩堂 の面々は、何故か日のほとんど沈んだ夕闇の刻に、ここへ訪れると言った。明るい内には彼らの仕事 がやり難いとの理由。

納得が出来たわけではないけれど、？特別待遇？でやってもらえらうしいので、それ以上の詮索は出来なかった。（老板てんちやうのあの笑顔に気圧されて、詮索できなかったとも言える。）

しかし今更だけれど、染みを消すためとはいえ、いまいち身元不明の人物を断りもなく邸内に招き入れるのは、家主にとってかなり迷惑な話だろ。

そも、僕は何故、依頼する気になったのだろう。 。
何にせよ、やはり先にひとこと言っておかなきゃ。

「あの」

「彩さい、先に茶を飲もう。 作業は後回しだ」

やっぱり、おかしい。

まだ何もしていないのに作業を後回しでいいなんて、これまでの婦人なら言わないのに と思いつつも、作業が後回しになれば、進まなかった分、居残る理由が出来る。

もやもや考えつついつもの椅子に座ると、白磁の茶碗に注がれた黄金色のお茶を勧められた。 本日の茶菓子は干した棗。 少し弾力のある棗の甘酸っぱさとお茶のすっきりした甘みが口中に広がる と、気持ちがふつつと和らぐ。

「素娘すねとってね」

唐突な婦人の言葉に、僕は顔を上げ目を丸くしたが、婦人は僕の表情の変化など構わずに茶の香りを楽しんでいた。僕もお茶をもう一口頂くと、言葉の続きが出るまでは香りを楽しむことにした。

「素娘は、私の妹妹の中ではいちばん大人しくて、自分の言いたいことをひとつも、自分の口では言えないような子でね。あたしは齒がゆくて、いつも素娘の代わりに素娘の言葉を口にしていた」

時間は緩やかなようで早く過ぎていく。

ムータン婦人の語る話は、まるで劇しばいの一幕のようだった。

物静かで心優しい素娘という妹の他に、婦人には多くの妹がいたのだという。

丹娘たんじょう（これがムータン婦人の本名だと初めて知った。）というに相応しく、華やかな装いを好み、勝気で男勝りだった婦人は妹達の束ね役だったという。

そんな婦人　丹娘とは反対の、物静かで姉妹の中では目立たない存在だった素娘。

社交的な姉と人見知りの妹。　水と油ほどに違いのある姉妹だったけれど、不思議に他の誰とよりも気があった。

二人はいつも一緒に行動をしていたのだと。　素娘はいつも姉の傍に寄り添い、丹娘は我が身のことのように、妹の面倒をみていた。　誰もが、二人は実の姉妹以上に強い結びつきの間だと言った。

ある日、姉妹は一人の男性と出会い、妹はその男性に恋する。

相手は、長い異国暮らしから戻ったばかりの青年で、現在婦人が暮らすこの家に一人、花を育てながら暮らしていた。

素娘は、その引つ込み思案の性格から自分の想いを男性には告げられずにいた。

見かねた丹娘は素娘の代わりに男性に妹の想いを伝え、男も妹を憎からず思っていることを知り、妹に男の気持ちを伝えた。互いの想いを知った二人は、この家で逢瀬を重ねた。

そのまま、円満な結末を迎えられるかに思われた。

しかし、素娘の親は女兒むすめの恋を許さなかった。

親は素娘に他の男との縁談を勧め、勝手に話を進めてしまう。

生来病弱だった素娘は、この一件で病床に伏し、ひと月もせず儂ぼろくなってしまうた。

そして、素娘の死を知った男性もまた、傷心に耐えきれず島を出て行った。

「男性はその後、天堂島てんかうじまには帰って来られないのですか？ ムータムータンさんも男性をご存じなんですよ。一度も、戻って来られないのですか？」

ムータン婦人は院子へ視線を向けた。

「戻らない。素娘は、戻ってくると、戻ると、ずっと信じていただろうがね。あの人が戻ってきたら、ずっとあの人に寄り添いたいと、最期まで」

生ぬるい風が、院子から吹き込んでくる。

この時期の風とは思えない、粘るような湿気を帯びた温風。なのに、ぞぞつとした寒気に襲われる。

思わず目を瞑り、自分の身体をギュツと抱きしめた。これは恐怖？

でも、何に？

「ムータン、さん……?」

恐る恐る開いた目は、次の瞬間、これ以上は開けられない、と言
うほど大きく見開くこととなる。

黒髪の女性が、いた。

「貴女は ……」

しゅらん、と鈴の音が響いた。

冷たい風が肌を撫でる。

「話の筋を、勝手に書き換えるのはよくないな 牡丹精」

いつの間にか闇が下りていた。

20 「決行日 後編」

20 「決行日 後編」

十一月二十日火曜日 雲ない夕空

南方にある天堂島てんどうじまでも、十一月末になると朝夕は肌寒さを覚えることがある。

長袖だつて着るし、厚手の上着だつて必要なことがある。雪は降らないけど、冬に当る季節はそれなりに寒い。

そして、今はその冬期に入っている。けれど、先刻まで感じなかった寒さを何故、急に感じるようになったのか。

「少々、来るのが早かったかね？」

同性である僕でも聴き惚れたくなる深みのある声で、玄青げんせい老板たかちやうは微笑みながら言った。

お馴染になつた金扇子で口元を覆っているが、衣装はいつもの紫系ではなく、黒衣の長袍ちやうぼうだつた。

長い髪は背で軽く束ねている。

その脇には、こちらはいつも通り艶やかな紅色こうしきの上衣うわぎと裙子スカートの紅鳥こうと姑娘こわい、そして少し離れた後方に、真っ白の白しろ猿さるが面倒臭めんどうくさそうに頭を掻きながら立っている。

いったい、いつのまに院子にわまで入って来たんだらう。ついさつきまでは、誰も居なかつたはずなのに。

「これは大司命殿だいしめい、お久しゅう」

僕が口を開くより早く、ムータン婦人の椅子に腰かけていた女性が言葉を発した。

ふわりと立ち上がると、女性は玄青老板達が立っている院子へ軽やかに下りた。

「そんな職に就いていたこともあったな。しかしさっさと罷免されたのはそなたも知っているだろう？ その頃はまだ、天界にあつたはずだ」

豊かな黒髪を揺らしながら、女性は艶やかな笑みを口元に浮かべる。

「噂話で聞いたよ。その過ぎた力のため天帝に忌まれ、遠ざけられた後、酔狂にも下界で商売を始めた、と。その他にも貴方については様々な噂を耳にしていた。女でも男でも手当たりしだい、見境なく手を出す花花公子だとか？」

「なに、浮名の数ではそなたに負ける。天界には、未だそなたに熱を上げておる哀れな輩やからが両手足では数え切れぬと、昨日対面したおり百花娘ひゃっかごうにょうにょうが嘆息しておつた。美貌の花仙のおかげで、未だ苦情が絶えぬとな」

老板しやうばんははらりと扇子を広げると、大きく揺り動かした後、再び口元を覆った。その様子を見ていた外見年齢三十歳にも満たない女性も、細くしなやかな指で領巾ひれの端をつまみ、口元を隠した。

見ているだけなら美男美女のちよつと色めいたやり取り（劇上の）
なんだけど、観劇に来た覚えはない。

これは現在進行形の、現実の世界の話で、僕は話の中の登場人物

の一人　のはず。

なのに、同じ舞台の出演者がなんの話をしているのか、さっぱり解らない。　というより付いていけない。

二人とも笑顔で話しているのにナニ、このざらついた冷たい会話。

「やっぱりお知り合いだったんですか　とその前に、あの、貴女はひょっとして、もしかして、ムータンさん、なんです……か？」

改めて、婦人と思われる女性の貌を見る。

面影はある。　けれど間違っても「婆さん」などとは呼べない、

まだ若い女性。

まなしり 眦の少し上がった、強い意志を感じさせる眼差し。　白磁のような滑らかな肌も艶やかな黒髪も、つい先ほどまで一緒にお茶を飲んでいたムータン婦人のそれとは違う。

衣服は、くすんだ赤から艶やかな紅になっている。

「おまえの友人がこの場にいたら、さぞや狂喜したろうにな　結ゆ城彩つぎさい」

声も若い。　けれど、よくよく聞けばムータン婦人のもの。　問いかけにも肯定的内容が返ってきたことから、この女性はムータン婦人だと認識せざるを得ない。

若かりし頃はさぞ美人だったろうとは思っていたけれど、想像以上。

「　え……っと、あのこれ、どういう仕組みになって……んでしよう？」

眩暈がする。

「付いていけない」なんて段じゃない。

なんとなくの覚悟はしていたけれど、完全にオカルト。それともファンタジー？

なんにしる、秀が好む世界に突入している。

突然若返った婦人。

？大司命？（人間の命数を司る天の役人だったと記憶）？天帝？
？下界？に？天界？、？百花娘娘？（数多い花仙の長だったよう
な）？

どれも空想世界の読み物に出てくる名詞じゃないか。

先日から、（僕にとっては）不可解な現象に何度か出くわしている
ので、多少の覚悟はしていたつもりだけど、まだまだ甘かった。

なんとか自分が得て来た知識から、理解への糸口を見つけようと
するけれど、思考回路はパンク寸前、現状把握が出来ず、脳味噌を
ぐるぐるとかき混ぜられている気分。 気持ち悪い……。

いつそ、目の前の人々が共謀して僕を騙している、と言われた方
がマシかも

「これ、現実なんですか……ね？」

「残念ながら、誰の夢の中でもないね」

玄青老板がにっこりと応えた。

放心状態になりつつあった僕の耳元で、しゃん、と涼やかな音が
響く。同時に、僕の右手をひんやりとした小さな手が包みこむ。

はっとして視線を落とすと、目の前に紅鳥姑娘が立っていて、僕
の手を握り心配げに見上げていた。

言葉のない姑娘は、首を傾げ、僕の手を少し持ち上げた。再び
しゃらんと心地の良い音が響く。

姑娘の手と清音に包まれるうち、ごちゃごちゃに絡まっていた頭
の中が、少しずつ解け活動を開始する。

ほっと小さく息を吐き、気分を落ち着ける。

「姑娘、ありがとう」

いまいちぎこちない笑顔で礼を言つと、姑娘はほころぶ様な笑顔を見せてくれた。

「少し、落ち着いたかね？」

僕の混乱と動揺が虚しくなるような微笑で、玄青老板はゆつたりと言つた。

「動揺の原因の一人はあなたです」と言いたいのを我慢して、深呼吸。 落ち着こう。

「ムータンさん。 それに玄青老板。 あなた方はいったい何、なんでしょうか？ 先程の会話から察するに、お二人は知人で、しかも、こことは違う世界からいらしている…… ように解釈されたのですが」

少々上ずつた声になつたのは御愛嬌。

腹に力を入れ、両足を肩幅に開き足を踏ん張ると、婦人、それから老板の顔を順に、ゆっくりと見た。

「意外と、理解が早かつたね。 もっとも、この婦人とは知人という仲ではないな。 互いの存在を知っていた、という程度だ。 そうだろうか？」

「そういうことだ、結城彩。 あたしやこんな男とは知り合いになりたくはない」

両者、極上の笑顔で冷たい関係な回答。

「はあ。 それである、お二人の正体は、いつたい」

少し離れた位置に立って扇子を揺らめかせていた玄青老板は、パチンと扇子を畳むと、房間へやの入り口に立ったままの僕の前へ、ゆつたりと歩んできた。

色んな意味で、緊張してしまう。

「いま私たちがいるこの世界 君が？現実？と認識している世界を、私達の世界では？下界？または？人界？と呼んでいて、それに對し私達の世界を？天界？と呼んでいるのだが、聞いたことはあるかね？」

「はあ……まあ、物語上の空想世界としてなら」

老板は愉快そうに目を細め、扇子の先でムータン婦人、そして自身を順番に指示さしめした。

「その空想上の世界が実際に存在するとして、その住人の二人が、私とあの婦人だと思ってもらえばいい。？天界？？人界？という大仰だが、ざっくりと言ってしまえば、お隣さんで、人界で言う？外国人？と同じような存在だと思えばいいのではないかな？」

いや、それはかなり違うと思うのだけれど、こうして会話をしていてもなんの違和感もないのだから、そう、考えてもいいのか？

僕の心中の一人問答を知ってか、老板はふふと笑い、半分開いた扇子で口元を押さえた。

「まあ、いきなりこんな話を信じろというのは無理だろうし、最終的に信じる信じないは結城彩君、君の自由だ。 補足で言えば、私

はかつて天界で官吏をしていたのだが、クビになってね、今は人界で自由を謳歌している。あの御婦人は牡丹の花の精で、天界に籍を置く女仙だ。聞こえたと思うけれど、彼女は大した人気者だったのだよ。もっとも今は、天界から逃走した罪人 だけれどね」

「逃走した 罪人？」

「天帝の後宮から妾妃の一人を連れ出して人界へ逃げた。追手をかけられる程ではないが、大胆だろう？」

老板は横目でムータン婦人を見遣った。

少し頭が働くようになったところで、理解を超えた話を咀嚼そしゃくして吸収するには時間を要する。ただ、この話の流れで行くと。まだ僕の右手を握ってくれている紅鳥姑娘へ視線を向ける。

「ああ、紅鳥は君と同じ人間だよ。かなり昔に？鬼ゆうれい？にはなっているがね」

さらりと老板は告げた。

鬼 つまりは、死者？

確かに手は少し冷たいけれど、こんなにしっかりとした感触があるし、僕と大差ない、まだどこか幼さを残す少女なのに。動揺してしまった僕の顔を見上げ、紅鳥姑娘はにこりと微笑み、そつと手を離れた。

改めて僕の正面に立ち、少し膝を折って挨拶をすると、軽やかに白猿の近くまで下がっていった。

しゅらんと鈴の音が、すっかり暗くなった院子に響く。

「それから白猿君は、私とは少し違う世界から来たお客んだ。まあ、君にとっては私も彼も同じような存在だろう」

こちらの人外は、意味なく理由なく納得。

「どうせ消しちゃうことを説明する必要はねえだろ？ それよかどうするんだよ？ さっさと 仕事 の指示を下せよ。 とつとと済ませて俺は帰りてえんだ」

不機嫌な声を上げた白獺の手に、銀の小刀が光っているのを確認。ひよつとして彼は、いつでも何処でも小刀を携行しているのか？ それにしても、「消してちまうこと」って ？

「白獺君は相変わらず気が短いね。 まあ、そうだな 」

玄青老板は院子へ下りると、婦人の横を通り抜け、正面に植わっている白牡丹の前へ真っ直ぐ行き、手を伸ばした。

「 触らないでくれっ 」

悲鳴に近い叫びをあげた婦人は、肩から掛けていた領巾を老板へ向かい投げた。

柔らかいはずの領巾は鞭のように唸り飛び、伸ばされた老板の腕に幾重にも巻きつき、牡丹に触れかけた老板の手を引き戻した。

「麗しき姉妹愛 といったところかい？」

老板が軽く腕を払うと、巻き付いていた領巾はふうつと消えた。大がかりな手品を見ているみたいな光景に呆然としてみると、短い呻き声が上がった。

視線を手前に戻すと、婦人が白獺に後ろ手に締めあげられていた。顔は苦痛に歪んでいる。

「な っ」

駆けだそうとすると、ほんの少し前まで白牡丹の傍にいた玄青老板が、瞬間移動でもしたかのように忽然と現れ、扇子の先を付きつけ、僕の行動を制した。

「な、何を」

「君はまだ院子へ出ない方がいい。先日のようには、なりたくないだろう？」

老板の言葉で行動を思いとどまった僕を、白獏は鼻で嗤^{わら}った。

「そうそう、依頼主様はそこで大人しく、黙って見てればいいんだよ」

鋭利な銀白色の目で僕を一瞥すると、白獏は腕を更に締めあげ、空いた左手で婦人の頭部を乱暴に掴んだ。

切れ長の瞳を閉じ、再び開くと、白獏は薄笑いを浮かべ、ムータン婦人の耳元でなにかを囁いた。

「お、お断りだ、お放しっ」

婦人は白獏から逃れようと身体を必死に掬^よじらせるが、体格差があり過ぎて逃れることが出来ないようだった。

未だ僕を制している老板を睨みあげる。

「こんなことを依頼した覚えは」

抗議しようとする僕を見下ろし「もう少し待ちなさい」と言つと、
老板は視線を婦人へ戻した。

「この家の主は、既に死んだ人間の男であろう？」

玄青老板の顔は見えなかったが、声に笑いはなかった。

「死んだなんて、どうして老板がそんなことを断言できるんです？
島の外でまだ元気でおられるかもしれないじゃないですか？」

「普通に考えて、二百年以上生きられる人間はいないだろう？」

「に、二百年？」

「それに、君には見えないだろうが、あの白牡丹の下には、男の身
体が眠っている。その魂もまた、この地を離れられず彷徨ってい
る」

老板が扇子で指示した先に視線を向けたが、僕には白牡丹しか見
えない。

ただ、ある変化に気付く。

「花が」

白牡丹を始めとする院子の花々が、少しずつ萎れてきている。
早いものでは散り始めたものもある。

「この院子の中は、牡丹精のかけた術で時間が止められていたのだ
が、先程、その術を消してしまったのでね。ようやく術の効果が
薄れ、時間が正しく流れ始めたんだよ」

意味が分からない。

僕の幾度目かの困惑顔を見て、老板は苦笑気味の表情を向けた。

「君も不審に思っていただろう？ 季節の違う花が同時に咲いていたこと、花がいつまでも枯れずに咲き続けていたことを。全ては牡丹精がかけた術の結果。時間が止まっている限り、院子の花は枯れることなく、半永久的に咲き続けることができる。いや、咲き続けさせられる、と言うべきかな？」

いつまでも花が枯れずに咲いていた理由が、未消化ながらも、なんとなくは分かった。

でも、何故院子だけ、そんなことをする必要があったんだろう？

「ただ、この術を持続させるには、結構な力を要してね。本来、そうそう年老いない花仙が老いた姿になっていたのは、この術に力を費やしていたが故。術が破られたいま、術に力を殺ぐ必要がなくなつた牡丹精は見ての通り、本来の姿に戻つた」

老板はいつたん言葉を切り「理解できそうかね？」と扇子を広げながら訊いてきた。

僕は素直に「一割くらいしか」と答える。

「一気に詰め込んだところで理解出来るものでもないだろうから、程々に聞き流しておけばいいよ。さて。ではまず、君の依頼を片付けよう」

僕が場所を示さなくても、玄青老板はブルーシートに隠れた染みの場所を迷いなく探し当てた。

老板がシートを右手で軽く引つ張つた途端、シートはサアツと消

えて無くなった。　　いったいどんな仕掛けになっているのか、考えるだけ無駄なのだろう、きつと。

露わになった染みを見つめた老板は、「なるほど」と呟くと、扇子を腰帯に挟み、右手を染みの上に置いた。一寸の間をおいて、左から右へ、拭うようにゆっくりと動かし始める。

手の動きに合わせ、先日 試供品 で拭った時と同じ絶叫のような悲鳴が響く。　　改めて聞くと、この声は女性の 哭声？　　なんにしる、とても聞いてはられない。

ふつと気になって、院子のムータン婦人を見返ると、白猿に押さえられたまま、頭を落とし肩を震わせていた。

視線を壁に戻すと、染みはすっかり消えて無くなっていた。

「消えた」

「目に見える染みだけ、だがね」

「？目に見える染みだけ??」

オウム返しの質問に、老板は壁から僕へ視線を戻した。

「見た目にはきれいになっただろう？　　しかし、君は知っているね？　　ここに染みがあったことを」

帯に挟んでいた扇子を抜き取ると、老板はムータン婦人を示した。

「そしてあの牡丹精も知っている。　　覚えている、と言うべきか」

この言葉に、婦人は僅かに反応した。

「かなり以前の話だが、　　百彩堂^{ひゃくさいどう}へ　　消しものを求めに来た客

人が、？新品の紙と同じに、紙を真白に、きれいに戻せる優れた消しものはないか？と問うてきてね。私は、新しい紙の購入をその客人に奨めた」

唐突に 店 の話を出され、ちよつと拍子抜け。

あの店に客が来ること、あつたんだ。

「 そういう 消しもの が、なかつたからですか？」

怪訝そうに訊ねた僕に、老板は「それもあるね」と言つて小さく笑つた。

「一度何かを書いた紙は、どんなにきれいに消したところで、使用する前の真つ更に戻るわけではないだろう？ 見た目には限りなく完全に消せていたとしても、書いた、という事実は残る。少なくとも書いた本人には、その紙が新しい紙ではない、ということが分つている。 違つかい？」

玄青老板の言わんとすることを解りかねて、僕は沈黙して聞くことができな

「単純に染みを消したい、という目的であればこれで十分だろう。だが、このままならばいずれまた、染みは現れるだろう」

「また現れる？」

「この染み、君が拭き取る作業をしていて急に濃く、大きくなったのだろう？」

「 はい。 拭き取っていたら急に」

「もともとの染みは、ほとんど消えていたんだよ、最初から。その牡丹精がそれこそ術で、必死に消しただろうからね、記憶を覆い隠すために」

「消えていた？　？記憶を覆い隠す？とは、どういう意味ですか？」

「室内にあんな大きな染みがあれば、何もせずに放っておく者なんて、普通いないだろう？　牡丹精も当然、消した。しかし消したところで記憶は消せない。その記憶を封じ込めようと壁に色を塗った。幾度も幾度も。しかし皮肉にも、作業を完遂しようとする君の直向きな思いが、牡丹精の術を却って、完全に消してしまった。結果、牡丹精が？消したい？と思っていた記憶は鮮やかに甦り、染みは壁へ投影された」

理解できない。

あの鮮明な染みが記憶の投影？

じゃあもしかして、あの悲鳴も、婦人の記憶の中の音　？

老板はゆつたりと、白獺が押さえているムータン婦人の傍へ歩んでいく。

その後が続こうとしたが、ふつと、倒れた時の記憶が甦り、院子へ出るのを躊躇する。

「もう大丈夫だよ。君が以前この院子で倒れたのは、時間が止まっていたため。生きている者の時間が止まるということは、死ぬに等しい状態だからね。術の影響もほとんど消えたから、今の院子なら君にも無害だ」

老板は振り返って僕に言葉をかけた後、おもむろに、俯いたままの婦人の顔を扇子の先で上げさせた。

婦人の目は、開いているのに何も見ていないように虚ろだった。

「ずいぶん苦勞して、この染みを覆い隠そうとしてきたようだが、意味は、なかったのだろうか？ 忘れずして忘れようとしても、そのなれの裡うちにある想いが、それを赦さなかった」

「 どんなに色を厚く塗り重ねようと、何度塗り直そうと、染みは、ずっと……」

詰まったように言葉を止めた婦人は、一度瞳を伏せ、開いた。

開かれた瞳は先程の虚ろさはなかったが、代わりに涙が滲んでいた。

「消しても、忘れようとしても、忘れられるわけは なかったのに……」

「白獺」

玄青老板の声に応じ、白獺は婦人を離した。

自由になった婦人は、覚束ない足取りで、すっかり萎れてしまった白牡丹の傍らまで行くと、がくりと地に崩れた。

「ムータンさん！」

今度は制止されなかったので、僕は婦人の横へ駆け寄り助け起こすことが出来た。

婦人の身体は、力のない僕でも簡単に抱き上げられるほど軽かった。

僕に支えられ座った婦人は、真横にある萎れた白牡丹へ手を伸ばした。

「素娘そじょう

素娘」

白牡丹に呼びかけながら、婦人は静かに涙を流した。

21 「白牡丹の話」

21 「白牡丹の話」

十一月二十日火曜日 澄んだ月夜

萎れた白牡丹に、ムータン婦人がそつと触れると、はらはらと、数枚の花片はなびらが散った。

「この白牡丹が、素娘そじょうさん？」

「彩さい。あたしがおまえに聞かせた素娘の話には、偽りが混ざっている」

ムータン婦人は散った花片を愛おしむように拾い上げると、手のひらに乗せ、視線をその上に置いた。

「妹妹 素娘とあの人が想い合う仲だったこと、そしてその二人の仲が許されなかったことは本当だ。ただ、許さなかったのは親などではない 天帝だ」

「天帝？ それは天界で一番偉い神様、ですよね？」

先に玄青げんせい老板たかやうが言っていた、婦人が「罪人」だと言う言葉を思い出した。

天帝の後宮から、妾妃を一人連れ出して逃げた罪人、と言っていた。

「素娘は、あたしと同じ牡丹精だ。　白牡丹の精。　雪のように白
い、それは美しい。」

その美しさは天帝の耳にも届き　天帝の後宮に入ることが決ま
った。　けれどそれは、あの人と出会った後に決まったことだった。
素娘は泣いて拒もうとした。

だが、花仙ごときが天帝の命に逆らえるはずもなかった。　素娘
はあの人に別れを告げることも出来ず、後宮へ入った」

「その男性は、素娘さんが花仙だと言うことを、知っていたのです
か？」

ムータン婦人は少しの間をおいて、ゆっくり、首を横に振った。

「あの人は、何も知らない。　あたし達のことは、自分と同じ人間
だと思っていた。」

あの人は、子供の時分から学問のため、島の外へ出ていた。

だが、渡航先で胸を患ったあの人は、故郷であるこの島へ療養に
戻ってきた。

長い療養生活を送るうち、何もせずにいることに退屈を感じたあ
の人は、花作りを始めたかと思いたったらしくてね。

もともと、花好きだったのだろう。

体調の良い日に少しずつ、花のなかつたこの院子に花木を植えて
植えた花の中には、牡丹もあつた。

ちょうど同じ頃、あたしと妹妹いもつとは人界に遊びに来ていてね。

牡丹を育てるには不向きな土地で、無駄な苦勞している人間がい
ると噂で聞いて、単純な好奇心で見に来たんだよ。

あの人は花に話しかけながら、懸命に世話をしていたが、なか
か上手くはいかなかったようだね。

慣れない土仕事で泥にまみれ、くたびれているあの人に素娘は同

情したのかもしれない。

度々この家を訪れるようになって、終には、あの人の花作りに協力を始めた。

そんな素娘に付き添って、あたしもこの家を訪れた。花作りに手こそ貸さなかったが、素娘の姐姐として、いつも一緒にいたよ。

花を愛する人と花仙。惹かれあうのは自然なことだった。

二人は似合いだった。

内気なところも二人は似ていてね、なかなか互いの気持ちを言い出せなかった。

だけど、あたしの世話焼きで二人は相思う仲となった。

それからあたしは、ここへは訪れなくなった。二人の邪魔なんかしたくないからね。

そんな矢先だった。

妹妹の後宮入りの話が持ち上がったのは――

手のひらの花びらを土の上へ置く婦人を支えながら、僕は一瞬迷った後、訊いた。

「素娘さんのこと。男性には、伝えなかったんですか？」

「伝えようと、あたしはこの家を訪れた。

伝える、つもりだった。

だがあの人は胸の病が再び悪化して、とても弱っていた。そんなあの人に、素娘は二度と来られないとは、伝えられなかった。

妹妹が来られないのは、老いた親の看病のためだと言いついて、あたしは毎日、この家を訪れるようになった。妹妹の代わりに、床から起きられないあの人の代わりに、院子の花や木の世話をするために。

あの人は、素娘が来られない理由は他にあるのではないかと、薄々は感じていたようだった。

だが決して、あたしに問いただすようなことはしなかった。

毎日訪れ院子の手入れをする私に、あの人は笑顔で感謝を述べ、そして、この院子の管理をあたしに頼んだ。

自分が元気になって、素娘も戻ってきたら？三人でまた一緒に花を作りましょう？と、空の白雲を眺めながら言っていた。

だが、それから幾日か経ったあの日、あの人は血を吐いて 逝ってしまった」

「もしかしてあの染みは ……」

「あの人の血」

婦人の声はかすれていて、ひとり言のようにぼつんとした言葉だった。

黒にほんの少し青を混ぜたような空へ、婦人は目を向けた。

心もとなげに輝いている小さな星よりも遙か先を見るような、遠い目で。

「あの人は死んだら、この院子に埋めて欲しいと言った。素娘と共に作ったこの院子にわで眠りたいと。あたしはその言葉に従った。

それから、あたしは天界へ戻った。

あの人は最期まで素娘に会いたがっていた。

その想いだけでも、素娘に伝えたかった。

だが同じ頃、素娘もまた後宮で床に伏していた。

元より丈夫な子ではなかった。

あの人と割かれるように別れさせられたこと、慣れない後宮での

暮らしが、妹妹の身体には負担だったのかもしれない。

なんとか伝手^{つて}を使って妹妹に会えた時、妹妹はもう長くないと、あたしは確信した。

あのまま後宮で枯れさせるくらいならば、あたしは、あの人の傍で最期を迎えさせてやりたいと思った。

素娘はすっかり弱っていたが、あの人に会いたい一心でここまで何とかたどり着いた。

そんな素娘にも、あたしは真実を　あの人の死を伝えることは、出来なかった。

あの人は身体が良くなって、少しの間島を出ているが、いずれは戻ると　偽りの話をした。

素娘はあたしの言葉を信じて、あの人が帰る日を、あたしと一緒にこの場所で待つと言った。

けれど、もう人の姿を保っていることは出来なくてね、元の姿に白牡丹に戻ってしまった　」

萎れた白牡丹に、婦人は視線を戻した。

青白い婦人の横顔は、初めて院子で見かけた横顔以上に寂し気で見ている僕まで切ない気持ちにさせる。

「院子の時間を止めたのは、何故ですか？」

「枯れることなく咲いていられば……素娘はずっと、あの人と一緒に居られると思った。あの人の傍で咲くことが出来れば、人の姿でなくとも、妹妹にとって　」

「　綺麗事に、してんじゃねえよ」

突然、白猿^{しろいぼ}が口を挿んだ。

「てめえもその男に惚れていたんだろうが。可愛い妹とその男が惹かれあつていくのが、心の底では面白くなかつたんだろうが。その二人が、死んだ後にも一緒になるのが嫌で、死んだ男の上に半死の妹を死なせないまま、時間を止めて咲かせ続けていたんだろうが。残酷なことをするよな、ねえさん姐姐は」

白獺の言葉に、ムータン婦人は顔を上げ唇を震わせたが、言葉は出なかつた。

「ムータンさんに失礼じゃないかっ」

「うるせえっ。俺は見たままを言つたまでだよ」

「？見る？つて何をだよっ」

思わず熱くなつた僕の肩に、老板が手を置いた。

「白獺は、そういうた力の持ち主なんだよ」

「？？そういうた力？つてなんですか？？」

語気の荒くなつた僕をなだめるように、老板はぽんと肩を軽く叩いた。

「記憶を見ること。触れた相手の見ている夢や心の奥に秘めている想いを、自分の体験していることのように、見る」

「そんなこと ……」

呆氣にとられた僕の肩をいま一回叩くと、老板は扇子を広げ口元を覆った。

「君には、信じ難いだろうがね。先程白獭は牡丹精の過去を見たのだよ。言葉が悪いが、彼は見たままを口にしたただけだろう。まあ、それで事の全てを知ることが出来るとは、言わないがね」

信じられるものか。もし、白獭の言った通りだつとしても

「ええ、僕には信じられませんが理解できません。理解できませんし、もし真実だつたとしても、そんな心の中を覗き見るような行為、非礼じゃ」

言葉を言い終わらないうちに、頬のすぐ横を光る何かが走った。

それが何かは確認していないけれど、冷や汗が流れた。

白獭を見ると、手には小刀が光っている。

「なんでもてめえだけの物差しで決めんじゃねえよ。俺にとつてはな、なにも非礼なんかじゃねえんだ。俺の世界じゃそうやって相手の心の裡なかを覗き、それを喰って生きていくのが普通だつたんだよ。俺を非難するのは勝手だがな、その牡丹精が男や妹に取つた行為はどうなんだ？ 真実を告げずに欺き続けるのは許されることなのか？ 死にかける妹を死なせず咲かせ続けるのは正しいことなのか？ それにお前、お前のやったことはどうなんだ？ その牡丹精の意向を訊かずに けしもの屋 に依頼した。それはお前の自己満足のためじゃねえのか？ お前が けしもの屋 に来て話を切り出さなけりゃ、いまのこの状況はねえんだよ。それとも何か？ 真相を知らなかった？ から仕方ない、で済まされるのか？」

白獭の言っていることは飛躍しているし、あまりにも乱暴だと思

う。

けれどその言葉は、僕の胸をえぐる。

「そ、そんな話をしてんじゃないだろ！　ただ、もう少しムータンさんの気持ちを」

「？　気持ちを考えて？　やれってか？　は、それなら俺は考えてやったぜ？　俺がそいつの記憶を喰えばそいつは長年抱えていた？　自責？　から逃れられるんだからな。　だがせっかく喰ってやるうってのに、そいつは断った」

白獭は顎でムータン婦人を指した。

「　僕は……」

続ける言葉を見つけれられず、僕も俯いてべったりと座りこんだ。さっき白獭に言われた言葉が、耳の奥で何度も響く。

彼が言つとおりだ。　僕が軽率に行動したために、こんな事態になっちゃったのだ。

白獭のことなんか、言えない。

「　結城彩」

冷たい手が、頬に触れた。

のろりと顔を上げると、婦人は首を横に振って見せた。

「もし、おまえが責任を感じているのなら、そんな必要はないんだよ。　あたしは、玄青殿げんせいが来るだろうことを、知っていた」

「　知っていた……？」

ムータン婦人の顔を見つめた。婦人も僕の目をしっかりと見返した。

「天界の者には、天界の者にしか分からない匂いがある。先週の土曜、おまえが訪問した時、私はおまえから天界の匂いを感じた」

玄青老板を振り返り見ると、老板も肯定の仕草をして見せた。

脱力した。何も知らず、気付かずにいたのは、本当に僕だけだったということ。

「あたしは 待っていたのかも知れない。こんな日が来ることを」

「こんな日？」

「自分では、気付いていなかった いや、気付きたくなかったのかもしれないね」

ムータン婦人はそっと、枯れた花に触れた。

「その白い男が、言った通りだ。あたしはあの人を 愛していた。だが、素娘も同じに愛おしい、大切な妹妹だったんだよ。どちらも、あたしにとっては大切な存在だった。だから、あの人 が逝き、素娘が牡丹の姿に戻り、この院子の時間を止めたあたしは、あの人に託されたこの院子を、素娘を守っていくのが己の務めだと心に決めた。

だが、月日が過ぎるほどに、あたしの気持ちは沈んでいった。

石を裡に抱えているように、重く 苦しくてね。

二人に、真実を話さなかったこと。

何故あの時、真実を話さなかったのか、と、自分を問いたです日々が続いた。

あの人の血の跡が、物言わぬ花となった素娘が、あたしを責めているように思えて……。いつそ、二人が現れて、あたしを罵ってくれば、どんなに気が楽だろうと、思ったりもした」

「そんなことはない」と言おうとして、僕は言葉を呑み込んだ。婦人は僕へ視線を戻すと、僅かに微笑んで見せた。

「それなのに、あたしは術を解くことは出来なかった。術を解けば、素娘は枯れて死ぬ。だが、そうすれば素娘とあの人の魂は天へ昇り、いずれ二人は生まれ変わることができる。それを知りながら、それでも、どうしても、出来なかった」

婦人は僕の右手を取ると、労わるように優しく包んだ。僕はそれを黙って受け入れた。

「彩。この数カ月、よくあたしのわがままに付き合ってくれた。必死に、壁の染みを消そうとしてくれた。必要のない苦労までして、消そうと、頑張ってくれたね」

「そんなこと……。だって、気付いてたでしょう？僕は 最初は、嫌々だった。ただ自分の意地で、やっていただけで……」

「きっかけはどうであれ、おまえはあたしの願いを叶えようと、頑張ってくれたろう？おまえがあたしのために懸命になっていったことは、あたしが一番解っているつもりだ」

「だったら。素娘さんも男性も、ムータンさんにきくと、同じ思いを抱いていると……。思います」

今度は言葉を呑み込まずに言った。本当にそう思ったから。婦人は少し瞳を大きくして、しばらくじっと、僕の顔を見つめていた。

「口に出して言うのは癪だがね、彩。おまえがおまえのことを、家族のことを話してくれるのを聴くことは、あたしの楽しみだった。おまえの話聴く間、あたしもおまえの家族の中に入れたような気になってね。嬉しかった」

まるで、別れを告げるような婦人の言葉に、僕はとっさに何を言っただけ返すことも出来ず固まってしまった。

婦人はふわりと微笑み僕の手を離すと、横に立って見ていた老板を見上げた。

「玄青殿には、あの人の魂が見えるのか？」

「素娘の隣に」

「素娘とあの人の魂を、共に、迷うことなく天へ送ることは、できませんでしょうか？」

老板は扇子を畳むと紅鳥姑娘を見遣った。

姑娘はこくりと頷くと、何故か僕の前に膝をついて、胸ポケットの辺りを指差した。

「彩君。君、その内側に何かを入れているだろうか？」

一瞬何を言っているのか分からなかったが、すぐに耳栓と霊符のことを思い出し、内ポケットから出した。すると紅鳥姑娘は耳栓

をとって、耳に入れるような仕草をして見せた。

「?歌う?から、君には耳栓をしていて欲しい、と言っているんだよ」

「歌う? 紅鳥姑娘は喋れないんじゃない?」

「死者にしか聴こえない声を、紅鳥は持っていてね。紅鳥の歌は、想いを遺して人界を離れられない魂や、彷徨い続けている魂を、浄め、天へ導くことができるのだよ。基本、生きている人間には聴こえないのだけれど、時々聴こえてしまう者がいてね」

「聴こえてしまう?」

「天へ昇ることになる」

つまり死ぬ と。

「念のためだよ。あとその霊符もしっかり握っておくといい。離魂を防ぐ護符だ」

それ以上余計な詮索はやめた。

素直に耳栓をして霊符を握ると、紅鳥姑娘はにこりと微笑んで、萎れた白牡丹に視線を移した。

姑娘の桜桃色の唇が緩やかに開く。

大井の渡してくれた耳栓効果か、単に僕は聴こえない人間なのか、姑娘の歌は聴こえない。

どんな歌声なのか、どんな歌詞なのか、まったく分からない。だけど、目の前で起こっている現象は分かる。

紅鳥姑娘が歌い始めると、萎れていた白牡丹は淡い光を帯び、術

が消える前よりも美しい、大きな花を咲かせた。

少しすると、白牡丹は白い衣に身を包んだ、見たこともない女性の姿に変わった。

優しい顔立ちの、儂げな品のある女性。

それが素娘さんだということはずぐに分かった。

素娘さんが右手を差し伸べると、そちら側に男性の姿が現れた。

二人は互いを見つめた後、ムータン婦人に微笑み、何か言葉をかけたようだった。

そして、二人の姿は白い光に包まれ、散るように消えて行った。

光の消えた後には、すっかり枯れてしまった牡丹の株が残されていた。

「さて」

玄青老板は地に座り込んだままのムータン婦人の正面に立って、扇子を畳んだ。

「牡丹精　丹娘。　そなたは天界へ戻れば罪人。　無罪放免と言

うわけにはいかぬだろうよ」

「承知している」

「私は、百花娘娘よりそなたの処遇を一任されているのだが、それを受け入れるか？」

ムータン婦人は、少し驚いた目で老板を見上げ、そして微笑んだ。

「望むところだ」

玄青老板も微笑み、扇子を腰帯に挿すと、ムータン婦人の額に右手を置いた。

「なんだか、嫌な予感。」

「老板、いったい何を？」

老板は、ムータン婦人の上に視線を置いたまま僕を見ようとはしない。

老板の右手の内から、淡い光が漏れ始める。

「これは君の依頼ではない別件だ。私は、この牡丹精を消す依頼を受けていてね。人界で時間を止め、死ぬはずのものを生かし続けた行為は、天界では結構な罪なのだよ」

「け、消すって」

「これは私の特技。私が直接触れて？不要？^{いらない}と思つたもの、？要？^{ほしい}と思つたもの。それらは全て消えてなくなる。どんな大きなものでも、跡形もなく」

さっき、ブルーシートが消えたのは。

次の行動を具体的に考えるより先に身体が動く。

老板の右腕にしがみ付き、黒の瞳を真っ直ぐに見上げた。

「待って下さい。ムータン婦人は僕の奉仕活動の訪問先で、僕の学校の生徒だけでなく、天涯に暮らす多くの人々が存在を知っているんですよ？ そんな人が急に消えたら、確実に騒ぎになりますよ？ 失踪人として届け出られたら広域に伝達されます。何より、僕が知っているんですよ、すべてを」

少し驚いた顔で僕を見た老板は、すぐにいつもの微笑を取り戻す。口元は笑っているけど、底のない闇のような黒の瞳は、冷たく僕を見下ろしている。

「彩、あたしのことならもう」

「ムータンさんがよくても、僕がよくありません！」

少し不安げな声で婦人は僕を止めようとしたが、僕は老板を見上げ続けた。

「心配はない。何者の記憶からも記録からも、この花仙を消すからね。残るのは廃墟となった家と院子くらいだ。なんならそれらも全て、消してしまってもいい」

またもさらりと、玄青老板は言ったのけた。

白獺がこの老板を怖れるわけが、少しわかった気がする。だけど、ここでは引き下がれない。

「でもここは人界です！人間の常識が、優先されるべきではないのですか？老板達は天界からこの人界へ移り住んでいるのですよね？ならば、現在暮らしている世界の考え方を少しは鑑みていいんじゃないでしょうか？郷に入れば郷に従え？といえますし？窮鳥懐（じゆうひやうゑい）に入れば獵師も殺さず？っていうじゃないですか！それに老板は白獺に？この世界の道義と礼節を学ぶべき？と言われていましたよね？それを彼に諭すならば、まずは雇用主である老板が範を垂れるべきではないのですか？」

自分でも何を言っているのか分からない。

半ばやけくそだし、無我夢中。

僕の短い物差しで測った、認識の浅い発言かもしれないし自己中心的な行動かもしれない。

だけど、僕の感情に素直に従った行動。

とにかく今は、この右手を婦人から離すことが優先事項。

「は……」

「は？」

何かが、老板のツポにはまったらしかった。

老板は婦人の額から手を離し大笑いを始めた。右腕にしがみ付いたままの僕には老板の笑いがもろに体感される。僕だけでなく、婦人も、白猿と紅鳥姑娘も目を丸くしてその様子を見ていた。

「結城彩。君は、予想していた以上に面白い。確かに、白猿君にばかりは言えないかもしれないな」

そう言って、老板は僕にまた究極の笑みを見せた後、ムータン婦人の額に手を置いた。

「だが 何も、しないわけにはいかないのだよ」

老板の言葉と共に、婦人の身体が白く光を放った。

光に包まれ、婦人の姿は見えなくなった。

22 「墓参り」

22 「墓参り」

今年に戻り・

六月二十二日金曜日 気持ちよい晴れ

白い裙子スカートに青のシャツシャツに着替えた紅鳥ことりとケーブル列車に乗ったのは四時二五分。

初めて列車に乗って天街へ行く（らしい）紅鳥ははしゃぎっぱなしで、車内には鈴のような清音が響き続けた。そんなわけで、車中では乗り合わせた客の注目の的となった。

もっとも、音がしなくても、紅鳥の服装は時代を超越しているので人目を惹く。

だけど、それが紅鳥には似合っているし、コスプレして歩く若者は昨今珍しくもないので、せいぜい「古装劇じたいげきの扮装をしている女の子」と見られる程度で済むだろう。

ちなみに、奉公し始めてから知ったことなのだけど、紅鳥ことりと白猿しろほくの装束は全てお師匠が選んで「無理矢理着させている」（白猿談）らしい。髪を結うのもお師匠の愛好事。

白猿がお師匠を「倒錯爺たつやくジヤイ」と呼ぶのは、この辺りに所以ゆえんがあるように思う。

六月も後半になると、この時間でも陽の光はまぶしくて、ムータン婦人宅の西海岸通り、独橋路四番地の院子にわは、溢れるほどの光で緑が輝いて見える。

婆さんがこの院子で息を引き取ったのは、先月四日のこと。

遺言に従い、婆さんの墓は院子の中に造った。そう。素娘そじょうさんと「あの人」の隣。

茂った草の間の細道を抜けて墓前へいくと、紙で作られた紅と白の牡丹の花が、無造作に置かれているのが目に入った。

「誰が来たんだろ。」

あ……」

夜行性の彼が、昼間行動していた理由がようやく分かった。

彼が覚えていて、自分が忘れかけていたことを恥じ入りつつも、なんだか嬉しい。

墓石などない土を盛っただけの墓に、持ってきた花や菓子を供えると、僕と紅鳥は並んで手を合わせた。

*

昨年十一月二十日の夜。

お師匠 玄青げんせい老板は、ムータンさんを消さなかった。

消したのは、ムータンさんの花仙としての力と、天籍 簡単に言えば、人間にして、天界追放の刑、に処したのだ。

花仙としての力を失ったムータンさんは、元の老婦人の姿に戻っていた。

いや。もしかしたら、あの晩以前の姿より老けていたかもしれない。

老板は、「余生は墓守でもして過ごせばいい」と言って、ムータンさんを解放した。

い。実を言えば、この夜の出来事を、僕はあまり詳しくは覚えていない。

それは何故かって？

答えは簡単。

お師匠が僕の記憶を消したから。

先にも語ったように、けしもの仕事は外部の人には見せないのが鉄則。依頼主でも例外はない。

当然、僕もその対象だった。

全てが終わった後、紅鳥から渡された茶碗には、薔薇バラの香りの金色のお茶が入っていた。(これが忘却茶だったということ
は、最近になって知った。)

それを飲むようにとお師匠に命じられた。(自分で飲まないなら、お師匠がクチウツシで飲ませる というような脅しがあったことを、おぼろげに覚えている)

しかし、温情はあった。

お師匠は、消すのはけしもの屋に関わる記憶だけに止めてくれていた。

けしもの屋に関わることを消せば、ムータン婦人の正体についても忘れてしまいそうなのだけど、そこはどう記憶操作をされたのか、婦人と僕が交わした会話などは、全て覚えていた。

時々、自分の記憶が曖昧あいまいで、何か？足りない？と感ずることがあっても、それが？何か？を考えようとした次の瞬間には、何を考えようとしていたかを忘れた。

そんなことの繰り返しだった。

けれど、僕はそのような状態に特別疑問を抱くことはなかった。

ただ時々、遠くを見てぼんやりすることは多かった。何を見たかったのか、自分では分らなかった。

とにかく、そういった理由で、僕の記憶からは玄青老板も白獺も紅鳥も、けしもの屋に関することは消えて無くなっていた。

婦人が死の間際に話をしてくれるまで。

「ムータンさん　婆さん。　僕、元気にやっているよ。　婆さんのおかげで、今じゃ　けしもの屋　の一員に……まだ見習いだけど、なっただよ。　どう？　意外だろ？」

ムータンさんが人間、になって過ごした半年。

僕はムータンさんを「婆さん」と呼ぶようになった。　婆さんは僕のことを「小彩」と呼んだ。

祖父母のいない僕にとつて、婆さんは本当の婆さんのようだった。嫌味つたらしい憎まれ口に応戦するうちに、言葉づかひも「ですます」調から砕けた言葉に変わっていった。

学校の決めた訪問日以外も、しょっちゅう顔を出しては、あの晩枯れた花木の代わりに、素娘さんと「あの人」の墓を囲むように、色々な花の苗を植えていった。

時間が止まっていた院子のように華やかな花はなかったけれど、緑の戻った院子に立った婆さんは、すっきりと晴れたような顔をして、一本一本の緑に言葉をかけていた。

訪問後半は、公孫秀こうそんしゅうの粘りに負け、とうとう秀も一緒に訪れるようになった。

婆さんの淹れるお茶とお菓子はいつも美味しかった。

何度か、大井と光哥こうごまで加わって、賑やかな午後を過ごした。

もちろん、秀達には婦人の過去は話していない。　必要はないし、必要もなかった。

「紅鳥こうとり、耳栓準備オツケーだよ」

婆さんの墓の前に座ってそう告げると、紅鳥は嬉しそうに微笑み、僕には聴こえない歌を歌い始める。

海風が、紅鳥の髪や裾をふわりと揺らす。

白の裙子は白牡丹の花片はなびらように、風をはらんで柔らかかに揺れる。

今日は、婆さん　丹娘たんじょうと素娘すじょうさんが、ここで初めて「あの人」と逢った記念の日だと言っていた。

二人とは、もう色々話をしただろうか。

僕と話す時みたいに、憎まれ口ばかり言っではないだろうか。

「でも、その方が婆さんらしいのかな？」

思い出し笑いをしてしまう。

晴れた日には、院子に卓子つくえと椅子を出して、お茶と一緒にたくさんのお話をした。

やっぱり、僕が話すことが多かったけれど、せがむと、「まったく、しつこいね」と言いながら、

婆さんも自分の話をしてくれた。

時には、天界の話も聞かせてくれた。

色彩にあふれた、百花咲き誇る花園の話。

人界では考えられないような個性豊かな獣の話、人間と何処が違うのか？と思える、

生臭い神仙達の話。

想像の産物と想像していた世界の話を、僕は小さな子供みたいに楽しんだ。

話して聞かせる婆さんも、楽しそうだった。

もしかすると、僕に話しながら、婆さんは天界の景色を見ていたのかもしれない。

「婆さんの話聞くの、僕、とても好きだったよ。それに」

僕には見えない、僕の知らない世界。

そんなものについて、考えることも、知りたいと思うことも、以前の僕ならなかった。

そんな僕がいま、？摩訶不思議専門店？の如き店、けしもの屋に入り浸っている。

しかも、その店で働き、ゆくゆくは正社員になりたいとまで思っている。

自分の将来なんてほとんど決まったものだと、考えることすら放棄していた僕が、だ。

すべては、あの日、婆さん　ムータン婦人と逢ったことが始まり。

ほんのたまたま。　偶然の巡り合わせ。

でもこれが、？縁？というものなのかもしれない。

「それにさ、正直に言うのは僕だって？癪しゃく？だけど、僕も、楽しかった。　婆さんと一緒にいられて　会えて、嬉しかった」

一寸先に何かがあるかなんて分らない。

「人生」なんてものを語るには、僕はまだまだ早過ぎるし、知識も経験も不十分。

だけど、これからの長い時間の中で、あり得ない、起こり得ない、と思っていたことに、いくらだって出会う可能性はあるし、それらの経験から、様々な衝撃や感銘を受けることはあると思う。

見えているつもり、知っているつもりでいたことだって、まるで何もわかっていなかったことに、気付かされることもきつと多いに違いない。

僕は、僕の知らないことをもつと知りたい。

この世界のこと、僕の知らない世界のこと。

知りたいことに果てはない。

知るきつかけは、普段の生活の中にもあると思うし、自分が少し行動を起こせば、さらに多くに巡り合うチャンスを得るだろう。

それが、けしもの屋にいればきつともつと確実に、思いも付かない体験が出来るだろうし、普通では気付けないことに気付かされる。(婆さんの件ひとつで、目から鱗が五・六枚落ちただから)。

こんな経験、通常生活を送るだけでは、そう簡単に出来るものじゃないし、巡り合えたせつかくの縁を、活かさない手はない。

縁〓チャンスを最大限に活かすなら、けしもの世界に飛び込んで、この仕事に、自分も真剣に向き合ってみるべきだと僕は思った。

僕は玄青師匠や白獺、紅鳥みたいな特殊な力があるわけでもない、普通の人間だ。

だけれどそんな僕にだって、僕だからこそ、何かしら出来ることがあるかもしれない。

普通の人間代表として、人界で暗躍(?)するけしもの師を目指すことは、通常の職種を志すのとは違う面白い目標だと、今の僕は思っている。

何より初めて、自分から望んで飛び込んだ世界。

どんな困難が待ち受けているかなんて想像は付かないし、時々、命にかかわる危険も(主に店内で)あるけれど、決めたからには簡単に諦めない。

もちろん、学校や天涯の家での生活だって大切だし、手を抜く気はさらさらない。

「僕が目標達成できるか、婆さんも見ていてよ。いつもの、野次

を飛ばしながらでいいからさ」

柔らかな風を感じて顔を上げると、紅鳥が横にふわりと立っていた。

につこりと花の笑顔を見せると、僕の手を取り軽く引いた。

耳栓を外し、僕は立ち上がる。

しゃらんと鈴の清音が響き、周りの緑は音に応えるように揺れた。

「ありがとう紅鳥。花達に水をあげたら帰ろうか、けしもの屋へ」

え？

僕が何故、けしもの師を目指すのかがいまいち理解できない？

それは当の僕も上手く説明ができないので、また日を改めて、おいおいと。

> i 2 2 7 7 9 | 2 4 0 <

22 「墓参り」(後書き)

この話で《けしもの屋日誌》はいったん終了いたします。

ここまでお読み下さった皆様には
心から感謝の言葉を申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0743i/>

けしもの屋日誌

2011年4月27日12時48分発行